Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

593
9
593-19
12005015267 89

105-24

( )

武相叢書第一編

石野瑛校

亞墨理駕船渡來日記

武相考古會

593-19

例言

一　本書は武相叢書刊行の趣旨に基き、其の一篇として上梓刊行したものである。

一　本書に載錄するは石川鶴夫氏所藏の亞墨理駕船渡來日記と添田坦氏所藏の亞米利加船渡來日誌である。兩氏が校訂者の企圖を快諾されたことに對し、深厚なる謝意を表する。稱呼の便宜上前者を石川本と稱へ後者を添田本と呼ぶ。

一　文字、假名遣ひの誤謬と思はるゝものも活字の存する限り原本のまゝに記して傍訂を加へた。

一　原本中の片假名平假名の混用はもとより、註記の意味の取違ひなど誤謬明かなものも凡て原本のまゝに存した。

一　變体假名は原本のまゝに存したかつたが、活字の都合にて現行の平假名に改めた。

一　註記の中、枠や括孤に入れたるは原本の註で、傍註の中、肩に片假名のイ字を附けたのは石川本にあつては添田本、添田本にあつては石川本といふが如く異本の謂である。

一　原本中　後の戯書と思はるゝものと、外國語を片言交りに寫したものを省いた。

一　本書の校正は直接原本と照合して誤謬なからんことを期した。又校正には中島滿洲夫君が熱心に助力されたことを特記する。

亞墨理駕船渡來日記

目次

亞墨理駕船渡來日記に就いて　一―四
亞墨理駕船渡來日記　石川本　一―八四
亞米利加船渡來日誌　添田本　八五―一四〇

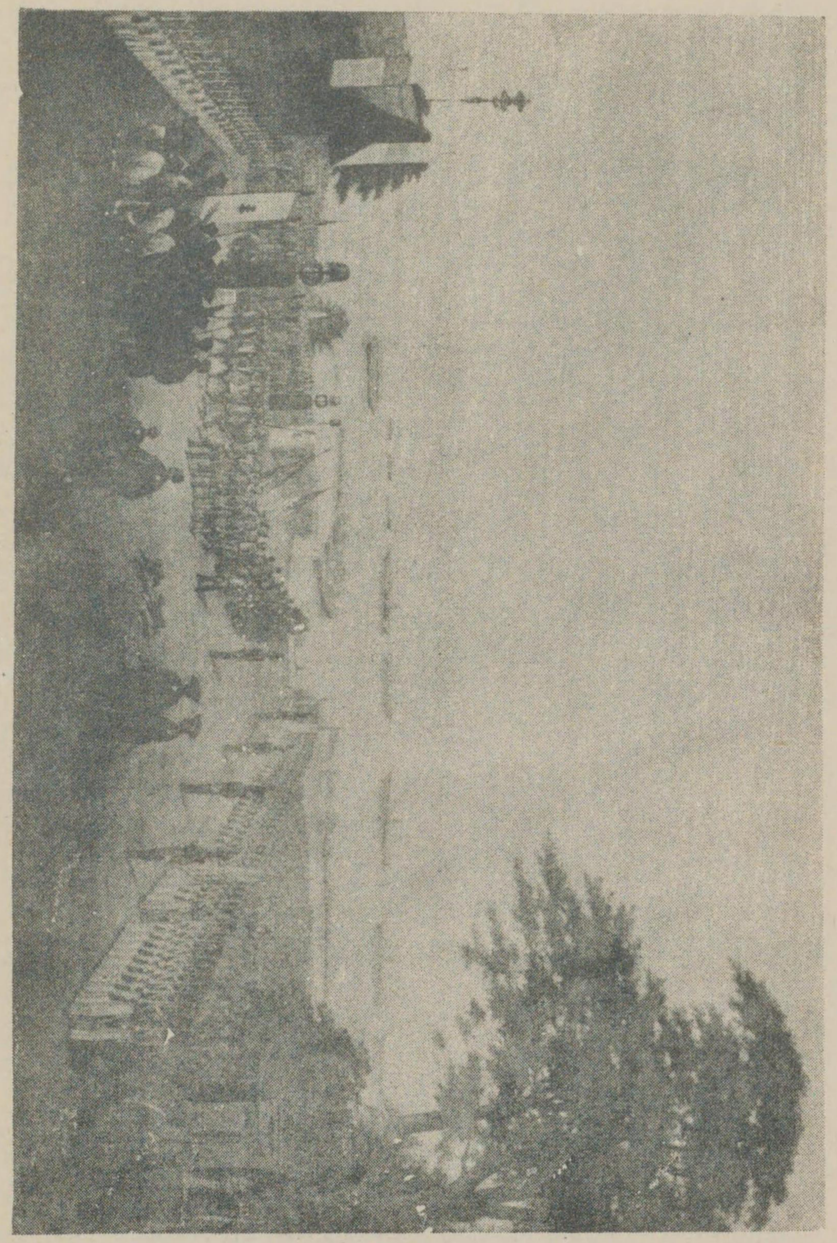
圖版

口繪

一　ペリー一行の横濱村上陸
二　米國水兵ウイリヤムの葬式
三　横濱應接場に於ける外賓饗應

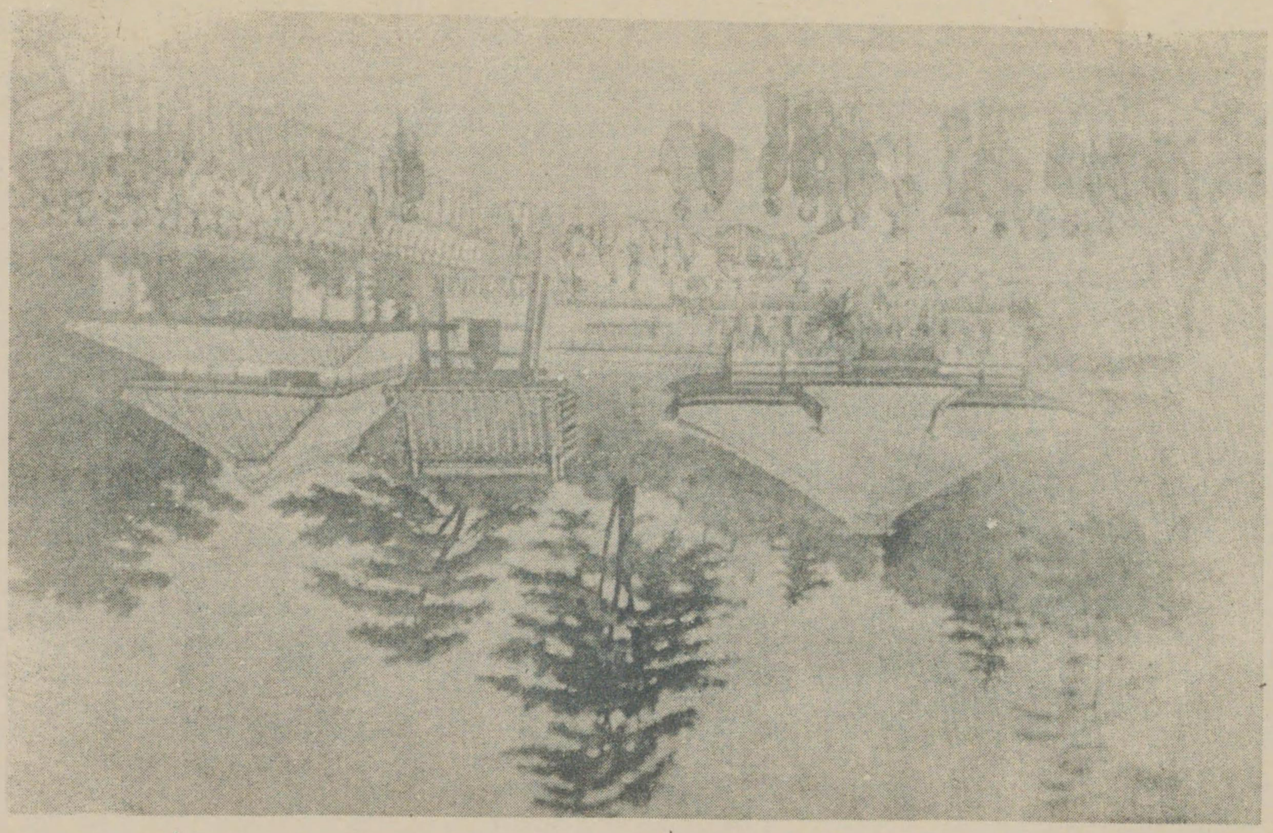
挿圖

四　石川本亞墨理駕船渡來日記
五　ペルリ肖像
六　駒形應接場之圖
七　ロベルト、ウイリヤムの墓
八　通詞ウリユムス山下にて蛤を取りし姿
九　昭映寫眞鏡圖
一〇　火輪車と階子（軌道）の圖
一一　天連關理符。連架（漢名傳信機）之圖
一二　世界略圖
一三　添田本亞米利加船渡來日誌
一四　ロベルト・ウイリヤムの墓



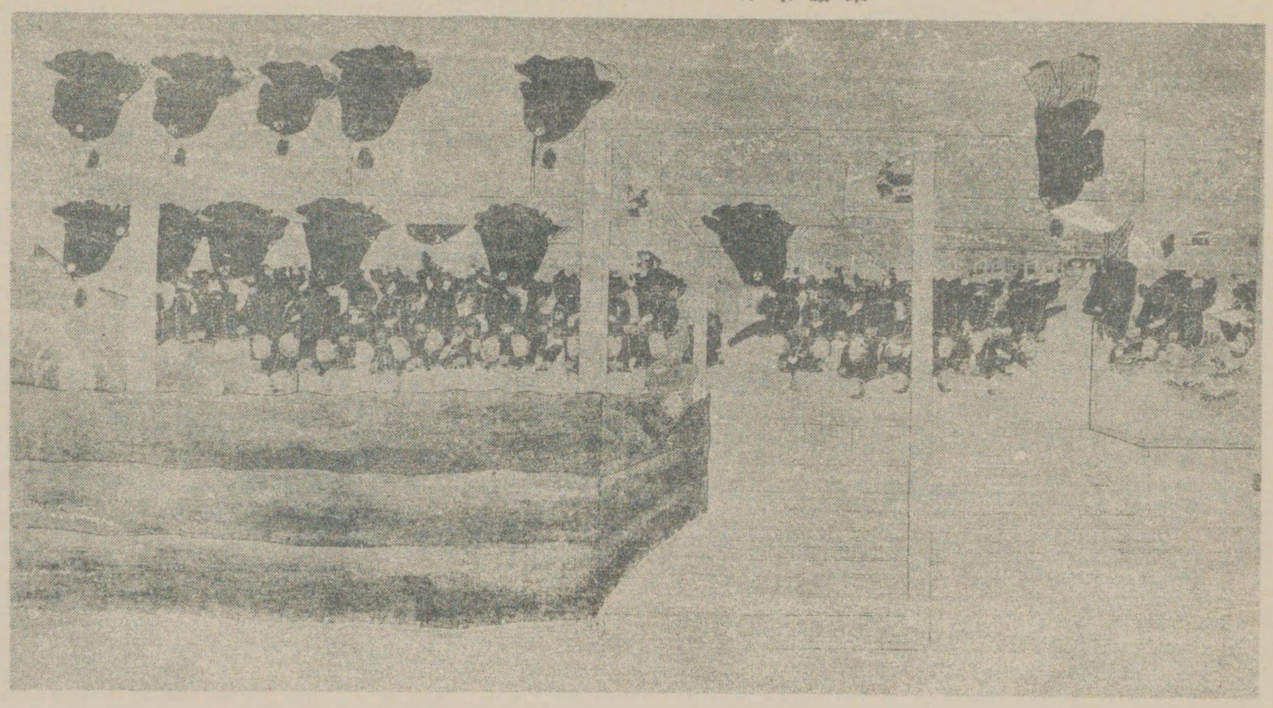
陸上村濱横の行ーリル

（原富太郎氏所藏）



式葬のムヤリイウ兵水國米

（神奈川縣所藏）



應鑒資外ゐけ於に場接應遼橫

（橫遼市圖書館所藏）

亞墨理駕船渡來日記に就いて

石野瑛

亞墨理駕船渡來日記は嘉永七年（安政元年）北米合衆國使節マッシウ・シー・ペルリが前年の約によつて來航した時に、我が國の士民が書いた日記である。即ち其の年正月十一日に伊豆大島沖に異國船が出現したといふ注進が、江川太郎左衞門によつて幕府に報ぜられたことから、數次の會見の後、三月三日に和親條約が結ばれ、同月十三日に米艦が横濱沖を解纜して下田に向ひ、同月十五日に應接場引拂に至るまでの狀況を日を追ふて詳細に記錄したもので、或は米人の葬式を敍し、或は外賓接待の有樣より、饗應の献立を掲け、献貢品目錄、公朝及諸府酬投物品目を錄し、特に外人の爲めに觀覽相撲を催し、其の出場力士の名を載するなど事細大となく記すところ能く當時の實情を察するに足る。而して兩書共卷末には渡來した船名等の數篇或は國書を附す。

横濱近郊に於ける此の種の記錄の私の知るものは、石川鶴夫氏所藏のものと、添田坦氏所藏のものと、石川幸作氏の藏せるものである。石川鶴夫氏所藏のものには奥書

に「嘉永七甲寅年春遊日、武州久良岐郡石川郷中村石川左近末孫石川和輔清宗寫置者也」とあつて、石川和輔は當時中村の里正で幕吏に接近の機が多かつたので筆寫することが出來たものと思はれる。この記錄は其の後和輔の次男なる石川左次郎が明治五年に分家の際に之れを携帶所有したもので、左次郎の歿後當主鶴夫氏の藏するところとなつたのである。此の記錄と全く同じいものを大正二年の秋、當時久良岐郡日下村（今横濱市中區笹下町）なる石川家の藏するものを見た。これは嘉永七年に幕吏が横濱浦賀間を往復の途、當時旅館であつた石川屋に宿泊した際に、同家の主人が幕吏の窃かに示したのを、請ふて筆寫したものであつたと傳へられて居る。今次本書刊行に際し、當主石川幸作氏を訪ふて數次之れを探したが所在が不明である。添田坦氏所藏のものは同氏の祖父知通の筆寫されたもので、所々に其の親しく觀察されたことや、實際に經驗されたことが記述してあるのが特に面白い。

懷ふに二百餘年の太平の夢を破つた黑船の砲聲は所謂晴天の霹靂であつて、どれ程當時の人達を驚かせたかは寔に想像の外であつたのである。隨つて目に見、耳に聞くもの凡てが珍らしくも奇しきものであつたのである。かうした珍奇な見聞を多少でも筆とる程の人はたゞ見流し聞ながしには出來なかつたのであつた。即ちペルリ日本遠

征記の横濱に於ける應接の條にも日本側委員の側には一人の書記が坐つて頭を下げた儘で、此の會見の經過をば細大洩さず、時には委員から助言されながら斷えず書き留めて居たとあつて、記錄をして居たことは言ふ迄もないし、また應接のことに關係のある幕吏や、諸藩の固人等の中にも種々珍らしい見聞のことを書き記したであらうし、更に村人の中にも半紙と矢立とを內懷から取出して何くれと書き留めたに違ひない。

かの日本遠征記にも何事にも好奇の耳を欹てゝ居た日本人は今度合衆國から齎した種々の珍奇なる品物や、巧妙な機械に唯々目を瞠つて呆れる許りであつたが、彼等は此の不思議な献上品を一々明細に調べて見たゞけでは滿足せず、大官や下士卒などの後に跟いて來ては嫌さず衣服まで詳しく注意し、條の付いた士官の帽子、靴、燕尾服水兵の帽子、ヂヤケット、ヅボンこんな物まで念能く調べるので、其の觀察の正確なことは、新形や新流行の型を探す仕立屋でも三舍を避ける位で、洋服の幅を測つたり長く柔い手で毛地を撫でたり、或は襟を直して見たり、又ポケットの深さを測つたり云々と述べ、又彼等が軍艦に來た場合は上官も從者も決して落ち着いて居たことなく隅々や角々を隈なく覗き廻り、又大砲の口を覗いて見たり、珍らしさうに小銃を檢めたり、帆索に觸つて見たり、短艇の寸法を測つたり、又熱心に機關室を覗き込んで機

關兵や水兵の忙しげなる蒸氣機關の運動をば側目も振らず注視するのであつたと日本人の觀察の精細なことを敍して居る。

更に同書には語を續けて彼等日本人は唯眼で視たゞけでは滿足せず何時も携帶して居る半紙と矢立とを內懷から取出して、寫生したり書き付けたりするのであつた。何れも著しく繪畫に趣味を有つて居る樣子で、繪畫や彫刻を示すと非常に悅んだが彼等の畫いたものは甚だ粗末な非美術的のものであつた。勿論此の人達は專門の繪師ではないから無理はないが、彼等は巧拙には頓着なしに各自自分の技量を振はうと斷えず筆を動かせて、亞米利加人の肖像を寫したり、又彼等に珍らしいと思はるゝ物は彼此の差別なく悉く寫し取るのであつたと言ふ樣な記述があつて、本書に收錄した樣な亞墨理駕船渡來日記の如きは其の一二で、此の他特にさうした題目を附けない私人の日記や記錄や寫生や戲畫なとが多くあつたに違ひない。それ等の史料は努めて蒐集し本書の續編としたいと思ふのである。

亞墨理駕船渡來日記

亞墨理駕船渡來日記

一嘉永七年甲寅亥亞墨理駕大合衆国船數艘
渡來荒川鉄治郎殿知行所武州久良岐郡横濱沖
碇泊いたし毎度上陸應接有之候ニ付前版
墨堀の日記を通し

正月十日亞只大島沖ニ異国船數艘相見ヘ
西伊豆代官江川太郎左衛門殿ハ江戸ヘ

亞墨理駕船渡來日記

一　嘉永七年甲寅春亞美理駕大合衆國船數艘渡來荒川欽治郎殿知行所武州久良岐郡横濱沖ニ碇泊いたし毎度上陸應接有之候其前後荒増しの日記左之通り

正月十一日豆州大島沖え異國船數艘相見え候由伊豆御代官江川太良左衞門殿ゟ御注進御公儀ゟ御上意有之海岸御固國持大名の面々並ニ海岸掛り御役人左之通

品川一臺場ノ二臺	松平誠丸	高拾七萬石	武州川越
當時上總富津	松平肥後守	高貳拾三萬石	奥州會津
三臺場	松平下總守	拾萬石	武州行田
大手	藤堂和泉守	三十貳萬三千九百	勢州津
鐵炮州	酒井雅樂頭	十五萬石	播州姫路
當時品川ニ居屋敷上總海岸物掛	松平陸奥守	六十二萬五千六百石	仙臺
増上寺	前田加賀宰相	百二萬二千七百石	金澤
芝浦	松平越後守	十萬石	津山

高輪	嶋津薩摩守	七十七萬八百石	鹿兒島
御殿山	松平越前守	三十二萬石	福井
洲崎	松平越中守	十一萬石	桑名
鈴森	鮫州松平隱岐守	十五萬石	豫州松山
濱川	山内土佐守	二十四萬二千石	高知
羽田	蜂須賀阿波守	二十五萬七千八百石	德島
金川	松平兵部大輔	八萬石 十萬石格	明石
本牧	松平相模守	三十二萬五千	取島
同	同格之進	三萬石	同新田
同	同淡路守	一萬九千石	同新田
太田 横濱應接場備へ	小笠原左京太夫	十五萬石	小倉
横濱 應接場	眞田信濃守	十萬石	信州松代
金澤	米倉丹後守	一萬三千石	金澤在所
相州三崎	毛利大膳太夫	三十六萬九千	萩
同三崎 武ノ坂田	井伊掃部頭	三十五萬石	彦根

浦賀 海岸惣掛	細川越中守	五十四萬石	熊本
豆州眞鶴	大久保加賀守	十一萬三千石	小田原
下田 出張り	水野出羽守	五萬石	沼津
房州洲の崎	池田内藏頭	三十一萬二百石	岡山
同勝山	酒井安藝守	一萬二千石	勝山在所
同館山	稻葉兵部少輔 驛	一萬石	館山在所
武州大師河原	立花飛彈守	十一萬九千六百石	柳川
上總久留里	黑田豐後守	三萬石	クルリ在所
同大瀧 海岸	松平備中守	貳萬石	大瀧在所
同字地	阿部駿河守	一萬六千石	カツサ佐貫
同鶴牧	水野壹岐守	一萬五千石	ツルマキ在所
同飯野	保科彈正忠	二萬石	カツサ在所 館野
同勝浦	大岡兵庫頭	二萬三千石	武州岩槻
同一ノ宮	加納備中守	一萬三千石	在所
下總毛見川	堀田備中守	十一萬石	佐倉

同　濱　村　森　川　出羽守　一　萬　石　下總生實
同　銚　子　松　平　右京亮　八萬貳千石　高崎
相州　箱　根　藤　堂　佐渡守　五萬三千石　勢州久居
鮫　洲　御林町　間　部　下總守　五　萬　石　越前鯖江

右は海陸御備向え固人數差出ス面々外ニ海岸掛　御老中ニハ
阿部伊勢守　牧野備前守　松平伊賀守　松平和泉守　右四人　若年寄ニハ
本多越中守　遠藤但馬守　本庄安藝守三人
大目付上席兼町御奉行　井戸對馬守　大目付同　石見守　柳生播摩守
御目付（應接掛目代）鵜殿民部少輔　松平十良兵衛
浦賀御奉行　戸田伊豆守　同（應接掛）伊澤美作守　御徒目付　中臺權太郎　平山鎌次郎
御小人目付山本文之助山本覺太郎前田右太郎吉岡元平　右は海岸御用掛り
御代官海岸掛り
武州相州豆州駿州　江川太良左衛門
武州相州　望月新八郎
同　勝田次郎

大島ニ暴風ヲ避ク

武州下總　齋藤嘉兵衛
同　竹垣三右衛門
房州上總下總　佐々木道太良

右之通り海岸妨禦御下知有之銘々持場え固人數差出可申用意專也（是ハ昨年丑の十一月中御申渡し之義有之候也）
然ルニ十二日二度目注進有之候ニは昨日大島沖ニ相見申候異國船今日は最早相見不申
此段御達申上候早注進有之右ニ付途中え出候御人數此樣子聞歸る輩も有之就中本牧の
固め因州侯の兵粮米江戸ゟ積來り候處最早御不用之趣ニ而江戸え積返しニなり申候右
之通りニ候得は海岸異國船の評判種々ニ申十一日ニ豆州大島沖え見候は異船ニ而は無
之見違と申もあり又は異船豆州沖え來るニ相違なし乍併日本の武威ニ惶れ早々歸帆い
たし候と申もあり十二　十三兩日は取定たる事もなく狐狸迷惑せられし者の如くに皆
皆呆然たり

ペルリ日本遠征記ニハマセドニヤン號ノ坐礁ヲ記シ其ノ地點ハ鎌倉近在ノカワ

一　十四日　十一日ニ大島沖え見え候異船何方ニ有之候や今朝浦賀御番所乘拔ニ仕內
海金澤の小芝と申處の沖え壹艘碇泊ス此船夜中ニ海岸の埋岩（ミナヅコイシ）ニ乘掛け鋪（シキ）板破損仕候樣
子ニ而今日海上ニ而船を横ニ片向け船の腹板等處々造作仕候其仕懸け珍らしき事ニは
近處の浦人小舟ニ而見物の者多

ツウラトアリ添田本ニハ坐礁ノ地點ヲ松輪三崎ノ海岸水中ノ岩ト記セリ

★1 レキシントン號バンダリヤ號サスクハナ號マセドニヤン號

★2 ミシシツピー號ポーハタン號サウサムプトン號（先着）

★3 亞米利加碇泊地八王子トハ本牧ノ小字名ナリ

★添田本ニハ鎌倉由井ケ濱トアリ

一　十五日　昨夜中浦賀ゟ御觸書左之通

異國船碇泊の場處え小舟ニ而猥りニ近き候者も有之哉ニ候右は　御國法を不辨如何事ニ候已來右體之者見請次第捕押嚴重ニ可申付候右之趣浦賀ゟ神奈川迄早々不洩樣可相觸もの也

寅正月十四日

相州浦賀ゟ武州神奈川迄

浦賀御役所　　浦々　名主　年寄

一　十六日　今日四ツ半時異船四艘浦賀御番所ヲ乘拔ケ入海同所（此處蟲喰）小芝沖ニ碇泊ス引續キ貳艘同所え來り碇泊ス都合七艘ニ成り候★1★2

今日浦賀大津の御固細川侯の御人數場所え到着ス因州侯（本牧ノ固）の御固人數先手今夕五ツ時着（此處蟲喰）

昨年六月異船浦賀關所前入海之節者海面水霧深く漠々の中を容易ニ乘入ル尤其節者房岸ニ寄而入當春ハ微霰少し吹散り水面薄陰の中自由自在ニ乘入事實ニ不思儀なり彼の浦賀の峽港ハ日本人每度暗記の者も容略は乘入事を不得異船ニして快然として入津仕候事實ニ妙也昨年も當年も日本人船中ニ乘組居候由專評說仕候恐くは實ニ然ル呼

一　十七日　異國船の中ゟ小艇四艘ヲ以本牧沖え來り內壹艘八王子と申ス磯え來岩ニ

落書ス　　淡本ハ横ニシテ右之通リ

阿蘭陀文字ニ書申候此邊は因州侯御備場ニ候得は右文字寫し取早舟ニ而江戸御達し

一　十八日　今日浦賀御奉行應接組與力の衆ヲ以★九里濱え引戻し應接有之旨御掛合候由異人ゟ申ニは類船も有之追々參り候得は內海ニ碇泊いたし相待申候由申立候樣子

一　十九日　金澤海岸え御案內有之應接場御見分有之候得共地理不都合ニ付異人ゟ御斷申上候由

一　廿　日　異人小舟ニ而小芝の磯邊龜木と申所へ上陸し落書仕候　淡本を横ニして可見左ゟよむ

右之趣其懸りゟ早々御達し

一　廿一日　異國船壹艘本牧十二天の鼻迄參り直ニ小芝え引返ス今日神奈川の御固め明石侯の御人數同所へ着ス

一　廿二日　上總富津の御固會津侯の御人數異船入海の後數日樣子不相分ニ付富津ゟ小舟數艘ニ而本牧迄爲見置來ル

一　廿三日　先達中所々海岸の岩ニ落書仕候其趣御取調有之御觸之趣左之通

來ル廿五日小芝沖滯留之異船ニ而亞美理駕國王誕生（大統領イ日）ニ付右七艘之異船ニ而祝として空炮十六七發宛放之（打イ）候間聊心配之義ニは無之候條動搖致間敷もの也

ペルリ日本遠征記ニハ日本側ヨリ高官浦賀ニ着セシニヨリ其處ニテ會見シタシト申シ來レルニ對シコレヲ拒ミタル返書ヲ出セシコトヲ記セリ

ペルリ日本遠征記ニハ此ノ朝早々日本側ノ役人ガボーハタン號ニ來艦セシコトヲ記セリ

二月十九日（一月廿二日）此ノ日モ亦日本側役人ボーハタンニ來艦セシコトヲ記セリ

★1伊澤美作守政義

★2ペルリ日本遠征記ニハ二月廿一日（一月廿四日）ニモ日本側役人ガボーハタンヘ來艦セシコトヲ記セリ

★3初代大統領ジョージワシントンハ一七三二年二月廿二日ノ誕生ナリ

寅二月廿三日

一 ★2廿四日　事なし

一 廿五日　天氣快晴亞美理駕國王誕生日之由異船海上ニ而大筒を放ス其音夥多し筒音一發ニ而玉音四聲響有之秘傳火藥の袋ニ仕掛け有之傳受略之後の處ニ記ス

御觸之趣承知之者差して驚義ニも無之候得共二三十里も遠方の者は最早合戰も始りし樣ニ心得實ニ心配セり。其音下總銚子迄も能聞たり

一 廿六日　事なし

一 廿七日　小芝（イ柴）沖の異船小舟ヲ以海の深淺ヲ斗リ其跡ゟ大師河原羽田沖へ移泊ス

一 廿八日　羽田沖の異船ゟ小舟四艘内貳艘ハ神奈川え行き貳艘は横濱え來ル浦賀御用船壹艘御奉行組與力香山榮左衛門殿御案内ニ而應接場御定御見分有之異人三十人斗リ上陸ス香川氏村役人を御招き當村之内近き所ニ寺院は無之哉と御尋有之ニ付答而申けるは眞言宗增德院と申ス院有之候と申上候得は是ゟ何程か有之候や貳三丁も有之候由申上候得は夫ニ而は異人不都合ニ可有と有之夫ゟ海岸ニ添北之方へ參り御見分有之

伊豆　★1美作　名主　年寄

ペルリ日本遠征記二月廿二日（一月十九日）ノ條ニ華盛頓誕生祭ニ日本役人ヲ夫人同伴招待セシニ彼等ハ冗談カ揶揄ニテモアル如ク可笑シガリシコトヲ記述セリ

ペルリ日本遠征記ニハ二月廿三日（一月廿六日）香川榮左衛門ガパアンダリヤ號ヲ訪ヒシコトヲ記セリ

添田本ニハ異人ガギヤマンノ德利

所ニ當村北の端ニ字駒形と申へ參る時異人此所可然と手振り仕候間然は其所ニ其方ニ而印可致と申候得は異人應接場所印仕候先達ゟ段々御心配之應接場も先横濱と決着仕御役人一旦は御安心ニ有之候樣子異人の内貳十人斗村内歩行いたし羽田の本舟へ歸り申候

横濱村中ニは種々取沙汰いたし今日場所御見分有之候上は日本と異國と合戰の手初メは此横濱可成然時は大筒ニ而家藏等も立待燒失可致扨々心配之筋なりと噂さ致し居候處え夕暮頃今日神奈川へ參り申候二艘横濱の海邊え舟を着け同道の異人今以村内ニ可居とそんじ處々尋廻て尤劍附の鐵炮持參の事故里人大ニ驚き最早合戰も始りし樣ニ心得手重道具は土中ニ埋ミ手輕き品と金錢は人々他所へ持搬上下渾亂大方ならす安き心は更ニなかりけり後ニ思出し候得は馬鹿ら敷咄もなれとも實ニ其夜は何れも膽を消し候者多し

一 廿九日　異人小舟ニ而本牧八王子の鼻へ參り岩ニ落書ス（RE 1855）右之趣早々達しニなり此字ハ明日ゟ横濱え上陸仕候と申心之由

一 二月朔日　羽田沖の異船横濱え來る今日より已來朝暮音樂仕又大筒一發宛尤大筒は空炮也

ニ入レタル酒ヲ飲ミ盡シ明キ徳利ヲ見物人ニ遣スヘキ手眞似セシガ誰モ受取ラントスル者ナカリシコトヲ記セリ

ペルリ日本遠征記ニ二月廿七日ニ全艦隊ヲ横濱ノ前面一哩以内ノ所ニ一列ニ並ベタコト等ヲ記セリ

添田本ニ記載アリ參照スベシ

ペルリ日本遠征記ニハ三月二日（一月四日）香山榮左衛門ノポーハタン來艦ノコトヲ記セリ

★1 ペルリ日本遠征記ニハサラトガ號ガ非常ナル困難ヲ冒シテ到着セルコトヲ記セリ

★2 八日

一 二日 今日ゟ横濱浦の内字ハ駒形と申處ニ應接場御普請始る尤小切組等は浦賀ゟ積來ル異人ゟ應接急候間諸工人大勢ニ而割普請同様ニ大急きニ御仕立

一 三日

一 四日 今朝相州松輪崎沖え異國船一艘見へ申候由 今日迄に應接場出來

一 五日 神奈川宿へ御出張り浦賀御奉行應接掛り伊澤美作守殿ゟ江戸御注進（イ候）

昨日相州松輪崎沖え異國船一艘碇泊いたし尤亞美理駕類船之趣ニ而大筒も貳拾挺扣（イ据）有之風模様次第早速江戸表へ罷越候段手眞似いたし候趣今朝浦賀表ゟ申越候間相心得此段申達候

二月五日 美作

猶應接組之者爲乘込相成丈引留置申諭し中ニ御座候得者（共）類船ニ御座候故行屆申間敷（イ旨）と申來ル（イ候）

昨日迄ニ應接場不殘出來仕今日應接有之處異國の使節提督彼理病氣之由且異國船一艘新ニ渡來いたし尚又眞田小笠原の兩侯御固人數到着不仕彼是故障有之今日は延引 今夕眞田侯御人數先手來ル

一 六日 今日異★1船一艘新入海横濱沖同所ニ碇泊仕候眞田小笠原御人數先手又着ス

一 七日 今日眞田小笠原兩侯御人數着揃イ明八日應接有之御支度之處異人彼理病氣今以快氣不仕又々延引

一 ★2今日御儒者林大學頭町御奉行兼大目附上席井戸對馬守浦賀御奉行應接掛伊澤美作守御目附鵜殿民部少輔御認役松崎滿太郎御徒目附平山鎌次郎御小人目附山本文之助通詞森山榮之助其外與力同心之衆應接場出來爲見置神奈川ゟ御舟ニ而御越し有之異人も十六人場所爲見置上陸ス彌々明後十日初應接有之由ニ取極異人え其趣御申渡有之今日浦賀御奉行ゟ江戸え御達シ左之通リ

明後十日神奈川沖滯留之異船ニおゐて應接之爲祝炮と右八艘之内ニ而空炮五十發程打放し候間炮聲等も響キ可申候得共空炮之事故心配之義無之候間動搖致間敷候尤雨天日送之積リ候條右之趣不洩樣相觸可申もの也

二月八日 美作

伊勢殿

大目附

御目附 江

一 九日 眞田小笠原の兩侯御固人數え御備場所御渡し有之由眞田侯御固場横濱村

遠征記ニハ三月七日（二月九日）香山榮左衛門ガ中島三郎助ト同道來艦セシコト同艦乘組漂流日本人サンパッチ（生國安藝國廣島生年廿三才倉藏ガ日本役人ノ前ニ出テ恐怖戰慄セシコトヲ記ス

此後子細アリテ大筒ハカクシ有之

中西南字中島と申所小笠原侯の御備場所横濱村ゟ北西字洲干辨天の南駒形應接場西ニ當ル右之通り御持場

一　十　日　今日初應接右場所掛り御役人　御儒者林　大學頭　大目附上席兼町御奉行井戸對馬守　浦賀御奉行應接掛り惣取締伊澤美作守　御目附鵜殿民部少輔　御認役松崎滿太郎　御徒目附平山謙次郎　中臺權太郎　御小人目附山本文之介　山本覺太郎前田右太郎　吉岡元平　通詞森山榮之助　堀辰之助　名村五八郎　其外浦賀應接掛支配與力黑川嘉兵衛　辻茂左衛門　同御普請掛與力合原操藏　同心齋藤太良助　應接掛與力香山榮左衛門　中島三良助　松村源八　合原猪兵衛　豐田多太市　御本陣詰同心太田良平　服部健藏　異人附添同心今藤良次　柴田新助　中村此右衛門　大久保藤次郎　今西幸藏　藤井清三郎　福西政次郎　中村市之丞　渡邊文左衛門其餘江戸浦賀兩御同心貳百騎斗應接所前後左右を警固ス　遠卷御備拾五萬石豐前小倉城主小笠原左京太夫陣代此固人數辨天嶋東北ゟ西南の方へ三階菱の紋附たる幕長ク引張り家の印附る旗指物等數多拾萬石信州松代城主眞田信濃守陣代此固人數駒形の南中島ニ幕を張り家の紋六文錢の旗指物兩陣共ニ幕中ニは大筒數多備え小笠原の陣後野毛川の渡し御用之外渡船を留眞田の陣ニは海岸波打際ニ番所を置き御用掛之外出入の人を改む時ニ嘉永七年

萬事異人ヘハ嚴重をハ不見表向ハヒソカニ仕候

★添田本ニハ二十八艘トアリ

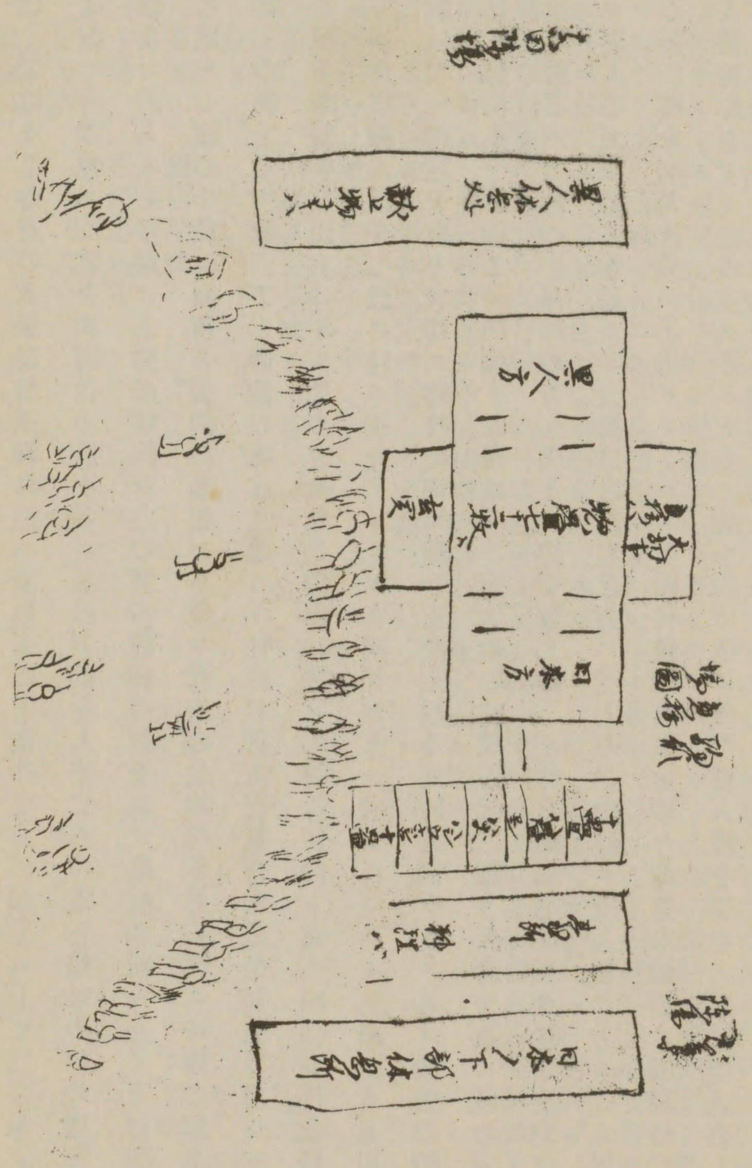
ペルリ日本遠征記三月八日ノ一節ヤガテ十一時半ニナルト充分ニ武裝シタ殆ント五百人ノ士官、水兵水夫其ノ他ノ參加者カラ成立ツタ一行ハ、司令官ブッカナンノ指揮ノ下ニ二十七隻ノ短艇ニ分乘シ、一列ヲ作ッテ仲春十日の朝早き青海か原の東風吹嵐ニ六文錢と三階菱旗翻飜す靡セて事嚴重見エける

時刻至れハ海上の大船ゟ保命艇と申ス小舟貳拾六七艘★追々陸地ニ乘り寄異人其人數凡千人斗下官三百人斗小舟ニ殘り不上陸　上陸の異人凡七百人斗各々腰ニ短炮を着け手ニ劍附の鐵炮所持其內鐵炮方別ニ三百六拾人有之內百貳拾人淺黃羅紗の衣白の鐵炮だすき白の玉袋貳百四拾人は黑羅紗の衣たすき玉袋は白其餘の異人も皆黑羅紗也尤筒袖衣は腰シ切り裳の方ハ同し色の股引踏を臥キ頭ニ[redacted]圖の如キ冠を載き御玄關前ゟ左右え並能ならび申候其間ニ三ケ所別ニ肩へ牡丹金具着たる者貳拾人斗又其牡丹ニ房下りたる者十人斗鐵炮方は其間々ニ淺黃貳人黑貳人宛立入又中央ニ軍議指麾役と見候異人三人黑の裝束ニ肩ニ牡丹の金物房下り左の股引ニ三四寸猩々緋の割を入冠の上ニ鳥毛を指し劍を拔而行列の指圖仕候此異人の指圖ニ隨ひ數百人の異人行列前後左右鐵炮の上け下け自由自在分厘も不違左右仕候樂人笛太鼓四組ニ分居はやし致ス　扨能時分海上ゟ白き小舟ニ而連鑾と申かい棹ニ而舟を推させ來りて上陸スル者は亞墨理駕大合衆國使節鎖差大臣本國ノ師船兼管日本ノ海水師提督被理現留伯ペルリ

正々堂々ト岸ヲ指シテ漕寄セタ云々ト記セリ

ペルリ日本遠征記ニペルリガボーハタン號カラ短艇ニ乘込ムヲ合圖ニマセドニアン號ヨリ十七發ノ禮砲ガ發タレタ云々ト記セリ

★鎖差トアルハ鈦差ナラン



★艸搨トアルハ鎧ノ草摺ノコトナラン

ペルリ日本遠征記ニペルリノ入館ヲ合圖ニ二十一發ノ皇禮砲ガ沖ノ軍艦カラ鳴リ轟キ續イテ林大學頭ニ對シテ十七發ノ禮砲ガ發タレ旗艦ポーハタンノ檣頭高ク横線ノ入ツタ日本國旗ガ掲ゲラレタ云々ト記セリ

身の丈六尺五寸肉太り面色櫻色鼻筋高ク眼光尖く金の色あり髪毛薄色の金色ニ而至て短く鬚はなし惣身の衣裝烏羽玉羅紗袖ハ筒袖帶の下迄伴てんの如くニして二の足ゟ上之四寸斗の處ニ而裳を留同色の股引從ニ金の割筋を入半てんの裳と筒袖の口の處飾り筋金ニ而入ル右の腰ニ小筒の鐵炮を左の腰ニ龍頭の劍を佩ヒ眞紅の紐を長く下け其端の處右の腰の小筒ニ而留る帶鈎ハ金銀ナリ肩ニ牡丹の金物房下る胸元ニ★艸榻の如き金細工の物を當て胸の下ゟ帶鈎の處迄二通リニ牡丹の貫留有數合而貳拾粒壹ツ壹ツニ鷲の紋を附舟ゟ立出右の手ニ笠ぬぎ持たる樣体ハ實ニ大國の使節ト見へぬ扨使節上陸致し候得は樂人はやし致ス時ニ副使アヽタムス同ブカナン通詞ウヲリユムス右三人者出迎致ス尤一同冠を取り會釋ス惣將使節ニ隨ひ玄關え通る此時通詞ウリユムス願書の箱と見え候箱貳ツ持參る一同揃イ候得は沖の方大船の八艘不殘三廻り大筒を放ス磯の方貳拾八艘之內拾艘の小舟沖の方へ向イ大筒を放し候　一昨日御觸有之候應接之祝炮之由。異人の大筒放スを見ルニ大筒口之處右之方ニ壹人左之中程ニ壹人後の方ニ壹人居て火蓋の繩を引尤火繩ハ不用ドントロスニ而仕候扨火蓋を切り炮聲未離筒ニ右筒口の壹人筒掃除をする左の壹人直ニ火藥の袋を投け込ム後の壹人繩を引右之通三度込返し打放す始終筒口の壹人ハ的ニなりたる如し天地ニ響く炮聲ニも不恐平氣ニ而餘他見致し

居候和人ノ一箇放ス間ニは十筒も十五筒も放シ可申右之通り行列樂調祝炮等終り候而今日應接之席へ通る異人ハ惣將使節鎖差大臣本國の師船兼管日本の海水師提督被理現留伯ペルリ。副使美獅子飛ノ船將兼知大學士アヽタムス。同副使蘇駿鬼飛能惡ノ船司ブカナン本官被理。次ニ亞美墨理駕本國の大學士兼領大日本ノ通詞選擧美士被理ウリムユス右四人　日本方御出席御儒者林大學頭　大目附上席兼町御奉行井戸對馬守　浦賀徇奉行應接掛伊澤美作守　御目附鵜殿民部少輔　通詞森山榮之助右五人外御役人別席御扣有之　應接の譯並ニ願書秘事恐有之不記之追々知ル、

今日異人え饗應献立の寫し左之通。

一長尉斗　敷紙三方
一盃　內曇リ三ツ組ノ土蓋
一銚子
一吸物　鯛の菱肉
一干肴　松前壽留女
一中皿肴
一猪口

添田本ニハ中皿(ハマチカレイ、青ノ山椒)トアリ

猪口唐草カレイ、同防風山葵セン、トアリ

一吸物　花の千巻鯛　篠大根　粉山椒
一硯蓋　紅竹輪蒲鉾　伊達巻壽し　鶴ノ羽盛　花形長芋　昆布セン　九年母　皮茸
　　セン

一吸物　鞍掛平目　欵冬花のセン
一丼　車老海　押銀杏　精松露　目打白魚　篠うと
一大平　肉寄串子　白魚小菊　生椎茸　細引人參　火取大根　寄山椒　花菜　自然
　　生大和煮　土筆のからし漬
一鉢肴　酢取のしよふが　鯛筏　鯛身二色さし　風干ほふく

一茶碗　鴨大身　竹の子　ミョウガ竹のセン
一差身　平目生作　めじ大作　生海苔　鯛の小川巻　若紫艸　花山葵
　　猪口　土佐醤油　煎酒　からし

二汁五菜本膳

添田本ニハ下官ノ部トアリ

一鱠　鮑さし作　糸赤貝　白髪大根　漬椎茸　栗生姜　葉附金柑
一汁　菜ノ摘入　布袋しめじ　千鳥午房　二葉の菜　花うと
一香物　奈良漬瓜　味噌漬蕪　篠巻菜　山椒房花知者
一煮物　六ツ花子　煮抜豆腐　花菜

二膳

一蓋　蝦味噌　小金洗鯛　寄海老　白髪長芋　揃三ツ葉
一猪口　花いか　鴨麩
一臺引　大蒲鉾
一焼物　シヲ鯛

下部

一吸物　吉野魚　玉の露
一盃　一銚子
一小皿肴　平目作身　花生姜

一通　湯　水　以上

菓子

一落雁（波リ）　五寸　三寸巾　　一阿留餅（アルヘイ長）　六寸　四寸巾

右は惣一同え被下候　右之料理書付江戸ニは紛しき献立右有之候得共此献立料理場直

寫し

百川茂左衛門扣

込返シナシの傳手別本ニ記ス

一　十一日　黒船中病死の者有之候ニ付願濟之上ニテ今日葬式有之候其次第左之通り

小船三艘ニ而横濱村字矢戸と申處ヱ舟を着け鐵炮方樂人舟ゟ出候得は陸地ニ而はやし

初候舟中ニ而棺をかき揚る追々異人上陸ス一番鐵炮二人次ニ三人次ニ貳人都合鐵炮七

挺次ニ笛壹人太鼓壹人塔婆持貳人僧ニ似たる衣を着ス異人壹人次ニ棺持四人手傳拾人（此人上官ナリ三月十日ニ初テ知ル）

都合貳拾五人路次の案内として浦賀與力合原操藏異人不殘上陸いたし道々もはやし仕

參り候處眞田侯御馬屋の近邊通り候時聞馴見馴不仕異人異形の出立且笛太鼓の音ニ驚

數十疋の馬一度ニ跳蹴躍（ハネアドリ）大騒動仕候夫ゟ葬所（ヘ）ゟ參リ磁石ヲ以方位ヲ窺イ首ヲ丑寅の方

えいたし半分程埋ミ候時鐵炮方の内壹人一聲ハアト申シ手を上け候得は六挺の鐵炮一

度ニ穴の中ヱ打放ス事三廻也但シ玉火藥込返しなしニ三度出ス尤火繩ハ不用ドンドロ

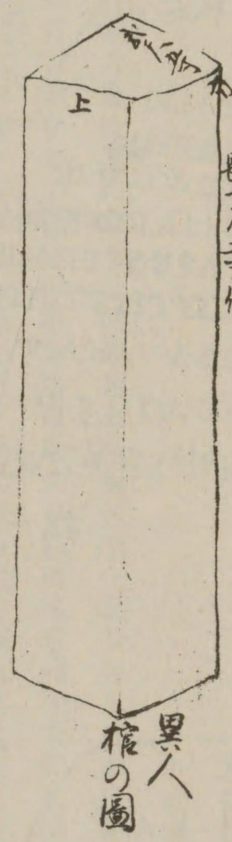
ス右鐵炮の音六挺の筒響一度ニして少も遲速無之候希代（ケダイ）ニ能ク調練ス扨埋ミ候前ニ右

僧衣の異人祭文を唱ヱ申候　當村増德院上人も寺内同様の場所ニ付立合諷經致遣れ候

右之上人異人の只今讀ミ候品何の譯合記し有之候祭文かと鳥渡借用いたし御覽有候所

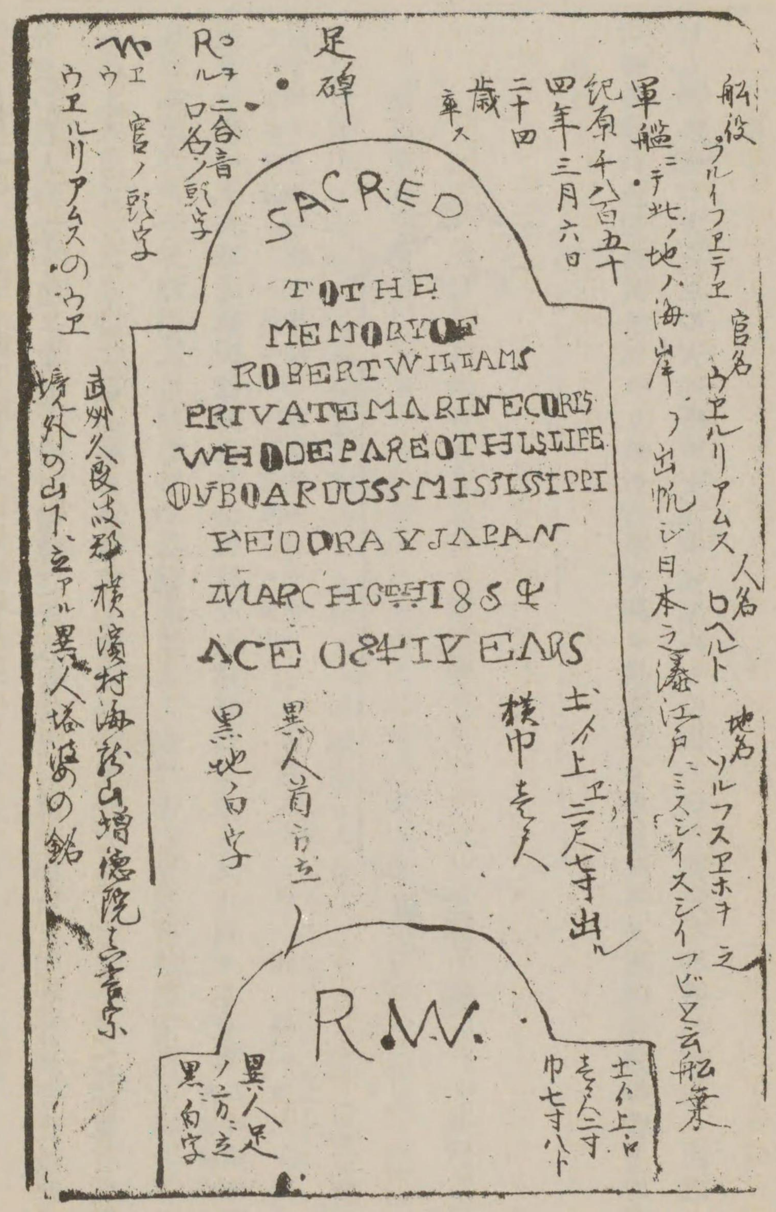
極々細字ニテ分不申異人心付自分の目鏡を上人えかけ進ん申候葬式相濟歸る路々前の

通りニはやし仕候尤眞田侯御馬屋處ハはやし休行過了後ニ又々はやし仕候（其後右葬式の時讀候祭文の小本海邊ニて小兒ヒロイ候を見ルニ蘭字極々細字ニ而一通之目鏡ニ而は分り不申候）



唐艸の淺黄色の打敷ニ包ム。首の方少々高ク致し埋ミ申候此異人本國の方へ首をさし

埋と承る首の方と足の方ニ塔婆を立申候黑ぬりの板ニ白の蘭字右塔婆の圖左ニ記之



一　十二日　御代官御手附方ゟ御觸の趣左之通

異國船滯留中漁業等は平日之通り相心得尤異國船近所え近寄申間敷事　右之通之御書付ニ候間得其意漁師幷ニ積荷船渡世之もの等異船近ク乗寄候稼無之様嚴重ニ取締方可致候此廻狀早々巡達留り村ゟ可相返候以上

寅二月十一日　　齋藤嘉兵衛手附

中村鍵之助
杉浦武助

芝生村ゟ杉田村迄
右拾四ヶ村役人中

一　今日異人犬を曳連れ來る毛色薄赤ク形甚タ小シ狐の如し日本の大犬澤山ニ居合候得共一切此方ゟ喰合等不仕候不斷見馴ぬ異犬ニ候得は却而大犬恐る様子然共先方ニも大犬ニ恐れ候ニや途中ニ而目を廻し已ニ死んといたし候異人共何ニやらつぶやきながら曳き返る彼の國の犬皆かよふ小形の由尚又日本の如く白黑の斑は無之由此犬尾なし

一　十三日　今度異船乗組の内ニ廣東ノ羅森ト申ス異人有之時々上陸ス亞美理駕人とハ姿不同髪の毛も至而長候得共頭の頂上ニ而少シ髪を殘し餘は不殘剃り申候殘りの長髪を奇麗ニ組後の方え下け申候唐土南國廣東の產ニして當時亞美理駕船ニ乗組いたし

添田本ニハ異人遊歩ノコトヲ記セリ

候由此風俗の異人澤山ニ乘居申候其内ニ此の羅森又向喬と申者詩文の達者書も美筆也

其二三首を記

群峭碧磨天逍遙不計年撥雲尋古道倚樹聽流泉　　廣東　羅森

春月題于横濱公館

火船駛向粤西東此日登程霽色融歷覽層山情不盡遙看濶海目無窮雙輪飛出

蒼溟外一舵輕浮浩蕩中勢若騎鯨沖巨浪快如奮鷁振高風月明遠卬流球島雪

白横堆日本峯身類渺然於天地願與知音訴彼衷

甲寅春月於火船即事一首　　廣東　羅森

題於横濱之館

夜半歸來月正中滿身香帶桂花風流螢數點樓臺靜鳴鶴一聲天地空沽酒喚回

茅店夢狂歌驚起石灣龍倚欄試看青峯劍萬丈豪光透九重

甲寅春月書於鮑丹火船上　　廣東　羅森

半榻茶煙春讀易一窓花月夜談詩

此詩如古人の詩

甲寅春應人需書　　廣東　羅森

山水詩千首乾坤酒一盃

三春花月盃中物萬里煙霞囊裡詩　　廣東　羅森

甲寅春月醉中書　　廣東　羅森

有客蒼蒼咏平臨萬里流披胸羅宿海滌足見神州　　廣東　向喬

此外詩多有之候得共略之今般献上物の目錄も羅森が筆の由　萬事漢文ニ而仕甚タ便利

宜候趣

一、十四日　御公儀ゟ御觸之趣左之通り

亞墨理駕船渡來ニ付心得方之儀去ル丑十一月中重キ　上意之趣被　仰出有之候義ニ

付諸向共聊油斷は有之間敷候處此節數艘近海え碇泊いたし候ニ付は此上應接模樣ニ

寄萬一彼ゟ兵端を開き候儀無之とは難申其節一同奮發致候儀は申迄も無之事ニ候得

共異船滯留中御備向之儀外見而已ニ抱リ夜中も海岸え提燈等數多附並候向も有之趣

ニ相聞疲弊も不少儀ニ付固人數差出し候面々番小屋等ニ要處は格別其外は要害之土

地を見斗山蔭木蔭等ニ屯致し置可成丈外ゟ不見樣ニ相心得行列を正し晝夜時々海岸

を見廻り可申且又宿驛人馬遣方之儀も可成丈勘辨致し相減し候樣可致候尤面々屋敷

添田本ニハ寫眞鏡ノコトヲ記セリ

ペルリ日本遠征記ニハ三月十三日（二月十五日）生憎天候定ラズ、剩ヘ海上モ多少荒レ居タリシガアポツト艦長指揮ノ下ニ献上品ヲ陸揚シ日本ノ役人ニ引渡セシコトニ就キテ記スニ

屋敷ニ手勢用意致シ置候分も右ニ準し外見ノ虚飾は一切相止士卒之鋭氣を養候間ヲは取鎭居大小の筒配り方之ヲは勿論鎗劍手詰の接戰專一ニ心掛ケ候樣精々厚ク可申付候

猶大艦ヲ始諸般之御備向相整候上は改而　仰出候品も有之候得共方今指向場合ヲ以右之通り被　仰候儀ニ付面々必死之覺悟を盡し實用ニ工夫可致候尤彌々彼ゟ兵端を開き候節ニ至り候而は小舟ヲ以神速之勝負ニ可及義可有之候

一　十五日　二度目應接異人凡四百人斗上陸ス行列等十日應接通り今日献上物之內手重キ品不殘持參致ス其荒增し蒸氣車一組但禾組立保命小艇三艘蘭名パツテイラ是ハ傳馬舟也外を銅ニ而包ム依之銅保命とも申候色種々有之大浪の中ニ而水ニ沈む事無之候故ニ保命と云外ニ百姓農具一切鋤鎌等仕掛有之鎌の双四尺も有之候艸を刈り候時其艸不殘一所ニ鎌の仕掛ケニ留り一束宛ニなり甚タ便利の仕掛なり鋤ハ火取十能の如き双金を附け日本の鋤ゟ都合よし唐箕　唐臼　挽臼　萬石篩（ドウシ）　礪石　龍吐水（リウコシ）何れも皆機連（ゼンマイ）車仕掛ニ而仕候其外農具多シ外ニ白酒の樽大小數多し廿六日處目錄ニ記之

一　今日應接ノ字脫漏セシナラン中ニ異人村內處々徘徊いたし家々ニ立入申候此時上官異人貳人下官六人同道浦賀御同心渡邊文左衞門外ニ村役人壹人附添當村年寄太郎左衞門應接場御用出勤の留主（守）へ參り候間家內男女打驚逃出し候處附添役人ゟ申候ニは右樣立騷候得は興有事ニ

存尙外々立廻リ候間鎭居候樣申諭候ニ付漸々家內靜り居候處上官二人圍爐裏端え上り諸方見廻シ候處土藏の庇ニ酒の明樽有之候を見付頻ニ酒を出し可申樣の手眞似仕候得共家內一同當惑仕居候處右役人ゟ迚も呑セ不申候而は立去申間敷候間少々出し可申樣被申候間壹合斗も出し候處異人盃を取側ニ居合候下女ニ酒をつき候樣手振致し候得共下女差扣候處役人ゟ指圖ニ付右下女つき遣候所彼の異人下女の肩へ手を懸け申候ニ付驚き逃去申候異人大キ打笑イ立去ヌ右之通り仕休息中ニ自佩候劍を拔離し種々ニ振廻し劍を遣イ申候得は劍ゟ風を生し聲を發し電光稻妻の如く其早業中々筆紙ニ難盡し異人劍法の妙道を見て一座絕倒ス劍ハ薄身作り白燒處々文字唐草の彫刻有之皆朱をさし入申候　今日雨天異人傘を指シ來其制度甚タ風雅なる物也鯨骨四本斗絹ニ而張リ水牛の膏を引ぬる由蠟引の如し絹ハ鼠色なり　日本の傘ゟハ骨數少々ニ而甚便利

今日異人附添役人處々え異人同道ニ而立寄右同斷事有之迷惑の家二三家も有之由其後如何致し候歟此役人一切見ヱ不申

一　十六日　今日ゟ蒸氣小火輪車組立且又外ニ天理關連符（テレカラフ）千里鏡右興行御內覽の場所等作事ニ懸申候異人工匠五人外ニ異人傳手多シ

今日御觸左之通り

添田本ニハ異人乘馬ノコトヽ佐久間修理ノ人品ニ就テ記セリ

石川本ニハ十九日ノ條ニ記シアリ

今度異國船渡來ニ付右掛り役人幷御固人數數日出張り罷在候且は異船見物として立廻り候もの有之候哉ニ付宿々旅籠屋又は出張り役人固向之旅宿御備場其外の爲取締晝夜ニ不限御徒目附平山鎌次郎中臺權太郎幷ニ自分共折々見廻り候間出張え爲心得兼而申置候見廻り之節村役人共一兩人罷出夫々え案内可申付右者宿村難澁迷惑等無之爲ニ見廻り候事ニ付其旨厚く相心得差掛り休泊申付候とも都而手重く取扱抔決而致間敷候此書付早々巡達之上旅宿へ可相返候以上

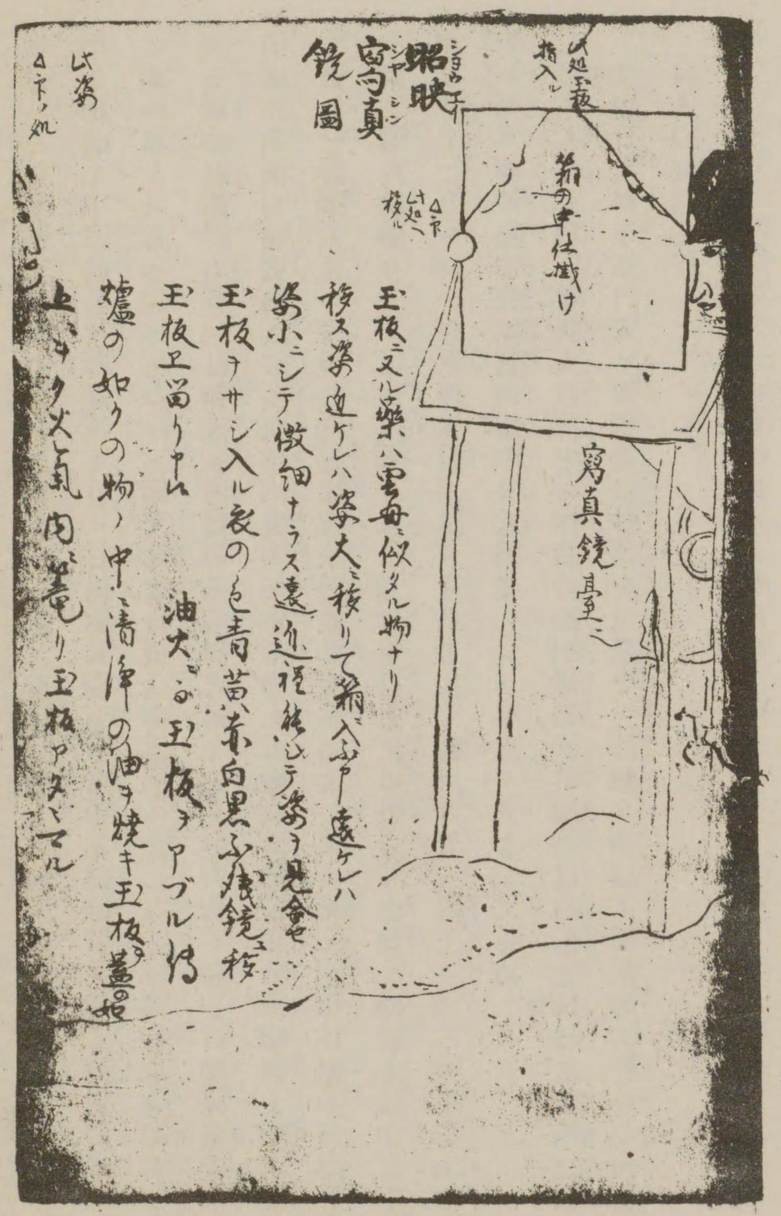
二月十九日　　御小人目附　山本文之助　印
　　山本覺之助　印
　　前田忠太郎　印
　　吉岡元平　印

一　十七日　日々上陸異人之内ニ通詞ウリユムスと申者ハ生國は亞美理駕國ニして子細有之家内一同ニ國を立退き清國乍甫ト申ス處え移住仕居候由亞墨理駕國王ゟ毎度御呼返有之候得共自分は不返弟を本國え返し家を續セ自分矢張り乍甫ニ居住いたし日本天保年中ニ二度も長崎え來り候由尚又日本肥前の國の者三人尾張の國の者三人右之ウリユムス之家ニ漂流人の食客有之候由此異人言語日本人同斷平日眼鏡を懸ル

ペルリ日本遠征記ノ此ノ日（三月十四日）ノ條ニハピッチンガーと呼ブサスクハナ號の牧師ガ日本官憲カラ許可サレタ四里餘ノ區域ヲ踏出シテ六郷河畔マデ逢シテ騷ギヲ起シタコトヲ書キ記シテアル"

黒川莊三氏ノ手記千草ノ手枕坂起原ト題スル二月十六日ノ條ニモ異人川崎附近マデ横行ノコトヲ詳記シテ居ル"（拙著横濱近郊文化史所載）

一　十八日　今日異人寫眞鏡と申を持來人の姿或ハ山水草木等を寫し取申候此寫眞鏡と申スは蘭製制の器物ニ而甚タ希稀代の仕掛也一尺三四寸四方の箱前後ニ覗キ目鏡有之箱の中半分ハ上ニ合セ鏡を仕掛け寫ンと思人を三間斗向ニ立セ置ク其人の姿前の覗目鏡ハ箱の中え入ル後の上半分位の所ニ少シ傾向け仕掛なる鏡え寫ル其の姿前の方半分ハ上ニ傾向仕掛け有之鏡ニ移り其姿返りて後の眼鏡へ寫移申候姿大小は人と臺の遠近ニ寄而大小有之候扨程能寫移り候時上の方ハ玉板ヲ指入申候玉板ニ白キ藥ヌリアリ姿此玉板ニ寫リ留ル拔上け印ヲ致し置船ニ歸リ油火ニ而アブリ油中ニ而藥をフキ取る姿ハ玉板ニ殘ル其人ノ面色衣類の色迄不殘分明ニ見え申候其時玉板の裏え又白キ藥をヌル益々明ニ分ル



ペルリ日本遠征記三月十七日ノ條ニペルリハ通譯秘書官及ビ二三ノ士官ヲ隨ヘテ日本委員ト應接館ニ會見セシコトヲ記セリ

一　十九日　上陸異人の内種々の藝者有之候細畫の名人御座候時々來り堂社山水人物等何ニよらす筆寫仕候石筆ヲ以立ながら寫ス事實ニ早し何程入組の彫物切組微細ニいたし分厘も不違候希稀代の達者なり。村内惣兵衛と申者の屋舗は甚タ廣く殊更門の入口ゟ家の東え見通し廣馬場の如し尚又此家眞田侯御馬屋ニ近し右ニ付御借用有之右家の庭ニ而御固閑暇の日ニは御役人方馬術調練有之候今日も形の如く御稽古御座候處前段申處の細畫の達者異人來り見物ス眞田侯御藩中え武略御師範役佐久間修理と申人異人ニ對し一馬場乘見セ候得と仕方被致候得は異人承知致し馬ニ騎んと仕候處ニ其馬異形の姿ニ恐れ跳躍り中々近邊え寄り難く見候を異人何の恐るゝ色無く飛騎り候而雙手綱を左の手一方ニ持一鞭當而候得は馬ハ飛鳥の如く馳出ス異人馬上ニ而右の手を上け劍鎗炮矢軍場の懸引仕候其神速中々人間業と見不申良々久敷して休ぬ

日本人の心得ニは異人は海中ニ而船の掛引鐵炮ゟ外得物はなしと悔侮る人も有之候得は共先日太郎左衞門家ニ而劍法の妙道を見又今日此惣兵衛庭ニ而馬術調練を見候得は異人の覺悟奥床し

當村の領主荒川欽次郎殿千石餘屋敷江戸一番町當時御役御書院番より御知行之内え異人上陸いたし應接有之ニ付御役人兩三日先御越し有之今朝江戸え御歸ニ付尤も正月廿八日當地應接場と決

着仕候砌早々村役人ゟ達し有之候間今度非常改御廻付御座候御旗本衆御知行所え今度の如キ公用臨時事有之候節は多く其御掛り御代官え窺の上指圖ニ任セ候由

一　二十日　御觸之趣左之通り

神奈川沖滯留之異船八艘之内貳艘豆州下田迄明後廿二日頃出帆いたし追而同所滯留之場所迄引返可申聊心配之筋ニ而は無之候尤出船の日限相延候而も別段相觸申間敷候條右之趣不洩樣相觸可申もの也

寅二月廿日　　美　作　武州神奈川ゟ浦々　豆州長津呂迄浦々　名主年寄

一　二十一日　上陸の異人駒形ゟ野下川渡し場の方へ參り渡し舟出し樣ニ眞似仕候間附添の同心衆ゟ渡し舟出し申間敷由指留候得は異人立腹致し腰の鐵炮を拔出し右の役人を打放可申樣子ニ付無餘儀渡し舟爲出候處神奈川へ渡し東海道を東え參り直ニ江戸表え參る樣子ニ見受候間附添の役人急キ川崎え知らセ川役人ゟ申含め六合川渡し舟を隱セ申候異人六合川へ參る處渡し舟無之萬年屋前ゟ南え參り候處羽田渡しの舟も相見不申無據大師河原ゟ歸候　今夕江戸南傳馬町竹河岸ゟ出火折節風烈しく近頃の大火此の火元の者今日小兒を連夫婦一同異船見物ニ生麥邊迄參り留守中ニ出火仕候右火元御調之上江戸中御觸廻ス今日相州沖え異國船壹艘相見申候趣浦賀ゟ神奈川え注進有之候

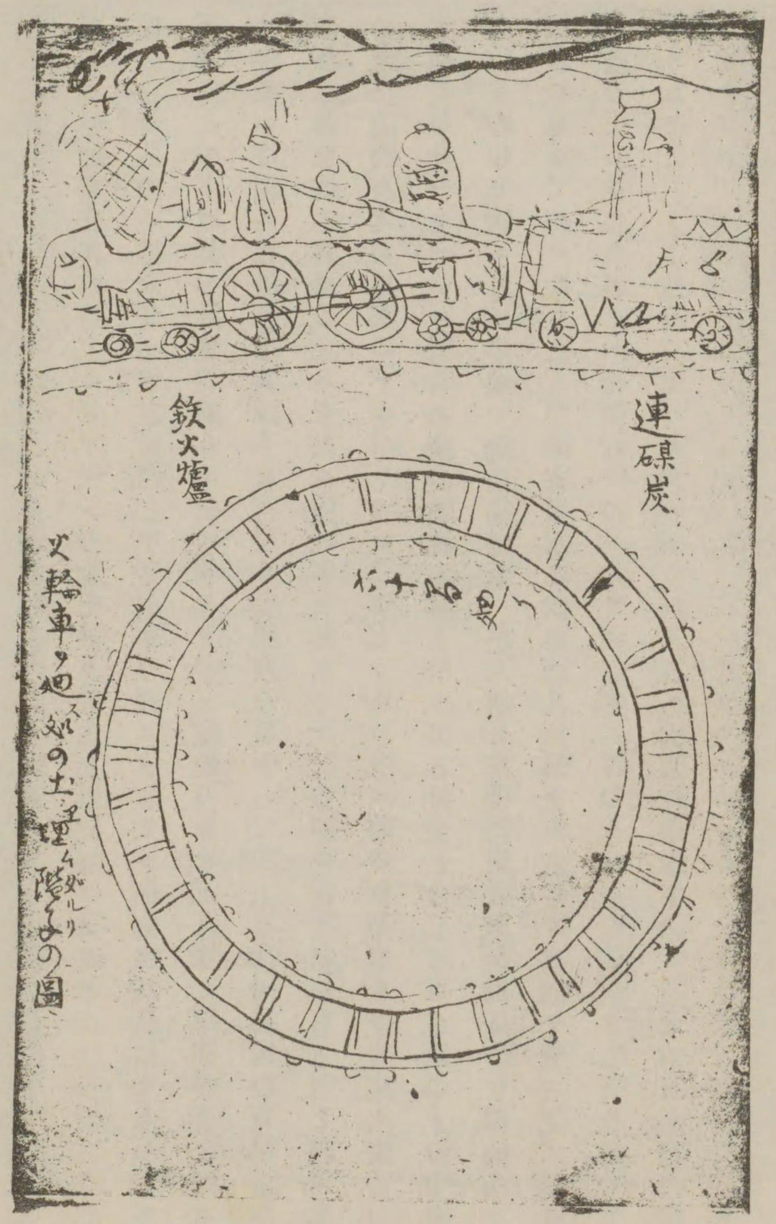
★六郷川

添田本ニハ知通氏ノ實歷ヲ記セリ

★1サツプライ號
★2パアンダリア號
サウサンプトン號

一　廿二日　今日異國船壹艘新ニ入海同所横濱沖え碇泊ス先々ゟ碇泊の異船二艘出帆★1
御觸之通り豆州下田湊え參り候由今日江戸ゟ御座船天神丸來ル神奈川ゟ横濱え參り直
ニ神奈川え歸ル御旗吹貫五流御紋附幕此船以來應接毎ニ駒形の東の海岸え來ル

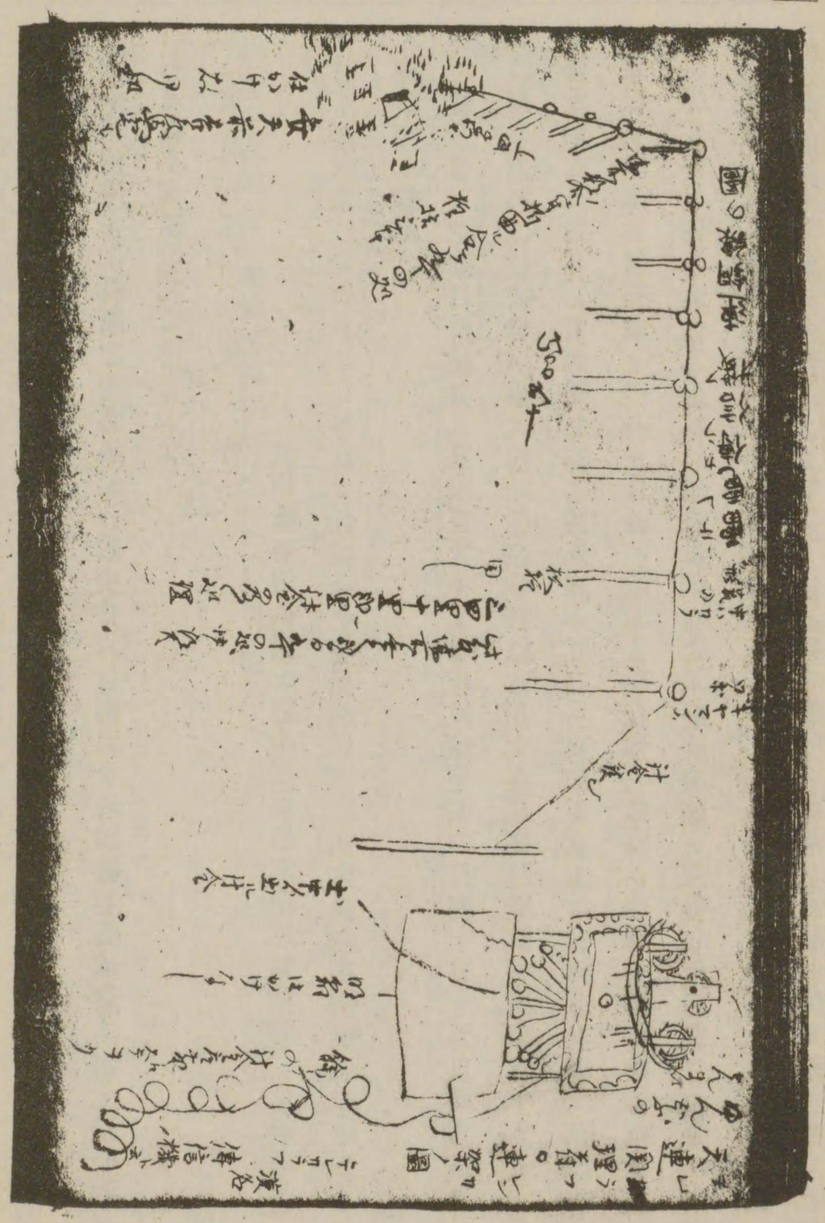
一　二十三日　蒸氣小火輪車組立出來試ニ廻之次ニ記ス圖之通第一番の車を鐵火爐と
申小車左右ニ而八ツ大車左右ニ而四ツ合而十貳也臺の上ニ乘セ有之候大筒の形の物は
銅壺なり中ニ左右え竪ニ仕切を致し中の處ニ火ヲ燒ク左右ハ湯ナリ扨外輪の大車也緣
を引而内輪へ處々機連車の仕掛アリ扨鐵火爐の上ニ並有之道器（合テ云ハ連筒ハアテ言ハ）一番前を蒸氣箱と申而
煙出しなり二番目風鈴を漢名ィ知丁東鈴（チンチンツンリロウ）也湯の湧たるを知ル物也（湯湧ハ鳴出ス）三番の物ハ湯
の氣を上え吸イ上る器なり湯を此吸上る時は其湯氣ニ引立れセんまいの仕掛け車の前
の方え行様ニ廻ルなり四番目ハ何の器か未知五番ハ水を次添る物なり是も車を後え行
時ハ此物ニて湯氣を吸上けさセ候得は車後へ轉し廻ルなり此湯氣を前後仕替の譯ハ火
の勢ニあらす鐵火爐の外ニネジ機關有之機連車前後え轉し申候尤前の吸湯ヲ器の消息
を留後の器水指之方ゟ消息を通ス車行の前後者湯勢の湧回前後ニよる鐵火爐ノ次ニ連
碟炭と申ス有之此車仕掛なし臺の上は火燒の者世話スル處中ハ水を貯處其次ハ架連路
ト云人の乘る車なり



★電信機ナリ

★州乾トモ書シ古クハ秀閑又ハ宗閑ノ字ヲ充テタリ

一　廿四日　★天連關理符千里鏡試ミニ興行仕候仕掛ハ應接場の北の方え五丁斗の處ニ杉の柱を二十間も間を經て何本も立場所都合ニよりて少々西の方え折曲四丁斗も右之通りニ杉柱を立其柱の上ニギヤマンの壷を置キ針金を以柱毎ニ彼壷を一ッ一ッニ卷キ柱の立留ハ洲★干辨天前へ吉左衞門と申者の庭ニ別ニ少し太キ柱を立其柱の上ニ而留メ下の方え引下け其の針金の餘り土中ニ埋ミ土中ゟ座敷の椽の下え埋ミ來椽の下ゟ引上け座敷ニは別ニ仕掛有之其譯下ニ三尺斗の明箱を臺ニして其上ニ仕出茶屋の百足臺ニ似たる物を置く其臺の上ニ中央ニ機連車の附たる時計の如キ物有之左右ニ同し機連車の附たる物有之百足臺の下ニギヤマンの壷七ッあり中ニ酒の色の水八分程宛入壷の口ゟ細キ糸金一ッ一ッニ引其糸金の惣統の處土中ゟ出る針金と合して百足臺の上の中央の時斗の如キ物ニ及ヒ申候　應接場座敷　辨天前吉左衞門座敷兩所機關の仕掛同斷。拠應接場ニて何ニなりとも申通度事有之候得は其言語を申遣スニは細キ紙ニ記ス其紙を臺の上の左の機連車へ仕掛ぬ中のセんまいの處ニ鐘のイボを見る如き物なり指ニて推スふんどふ下る仕掛ニ而ぜんまい廻り紙ヲ右へ引込針金氣消通ス辨天前吉左衞門宅ニ而臺の上中央のふんどふ下るぜんまい廻ル左の仕掛ぜんまいゟ右のぜんまいえ細キ紙を引出スYOKOHAMAかよふニ紙ニ筋附出る也通詞見而横濱ト云を知ルTEDO、



かよふの筋附けて江戸なる事を知ル何ニ而も筆談の理同し

一　廿五日　今日御觸左之通り

神奈川沖滯留之異船之内蒸氣船一艘明廿六日明★六ツ時出帆亞美理駕本國え歸船致候

右之趣不洩様相觸可申もの也

寅二月廿五日　　美　作

武州神奈川ゟ浦々豆州長津呂迄海岸附宿村　名主年寄

今日も蒸汽車　テレカラフ等試ニ仕候今夕豆州御代官江川太良左衞門殿御手附役人十人神奈川へ御越し

一　廿六日　三度目應接異人凡四百人斗上陸仕候應接前の行列十日十五日同斷但シ今日はやし方ハ二組候御出役人先々通但今日は江川太良左衞門殿御手附役人十人大小羽織袴衣類も一對ニして御越し有之候先達十五日ニ異船ゟ水上け仕候品々尚又蒸氣小火輪車組立出來ニ付右献上の品々目錄ニ致し上納仕候　公儀ゟ茂被下物蒔繪の長持九棹ニ入來ル外ニ四斗八升入米貳百俵被遣候右之米應接場脇ニ積有之を相撲取大勢ニ而搬ヒ渡し候尤壹人ニ而貳俵宛擔持ッ右之俵異人下官の者大勢ニ而壹俵宛を貳人三人宛ニ而小船え積入申候異人壹人足を踏損し俵と共ニ海中え轉落し水底ニ沈ミ良久して這出

★午前六時

ペルリ日本遠征記ニ合衆國政府ヨリ日本政府ニ贈與セル献上品ニ對シテ日本政府ハ其ノ返禮トシテ公式ニ種々ノ贈物ヲスル爲メニ三月廿四日（二月廿六日）提督ヲ招待セシコトヲ記セリ

候右之通り取扱兼候間村方人足傳手積入遣し候俵渡し相濟其後右の相撲取土俵の曲持地取稽古仕御役人ニ入御覽候異人も見物ス　應接場裏ニ而麥畑の中ニ棧鋪を懸け蒸氣小火輪車御内見天連關理符は應接場御座敷ニ而見物有之此時ハ辨天前吉左衞門宅え參而見る者も多百姓農具澤山献上の中ニ調法なるハ龍吐水なり長き皮袋ヲ以水を吐吸する理甚妙也井戸水ニ而も汲乾ニは妙也　扨今日も異人え丁寧の御料理被下候由献上は繁を厭イ省略ス應接之砌異人ゟ言上の聞書　和解　「亞墨理駕大合衆國使節補任美獅子飛師船アヽタムス　謹而言上前日應接ヲ以申奏候通今般渡來仕候は實ハ交易斗之儀ニあらす大統領始滿朝ノ諸臣等宿意は本國ト大日本國と永ク信交仕度願也元來幣國新起獨立ノ國ニして規法改革仕實情專一ニ政を行イ國治り來り候處今日ゟ十餘年前英吉利洲之姦賊襲イ來獘國過半侵之取れ君臣日夜薄氷を踏ミ兢心不安候處王の親族ペルリ幼年の時ゟ子細有之海島の中え配流ス然ルニ彼れ海島の配所ニおゐて韜略ニ心を委ね亞美理駕南北歐羅巴三國無雙の武名其聞え高し王の赦免を得て歸朝し諸臣と謀り軍艦武器を造繕し奇策を施し英賊の侵地不殘取返し候創業己來兵吾ゟ出ル此時を始とす此外曾而他國と接戰仕候儀無之候尤南北ニ犬牙の地も有之他國ゟ襲侵之節ハ無是非接戰仕儀ハ有之候今般亞美理駕開國己來戰場圖尚又亞墨國戰場地圖傳記英賊皷伐の軍艦軍

器等入上覽候墨理(メリ)鴛(カン)君臣の丹衷明察伏色上來の旨趣ニ付當國ニ對し合戰仕候儀決而無之候併し前段申上候通り英賊と接戰之砌り奇策ヲ以容易ニ勝利ヲ獲候得は守株伺兎(鬼)の族者(ナカラヤ)動れハ軍議ニ及ヒブカナン吾等心配不少之處種々申諭し漸々今朝ブカナン同船ニ而歸帆仕候且又先達御願上候豆州八丈島の南無人島の沖赤躬(ヘダカ)洲開發中豆州下田湊ニ而薪水交易定約有之故は最早事違之儀は有之間敷候國王何の思召ニ候や海岸妨(防)禦嚴重之由實ニ無益之至候昨今渡來兵端ニ及候得は固ニは恐不申直ニ鮑丹(★1)を品港え乘込王の側近ク參り一戰仕候然ル時ハ金湯(★2)も炮煙の蜃樓と消し候儀翻掌ゟも易し如是候得は信交之和約忽破れて渡來の張本を失す明年下田湊え渡來仕候而も御固無用候應接場定有之候得は小屋小切組等は不殘持參仕候丹心布露」

一　今朝美獅子(★3)飛トカ申蒸氣船壹艘本國へ歸帆仕候船司ブカナン

一　今日應接場前岸へ御座船天神丸來居候幕旗吹貫等廿二日初て來ル時之通何人カ船中御座在候や知者なし

一　今日江戸ゟ來る米渡し相撲名前左之通

雷　權　太　夫　境川君ケタケ　浪右衛門　追手風　喜太郎　玉　垣　額之助　待乳山楯之丞
富士島　甚　助　伊勢海村右衛門　二十山要右衛門(ツルギ山改)　根岸　作右衛門

★1 ボウハタン號
★2 金城湯地
★3 ミシシツピーニ非ズサスケハナン號ナラン

右九人年寄　內境川ハ不來君ケ嶽代勤

鏡　岩　濱之助　小　柳　長　吉　猪王山專右衛門　常　山　五良次　雲龍　久吉
階(カイ)ケ嶽龍右衛門　荒　岩　龜之助　荒　熊　刀之助　荒　馬　吉五郎　君ケ嶽(サカイ川ト改)助三郎
六ツ岸　岩之助　雲早山　鐵之助　黑　岩　重太郎　響　灘　立　吉　象ケ鼻灘五郎
一刀　長五郎　御用木雲右衛門　寶　川　石五郎　谷　風　市　藏　黑崎　佐吉
和田の原甚四郎　花籠(花車改名)平五郎　玉　川　浪五郎　箕　島　邦五郎　龍ケ峯　柳吉
彌高山　鐵之助　荒　鹿　幸之助　完ケ峯　五良吉　高越山　谷五郎　三ツ海　茂八
勢貝山　粂　八　立田野　吉　藏　假名頭　粂　吉　氷室山　市五郎　大見崎大五郎
鬼ケ崎　勝五郎　大　濱　喜太郎　大蛇潟　浪五郎　朝日野　松五郎　九紋龍　平吉
所緣山　次郎吉　男　山　軍　太　三吉山　佐　吉　沖の濱　勝　藏　明石潟浪五郎
松ケ枝　喜三郎　殿　峯五郎　登龍山　米　藏　御所浦　平太夫　立神　市五郎
勝　時　米　藏　武者崎　利　助　三ツ濱　政　吉　岩ケ峯　岩　吉　雷の音平五郎
高根石　刀　藏　都　山　萬　吉　五人張(近年飛驒國ゟ出ル大男七尺五寸)　松次良(曲指ノ上手)　白眞弓肥太右衛門(鯨太左衛門ゟ有カ)　伊勢松
西　國　竹　松　浪　平　萬　吉　新　川　定　吉　角田川　千　吉　三浦潟　福松
大　角　大　藏　星　樂　榮　吉　朝日川　金　藏　西　嵐　三　吉　象ケ峯　辰吉
朝　川　平　吉　香取潟　卯　吉　白　龍　三次郎　白　旗　林　助　濱渡　熊吉

河山福松　大野潟松藏　竹山荒吉　鹿島潟松藏　金鱗吉藏
綴潟民藏　御用松福松　大崎大八　立岩金太

此分八十四人　〆九十三人

今日可笑事あり或る人應接の樣子見受申度入魂の村方の者を賴ミ鑑札を腰ニ附働人足の樣體ニ出立右應接場所え參り終日見物いたし暮方ニ歸り候間應接樣子異人の行列等定而面白有之候やと人尋候得は其人の申スニは實ニ長カ生キいたし面白事を見物仕候先最初ハ唐人躍り力士俵の曲持相撲地取稽古黑坊の水稽(ケイ)海底の刀持龍吐水の水機關(カラクリ)德利の綱渡り火の車の離れ業緩々拜見仕候中々兩國山下淺草抔ニ而もケ樣の珍らしき見セ物ハ無御座候申大笑仕候

獻貢品目錄

亞墨理駕人貢獻品目全
公朝及諸府酬投箋

獻貢品目錄

各物獻

君主江

一小火輪車格式連碟炭架連路全副（小火輪ハ格式ト引ツヽイチ外ニ石炭ヲ燒ケハ其氣外ヘ移ラ外ノ車追々メグル）

一雷電傳信機一副連銅線（イクツモ車ノヨウニシタ蘭名テレカラフ連手ス傳信機ヲマハスト雷火筒中ヨリ人々ノ手ニウツル）

一銅保命小艇一隻　頭尾有ニ氣箱一不レ能レ沈レ水　氣息ヲ通ルマトアッテ

一銅小艇一隻　能過ニ大浪一不レ妨沈レ水以保レ命

一極幻花紅絨千—九尺長　自然ト花紋ヲ生シタル如ク緋ノ細絹

一花紅剪絨一疋　飛遊糸ノ機ヲ以テ織ル斷連織也（俗ニ云連々織（ツヽレヲリ））

一玻璃銀蓋首飾箱一個　玉ノ箱ニ銀ノ金具ヲ用タルヲク（シノ箱）

一亞美理駕各處林禽ノ圖傳　此圖ハ寫ニ生同物同大一共成ニ九部一（オモテガクモン所ナリ）

一亞美理駕合衆國大會館之史記凡四卷　合衆國ノ公學館ノ所記日錄也

一亞美理駕嫋約省土產圖傳　凡十六卷

一亞美理駕嫋約省律例　國ヲ治朝廷ノ法式

一亞美理駕海濱埠頭各地處理圖　昭レ圖便知水深淺水手埋岸水邊折曲ノ岸又ハ水中ノ岩ナト

一農政　二卷　內敎ニ耕田植樹養畜法則ノ圖也

一亞美理駕開國史記　四卷　彼ノ國開テヨリ以來ノ事ヲ記ス

一建造光樓譜　二本　湊口ニアル常燈也夜行船ノ湊ヘ入目當也譜トアレバソノ建タワケヲ書タ本也此樓建在ニ海邊ノ夜船望見能入埠

一亞美理駕各信館名　一本　街道筋ノ處々宿屋ヲ一々名ヲ記ス

一做火輪機法則　一本　做ハナソラフノ心也機ハカラクリノコト火輪機ノカラクリヲ知ラセル法ヲ記ス本ナリ

一亞美理駕嫋約省書院之書名　書院ニ書テアルフスマ屏風額ナト一々其品名ヲ記ス

一鐵火爐　一個　コノ筒ヨリカノ筒ヘ火氣移也　連筒能燒碟炭或柴也

一千里鏡連架　一箱　日本ニアル遠目鏡蘭製トイヘトモ精品ニアラス此ハ精明ノ寄玉ヲ仕カケツキ立ルナリ向ノ目鏡ヨリ此方目鏡ヘ移スニハ臺ガカ何挺モツキ立臺也

一亞美理駕數省地理圖　ンジン也針金ニテ臺トノ間ヒツミヲキメル臺ナリ日本デ五畿七道アル如ク彼國方角ニヨツテ地理ノ部分ヲスル也

一亞美理駕天秤量斗司碼各器　ハカリ大桝小桝

一鳥鎗　五管

一兵丁鎗　三管

一馬甲劍　十二個

一砲手刀　六口

一小手鎗　二十管

一過山鎗　一管　短鎗ニシテ有機關彈短兵急ノ時ニ用ル日本ニ今用ル擲鎗ヲツカフ如ニシテ少シ異ナリ鎗ノ柄ニ彈機アリ英國ノ製ナリ

一信袋　二個　連鎖合此袋ハ國驛寄信用也連鎖車ノ合紋ヲ知テ合輪ヲ合スレハ其錠開也不知人ハ合紋ヲ合スコトヲ不得則智恵輪

一香鹼香水　胭脂等料

一亞美理駕白酒　一桶

一三鞭酒　一箱　白酒ヲ乾製シテ三度モ搗碎又塊丸ニス日本博多ノ練酒ニ同軍中ニ用入水爲酒

一金櫻香酒　一箱　枇杷ナト入製ス練酒

一香白酒　一箱

一農夫各器具　數目別開

一頂上香茶　三箱

此三物献　皇后

一描金玻璃粧飾箱一個　玉ノ櫛箱ニ金繪ヲ描ク化粧道具ヲ入箱ナリ

一香鹼香水　胭脂音粉等料

一繡花閃毀　一疋　紋繡躍機糸ヲ以テ織ル浪ヲ浮ヲリ

此物呈阿部伊勢守

一墨西國戰場圖傳　此圖畫每戰場之處

一六響手鎗六管別兼火藥　一桶　鎗柄ニ炮機アリ一發ニシテ六響ス傳ニ曰炮ノ玉ニ小キ穴ヲアケ玉ノ中ニ火藥ヲ入穴ヨリ火氣入披發ス空炮ノ時藥袋ノ先ニ練藥ノ玉ヲ入ル五響六響同

一亞美理駕白酒　一小桶

一三鞭酒　一箱

一香鹼香水等物　二十四件

一大時辰鐘

一大鳥鎗　一個

一鐵火爐　一管

一頂上花紅絨

一馬甲劍

一保命銅小艇一隻連槳　小艇ノ端舟ヲ操ルカイナリ連槳トハ何挺モ一度ニ用ヲヨグユヘ連ナリ

此物呈牧野備前守

一亞美理駕開國每戰場地圖傳　二本

一同嫋約省博物院各物名土人之衣服圖

一客樓一間畫圖　嫋約省對客ノ間

一時辰鐘　一個

一六響手鎗　一管

一香鹼香水等物　十二件

一馬甲鎗　一口

一大鳥鎗　一管

一亞美理駕白酒　一桶

此物呈松平和泉守

一學建宮廟法則圖　一本

一香鹼香水等物　十二件

一華盛敦京圖　一幅　別有街道一幅

一亞美理駕白酒　一桶

一時辰鏡　一個

一馬甲劍　一口

一大鳥銃　一管
一六響手銃　一管
此物呈松平伊賀守
一亞美理駕嫋約省史記
一大輪火舟圖　一幅
一香鹼香水等物　十二件
一時辰鐘　一個
一大鳥銃　一管
一六響手銃　一管
一馬甲劍　一口
一亞美理駕白酒　一小桶
此物呈久世大和守
一建造鄉閭新屋法圖一副（幅）
一金山大埠畫　一幅
一六響手銃　一管

大ヲ鄉ト云小ヲ閭ト云フ閭ハ里ノ入口ノ門也鄉閭ハ日本ニ云大邑小村也ソノ割方家ノ立置ノ圖

金山大埠ハ彼地ノ風景海邊ト見エル又ハ衡州ノ金山寺之圖カ

馬甲劍　一口
一亞美理駕白酒　一小桶
此物呈內藤紀伊守
一亞美理駕蘇打省土產圖傳　二本（ト云處ヨリ出ル）
一苟知敦村畫圖　一幅

苟知敦は風景凄涼トシタル處ナリ日本須磨ノ浦ノ知シ村ノ字ニテ凄涼ヲ知ル

一時辰鐘　一個
一六響手銃　一管
一大鳥銃　一管
一亞美理駕白酒　一小桶
一香鹼香水等物　九件
此物呈林大學頭
一亞美理駕各處獸類圖傳　凡五卷
一瓷器（ヤキモノ）茶具　一副
一頂上香茶　三箱
一頂上花紅絨　一丈

一六響手鎗　六管
一大時辰鐘　一個
一馬甲劍　一口
一大鳥鎗　一管
一香鹼香水等物　二十四件
一亞美理駕白酒　一小桶
一火爐　一個　能燒石灰及柴
此物呈井戸對馬守
一學工藝各政　各物ノ細工ノ傳
一嫋阿連大埠畫　一幅　嫋阿水ノ落口江海ニ入ル處イクツニモ阿水ワカレ落流レ風景ノ處
一亞美理駕白酒　一小桶
一香鹼香水等物　九件
一櫻桃花香酒　一小箱　日本山桃ヲアチラデハ風雅ニイヘハ櫻桃ト云也此名唐土ヲ云コト也今度ハ廣東ノ羅森。向喬ナトカ如此付タ名ナリ
一馬甲劍　一口
一鳥鎗　一管

一六響手鎗　六管
一時辰鐘　一個
此物呈伊澤美作守
一大火輪船畫　一幅
一保命小艇格式　一箱
一亞美理駕白酒　一小桶
一櫻桃香酒　一小桶
一時辰鐘　一個
一鳥鎗　一管
一六響手鎗　一管
一馬甲劍　一口
一香鹼香水等物　九件
此物呈鵜殿民部少輔
一象畫　一幅　天竺ノ象トハ少シ形チカフ此象圖係亞非利加國所出
一亞美理駕各信館住名　往來ノ大小名ノタメニ御馳走屋ノアル處ノ國都及宿驛ヲ知レルヤウニシタ書

一香鹼香水等物　一件
一時辰鐘　一個
一亞美理駕白酒　一小桶
一鳥銃　一管
一櫻桃香酒　一小桶
一馬甲劍　一口
一六響手銃　一管
此物呈松崎滿太郎
一火輪舟畫圖　一幅
一時辰鐘　一個
一櫻桃香酒　一小桶
一馬甲劍　一口
一亞美理駕白酒　一小桶
一香鹼香水等物　六件
一六響手銃　一等

以上

公朝及諸府酬投物品目

大統領へ

一硯箱　一副
一紙箱　一副
一書棚　一架
一書案（ブンダイ）　一張
一銀花銅牛香爐　卓付　一座
一香合筐　一具
一挿花筒　卓付一筒
一暖爐（テアブリ）　二筒
一紅花絹（ベニモヨウ）　十疋　羽付二重
一素光絹（ネリ白）　十疋　羽二重
一花縐紗（モンチリメン）　十疋
一紅縐紗（イタシチリメン）　五疋　新色チリメン

整

使節へ

一硯箱　一副
一紙匣　一副
一紅光絹　三疋
一花縐紗　二疋

一素光絹　二疋　　一紅纈縐　三疋

整

アヽタムスヘ

一紅素光絹　三疋　　一紅纈縐紗　二疋

整

ボツトメンヘ

一紅素光絹　三疋　　一紅纈縐紗　二疋

一髹椀　二十副
吸物椀

整

ウリユムスヘ　　ネヘルリヘ

一同　三種　仝　　同　三種　仝

蒸氣車テレカラフ其外諸工匠五人ヘ

一紅纈縐紗　一疋　　髹椀　十副

乘船總人數ヘ

一米　二苞　　鷄鶩　三百隻

整

遺

被遺物目錄

一柳條峽絹　十五疋　ヲメシ色ノ帶也アツイタ
阿部伊勢守殿ヨリ　松平伊賀守殿

一同　牧野備前守殿ヨリ　松平和泉守殿　久世大和守殿　松平伊賀守殿　内藤紀伊守殿

整

差贈物目錄

一硯箱　一副　林大學頭殿ヨリ　　一紙箱　一副

一濃州紙　一箱　　一五彩箋　一箱　五色ノ半切

一彩畫折簡紙　五箱　二色繪ノ折本

一珊瑚藻　七箱　　一呑水藻　七箱
螺盃　筆管ニ彫刻唐草白毛ノ毫　　螺盃夜光貝ノ水ノミ同盃

一携盆　一箱　サケ重又ハサケ煙草盆ノタクイ　　一三套酒盃　一箱　三ツ組ノ盃

整

一鐏板二枚　二箱　井戸對馬守殿ヨリ　茶家硯蓋ト云酒家ニハ廣蓋ト云調牢家ニ切板ト云　　一雨傘廿柄　二箱

一櫻箒　三十本　一箱

一紅綾　一段　　一素綾　一段

一人勝十三個　八箱　人形ナリ日本昔ヨリ秀テタル人ノ姿ヲ武者ナドニシタ細工

一織竹各器　一箱　一竹凡二脚　二箱　脇息ト云ナリ
鵜殿民部少輔殿ヨリ　竹細工ノヲシマツキ

一柳條縐紗　三段　一瓷盌　甘個　二箱
ヤキモノヽ平皿

一醬油十陶　一箱

整

一紅綾　松崎滿太郎殿ヨリ　瓷盞　三箱
ヤキモノ

一花紋席　一箱　一櫟　炭　三十五苞

以上

一　嘉永七甲寅年三月廿七日　異人ゟ願ニ付日置流の鐵炮三挺　二十匁玉　三十匁玉　四十匁玉　被下候又願ニ付五兩判ゟ以下の金子頂戴仕度由右ニ付古金小判慶長判元字保字の貳分壹分判等精煉の金子改揃五兩也被遣候處右之金子不殘料理役の人ニ渡し明後日日本御役人饗應の菜肴等調吳候樣ニ賴候由　此方御役人の思召ニ而は右之金子異國ヘ持歸ル事ニ思召遣し有之處大間違ニ候

一　廿八日今日四ツ時ゟ雨少シ降リ其ゟ大風異人上陸なし今日江戸近き海岸御固人數追々御引拂

一　廿九日　異人壹人も上陸なし今日九★ツ時分ゟ御役人方神奈川ゟ御船ニ而異船ヘ御

★正午

ペルリ日本遠征記ニ三月廿七日（二月廿九日）ニハペルリガ日本委員並ビニ其ノ屬僚一同ヲ午餐ニ招待セシコトヲ記セリ

ペルリ日本遠征記ノ一節ニ三月廿九日（三月朔日）ニハバアンダリア號トサウザンプトン號トガ下田カラ歸ツテ來テポーブ副長ハ下田港ガ總テノ點ニ於テ亞米利加人ノ目的ニ適ツテ居ル旨ヲ報告シ越し異人ゟ長々御苦勞ニ預リ御禮饗應の由御馳走ニ鐵炮數多放し申候今日應接延引明晦日の由

一　晦　日　今日四度目應接異人凡百人斗上陸ス行列はやし先日通御出役も同斷今日日本國王ヘ御目通いたし先達而献上の品々之内蒸氣火輪車千里鏡天連關理符雷電傳信機其外蘭製制之翫具寫眞照映鏡晴雨鏡種々自分興行いたし御上覽ニ入度願之由右は國王新ニ立チ百度改政之砌殊ニ齋中ノ義即答御斷有之と承る

一　三月朔日　先月廿二日豆州下田湊ヘ明年渡來之節碇泊場所爲見置參り候由の異船二艘は今朝未明ニ横濱沖ヘ歸船元の場所ヘ碇泊ス

一　二　日　今日ハ先達異人ゟ献上の品々江戸ヘ送り申候小舟三艘も琉球莚ニ包ミ陸地を宿次送りニ仕候尤新町迄村方人足

一　三　日　今日者御暇乞應接萬事先々通り異人七十人斗上陸仕候先達晦日應接中ニも陸ゟ小艇壹艘使節の元船ヘ急き行き引返し候處日本の米洗籠の如き物ニ彩色の佛家の施我鬼旗の如き物を立而二籠持參り應接場ヘ參り候今日も旗は無之候得共應接中ニ持參る其品分兼候

一　四　日　今日異人多ク上陸ス其内壹人吉田新田と申處ヘ參り候を附添の者事多き

三日ハ日本亞米利加合衆國和親條約調印ノ日ニシテペルリ日本遠征記ニモ其ノ記事ヲ載ス

★此ノ日ハ復活祭ナラン四月八日トハ曆日ニアラズシテ我ガ國ニ行ハルヽ釋迦降誕祭ニ當ルノ意ナリ

★午前十時ペルリ日本遠征記ノ一節アダムスハ本國政府ニ報告ノ使命ヲ帶ビ四月四日（三月七日）ノ朝サラトガ號ニ乘ジテ旗艦ニ飜ル提督ノ旗ニ對シテ十三發ノ禮砲ヲ發ジ、長イ間行動ヲ共ニシタ僚艦ニ別レテ歸國ノ途ニ着イタ。

日本遠征記ニハ名主ノ家族其ノ他ニ就キ面白キ觀察ヲ記載セリ

ニ取紛見失候得共併し見馴し異人壹人見え不申候間村役人え申付所々吟味仕候處彼吉田新田ニ人立多候間彼所え參り尋候處はたして異人壹人居申候此異人酒屋を尋ね酒を呑む心組ニ而立集る人に問合候得共異人の言語分兼居候處え村役人參り種々申諭し連歸候横濱村内え來り或る店ニ而一ツの價四文の菓子二ツ買取候得共右之價錢無之候間自分衣裝の胸元の牡丹の金具二ツ引切價ニ渡し歸候其牡丹金ニして細畫ニ鳥の形を彫刻ス買賣ニ價如何異人の眞卒可見　尤右之品跡ニ而差返ス

一　五　日　今日ハ亞墨理駕合衆國四月八日の由祭禮の事有之由ニ而終日船中ニおのおの酒宴ス樂はやし仕候月日日本とハ少々間違有之後ニ論ス★

一　六　日　今日五ツ時分大風雨異人上陸なし

一　七　日　今日天氣快晴四ツ時異船壹艘本國え歸帆右之船大筒を數多放し申候尤此の船今日ゟ浦賀ニ碇泊仕居候樣子

一　八　日　異人ゟ大筒一挺献上ス上陸なし

一　九　日　異人上陸なし昨夕御役人ゟ村役人を應接場迄御召有之申渡し最初ゟ異船見物人嚴重差留之義申付置候處此節自然緩かセニ相成り候趣ニ相見候今兩三日中ニは出船も可仕候處萬一之義有之ニおゐては其方共斗の越度ニあらす諸役人一同の越度たり能々相心得村口出入の人を可改と御申渡有之候間今日ゟ村口四方ニ張番を附置御用之外往來を禁ス

一　十　日　使節ペルリ久々不快ニ付上陸いたし諸所山野を歩行仕保養いたし度願先達御聞濟有之候處折惡しく不晴之天氣ニ而延引之處今日快晴ニ付上官之者十三人外下官相從ひ上陸いたし駒形ゟ洲乾辨天え至り太田屋新田會所前ゟ野下川堤を南え行キ山越ニ北方村え參り東漸寺ニ休息し引返し横濱村異人の墳所の前を通る。異人朋友の墓前を通る事故少々は揖禮も施し可申と思の外ニ而見向も致サス通り過キ夫ゟ村中增德院え立寄名主德右衞門庭上の松を見物いたし當家の座敷ニて一時斗休息ス座敷へ通り候者使節ペルリ次ニ壹人次ニ先月十一日葬式の引導師ニなり申候異人壹人右三人床の前ゟ北向ニ居候次ニ壹人應接の時行列の指圖仕候者也年齡二十三四才次ニ通詞ウリユムス上官五人次の間ニ中官と見受御者六人上中の異人十三人中庭ニ目附貳人合而十五人座上の異人茶菓子酒も猪口ニ二ツ位呑もあり（燒餅も食）家の主し又内室にも對面いたしペルリゟ巡席に一々名を申し候得共書認の事失念仕候丁寧ニ禮を伸而歸りぬ歸る前ニペルリ禮の言葉ニ長々大勢と申樣ハ能聞候得共其餘の言語ハ蠻舌分不申通詞ウリユムス歸る時ニ申ス禮の言葉。今日は段々大ニ。と申候日本の言葉ニ違なし各々丁寧ニ暇乞して立出

候後影餘波惜し氣の其様体

二月朔日當沖え移泊いたし而ゟ四十日之間不上陸日ハ只四五日其餘は日々上陸いたし初ハ人々鐵炮所持仕候得共此節は行列義式の外ニは鐵炮も持不來樂々四海兄弟の心持ニ而夷花一般要心の門戸を開馴染重而蠻客和主の人情なれハ近日歸帆と聞キ實ハ驚鷄を涙花申者も多シ

今日合原操藏殿異人ゟ献上の大筒調練秘藥等傳受有之引合之處　船中ニ而傳受仕度旨異人申ニ付明日異船え被越御引合ニなる（合原ハ浦賀與カ炮術者）

一　十一日　細畫名人の異人上陸致し横濱東中山太郎左衛門宅え參り家藏店木小屋ニ至迄庇の下ニ有之酒の明樽燒柴鋸餘骨頭迄不殘寫し取歸り候　前況申通り石筆ヲ以立居處々繪く其風韻流麗精妙閑粹微細ニして流俗と不墜實ニ出格の達者也日本の人物數多寫取候得共男女の姿禽獸の形名畫通神の妙なり

二月初ゟ日々上陸の異人藝能工奇多候得共今日此處大落ニ而明後彌々出帆と定り上陸なし

一　十二日　今日御觸左之通り

神奈川沖滯留之亞美理駕船七艘明十三日風模様次第出帆致し尤豆州下田湊え立寄夫ゟ歸帆いたし申候聊心配之筋ニは無之候趣不洩様相觸可申もの也

寅三月十二日　美　作

武州神奈川ゟ浦々豆州長津呂迄海岸　名主年寄

添田本ニハ合原操藏異船デ大筒打方等ノ秘術傳習ノコトヲ記セリ

一今日林大學頭井戸對馬守江戸え歸府

一　十三日　今日亞墨理駕船本國歸帆ニ付當沖ゟ上碇の次第朝五ツ半時蒸氣船二艘碇を上げ東の方品川沖え向イ行ク尤輪馳ニ而帆は不掛次ニ北の方ニ碇泊の艦生麥村の方え帆ニ而馳出ス次中程ニ居候二艦帆を掛け帆を掛け上總歸不去の方え出行ス次ニ壹艘金澤沖へ差而參る右六艘の船四方え指して行ク不思議ニ思ひ候處壹里も行しと見況四艘の帆掛船一同舵を轉し蒸氣の方品川沖え行クと見え候處大師河原羽田沖ニ而一同碇を下ス然處一艘殘の艦帆仕度致し碇を卷上候處其艦磯の方曳け來り水中の埋岩ニ乗上け候而大勢の組子共種々工夫いたし働候得共力不及　時ニ大筒一發放し候得は沖の友船ゟ傳馬艇二艘帆を上而馳來る跡ゟ蒸氣船一艘來り右之船ニ長き綱を附曳出し本牧十二天鼻沖え參ると羽田沖の五艘も同しく金澤沖小芝の方正月中旬初而來り泊候場所え今夕は落帆仕候十三日夜ゟ廿一日迄小芝沖ニ碇泊いたし廿一日ニ豆州下田湊え移泊仕候

一　十四日　朝正七ツ時眞田小笠原兩侯御固人數陣拂歸府此夕品川泊

（五七頁ヨリ）タ。云々ト載セタリ

ペルリ日本遠征記ニモ神奈川碇泊地出帆ノコトヲ記セリ

添田本ニハ日記ハ十三日ヲ以テ打切レリ

一　十五日　應接場引拂不殘浦賀え積返ル

應接場引拂の時献上の火輪車を入置候處ニ何者か仕候落書有之

大平天地屬周家海外風收揚素波重譯越裳來献物歸途猶置指南車

蠻舌花言質厥成明心如水信將盟漢家四百年天下礪帶山河祝太平

此の後詩は應接小屋ニ落有由

渡來の異船九艘號名

山下ニ碇泊の船か次第ニ神奈川ノ方え記

一一番南山下の沖ニ泊ス船ユルフェット之軍艦　船名ハレキスンタン（蟲喰）。レキシングトントモ云　船主役の名ハカラスソン　大炮廿六挺

一二番フレカット之蒸氣船　船名ハセチクインナ。スユクエハンナトモ　船主今度の副使ブカナン　大砲六挺　船役ハ名　サシクペナア　此船二月廿六日朝本國え歸帆

一三番ハ、テウナン之蒸氣船　船の名ホウハツテン。ホウハツタントモ　船役の名セムセキリユネイ　大砲八挺外ニ四挺野戰ノ具アリ　使節日本海水師提督ペルリ通詞ウリユムス廣東ノ羅森同向喬其外廣東人多此船ニ乘　乘人數三百五十三人

一四番フレカット之軍艦　船名スユフフライ　船役主不分　大砲不分　此般二月廿二日來

一五番フレカット之軍艦　船名マスドネン（マセドニヤントモ）。（マシドニヤントモ）　船主役名アブボット

大炮二十二挺

一六番ニフレカット之蒸氣船　船名ミツセシヘン。ミスシスシソビトモ。美獅子飛（メシシビ）ト

モ申ス。船主役名セスフアンデンスタウ。大炮八挺此船ニ副使アヽタムス乘ル　二月

十一日葬式アリ

一七番ニユルフェット之軍艦　船名ワンデリヤ。フアンタリヤトモ。ウエンデリヤト

モ　船役ポノペ　大炮十八挺外ニ貳挺合二十挺

一八番　ユルフェット之軍艦　船名サラトガ船主役分不申　大炮二十挺　二月六日ニ

當所え來ル

一九番　ユルフェット之軍艦　船名シヨウハツテン。サウタンボントモ　船主役ユニ

ウスボイレ　大炮六挺　北の方金川沖ニ居

右之通横濱山下沖ゟ金川沖迄巡次ニウリユムスと申ス通詞ゟ承る聞書ウリユムスの

直ニ書申候ハ役人え取役人の寫し右之通ニ候

管裡井中ニ天を見る者は見る處の天を天とす爐邊ニ坐し溜下ニ歩しぬる者は其の坐し歩する處を處として四海の廣大なる知るなし和人ハ元來天文地理ニ愚なる性質の處ニ元和已來異國通商勵禁ニ付益々八荒の地ニ暗し昔しハ日本ゟ異國え渡り交易いたし候者多し然共自分一個の利を見のミニ而紅毛人の如くニは天地の文理委しく知者なし中頃水府の赤水論を建候得共未タ至らさる處有之近年蠻人頻年渡來ニ付種々の輿地圖誌

此ノ圖ハ逆様ニシテ見ルヲ可トス

坤輿圖繪。堪輿一管等多の書ニ依リ權算(ヲモツリ)の圖を或人見而。日本の處餘る小形なり今少し大ニいたし亞美理駕國の半分ニもいたしたらは能かるべしと云者有之候得共天地の中ニハ午子(ナンホク)星極の度數ト申義有之投算(ヨイカゲン)ニは難成其理を知らさる人の爲ニ荒唐繪合(アテナシデタラメ)の斷し次え申上候

右ニ繪カキ候圖も荒唐(アテナシ)の投權(デタラメ)ニ御座候得共今度渡來の異人船路の樣子を知る噺を繪ニ書のミ

日本亞美理駕星度の論話

天地星度の遠近ニ寄りて寒暖相違有之五穀も其氣候ニ隨ひ熟不熟御座候萬國ハ廣曠ニ候得は先手短ニ日本ニ而申上候日本南方の極位ハ九州日向の國なり其國の南方海岸ニ而北極星を見候得は三十一度位北方の極地ハ奥州津輕の三馬屋なり三馬屋ニ而北極星を見れハ四十二度位然ル時ハ日本南北十一度の國なり日本道三十六丁一里ニして南北七十三里十貳丁なり小國可知繪ニも大ニハ畫キ難し。但シ是ハ眞直ニ南北を天取りたる法なり横筋違イニ日向ゟ津輕え本道を行ク咄ニあらず。三馬屋ゟ龍飛と白神の瀨戸十里北え渡り候而松前侯の城下近邊最早米麥等生る地少シ田畑ニ少し宛作物見え候得は富人の翫弄植木同樣也松前ゟ蝦夷地を行事曲折路三百六十里ニして船ニて渡り韃靼國の出鼻タライカイの地ニして北極を見れハ五十七度餘又北ニよりて見れハ八度九度ニしてカラフトとの極地なり此間折曲路數百里の地日本の御版圖ニして今松前侯の領

地なり三馬屋ゟ韃靼南の入口え平均直の算ニして見れハ南北眞直ニ百十六里半二丁也此間竟ニ五穀の生る地を不見其理を以推し斗るニ四十貳三度ゟ天の高キ地ハ陽精薄く五穀不生と知るべし南え寄れハ天度近ク陽精强く穀物の生宜しと知るべし日本ニ而も山內侯の御領所土州ハ日本東南の極地ニ而一年ニ二度も米を取入る地有之南極陽氣よし琉球國ハ薩摩の山川ゟ西南ニ當リ日本ゟハ尙々暖氣ニ候琉球人日本え來朝の人々十人之內六七人ハ寒粟症ニ而煩イ申候彼地ゟ日本ハ大分寒ェると見え候俗ニ申ス唐と云地も今の王城北京の地其氣候朝鮮位ニ而暖ニハ無之候得共江南の地は暖氣か處　嶺南の地ハ餘りニ暖氣過而障母の氣と申而毒熱の煙蒸風(ウワバミ)有之候由依之考候得は天ェ三十五六度の東海道筋ハ寒暖都合宜しき土地なり　扨亞美理駕も四十三四度南え當る地五穀澤山なる事推して知るべし扨マサタランゟ三日路山奥ニ金銀の出山あり日本佐渡金山丹州幾野の銀山の如し

一亞墨理駕の內加理料(シンガポール)の地ハ日本の大坂の地之如し富有の家多此地ニ而金銀水銀多出ル

一嫋約省の王城繁花ニして亞美理駕南北の中央ニして東ニ孀阿(シンガポール)の大湊あり西ニカリホルニヤの大湊有之西東船路ニ通都合よろしき處一名花盛敦とも申ス

亞墨理駕濫觴の咄し

日本大永の頃紅毛(ヲランダッ)の連洲歐羅巴(キグニ)人紅毛人ヲ媒約として日本え來り通商願ひ候得共容許無之事有之其前後右歐羅巴人阿蘭陀人ニ同道して天下の諸洲ヲ乘廻し候節初て東大洋の中ニ荒々漠々たる大一洲有を知り天度を考候得は五穀生熟の地なる見て開發の企仕追々人夫ヲ以土地を切開き人民ニ農業致セ國號を建而大新地球と名ク天下輿地球の中第一の大球を新ニ見出したるの心なり。此時ハ未タ南洋ニ墨加邏囉の大洲有事を知る者なしメカラニを見出したるハ近年の事扨初めハ大地新地球北ゟ開き次第ニ南の氣候宜しき方を尋行處々ニ地を開き候處此の地の續き國啞咖哩(ケガリダン)暾の京近所ニ至土地人民多ク始而此の大洲人間栖む事を知る歐羅巴人も此國亞墨利加國ニして國主有之事知り候得共貳拾年も三十年も國を開き人民も多なり候得は人の國と知なから吾物顔ニ横行いたし候間雙方鋒楯となり歐羅巴渡來の新地球人最初の役所咿嚕咖(イルカワンド)喨吐の館をすて吐哆(トタ)咩(ワデア)嚇啞申處え出張南北是ゟ數度の合戰ニ及亞墨理駕開國每戰場の圖傳ニ委しく此の譯を記ス此の事ハ日本慶安の後ニ至とかや其後も每度蝸角の爭不斷居諸(ツキヒ)を送る中歐羅巴

アメリカ人歐羅巴の種ナリ歐羅巴ハ紅毛人の種人物三國同樣

本國ゟ援兵來るといへとも容兵勢イ續難く亞墨理駕も主兵なれとも元來微弱ニして兩(クガ)角沒海鳥兎無關流れる(イニナキネイリ日月ト、マラズ)頃ハ日本の安永五年の春北國帝清河(キタアメリカ)の邊ニ斐暎巨伯某(ヒエイキョハク)と申者實ニ當世の英雄の由衆民攀附(キフク)し北兵大ニ振イ終ニ亞墨理駕國過半入(蟲喰)版圖大新地球の國號を改め大合衆國と名り。大合衆と申祝號也只今迄の暦日を改　殷制建丑の暦法を用イ都を嬢約の花盛敦ニ移百司を建百官ヲ置キ憲章を改規政を起し本家歐羅巴の古則を用ル只千八百七十五年と此事斗古例を用ひ其外ハ不殘改革いたし國勢日ニ盛なり南國不征して面縛(コウサン)し終ニ南北共和の政となりぬ嘉永七甲寅年ゟ七十九年前日本安永五年春の長咄し

本家歐羅巴の暦と出張北美理駕(タメリケン)暦の咄し

夏殷周子丑寅の暦建各聖主の所制何れ優劣ハ無之候得共不詖不發蛇足鞭風此ニ記ス夏(イハネバワカラヌヨケイノムタコト)の禹王の建し暦を建寅暦と申而北斗の柄寅の方と指して夜の明を正月元日とス今の日本正月元日是なり。二十八宿の紀頭(ハジメ)蒼龍七星纏(ヤドリ)の中央ゟ始メ天象ニおゐてハ蒼龍朱雀白虎玄武の二十八星の惣統。五行ニハ木火土金水の初五色ニハ青赤黃白黑方位ニ而は

東南西北春夏秋冬一切の事東寅を以而初とするヲ見れハ夏制正きニ似タリ

殷の湯王ノ建し暦を殷制建丑暦と申なり北斗の柄丑を指し夜の明を正月元朝とス日本の十一月廿八日頃ニして今度渡來の亞美理駕の正月元旦也實ハ日本の十二月朔日ニ而大算ハ可然處を十一月廿八日七日の頃ニ亞美理駕正月の元を建る其の理甚タよろしからす月の盈歇汐の干滿を以而考候得は日本ゟも美理駕を不正トス

アメリカの元旦ハ歐羅巴の十一月廿五日之頃之日本ゟも尚々不正。日の違の咄しハ跡へ轉ス

一周天下を治める武王の弟周公旦暦を制作す建子と申而北斗柄子の方を指して夜の明を元旦と日本の十一月初。歐羅巴の正月元旦。暦の推歩ハ十一月朔旦冬至を以割出しの張本して算用仕候物也周家の天命維新の頃ニ機會其氣候ニ當り暦を改。推歩の咄事長し略之歐羅巴亞墨理加日本と月日ニ違イある咄し

嘉永六年癸丑の六月亞墨理駕船渡來公儀え上書の中ニ　亞美理駕大合衆國都在華盛頓地亞洋年一千八百五十二年十一月十三日即壬子年十月初六日封　同一封之書亞美理駕都在華盛頓西國歐邏巴紀年千八百五十二年十一月十三日吾國建政七十七年即壬子十月六日爲照鑑此書名並花押印章ト御座候　右ニ而考候得は歐羅巴ハ十一月亞美理駕十月

此狀一時冬國ニ而封ノ時

なり又歐羅巴ハ十三日墨理駕ハ六日なり

一當甲寅正月渡來二月四日船中ニ而病死の者あり卒塔婆の銘ニ千八百五十四年三月六日トアリ又三月五日ニ今日ハ四月八日★本國の祭禮日なりと而祝儀有之此ニ而附會の考ニ候得共歐羅巴ハ周制の紀年亞美理駕ハ殷制の紀年日本ハ夏制の紀年日の割ハ亞美理駕正カラザルニ似たり日本も寛政天保改暦の時之工夫有之事ニ候得共ニ日餘違あり歐羅巴ハ阿蘭陀同様ニ天文ニ委しき國ニ御座候得共何ニよりて日割五日餘も違ひ候や知るべからす

★四月八日ハ暦日ノ謂ニアラズシテ釋迦降誕祭ヲ意味シ彼ノ地復活祭ニ對比セシメシモノト考フベキコト前ニ記セシガ如シ

異國船横濱出帆後日の記

三月廿一日小芝沖の異船八艘不殘豆州下田表へ移碇泊ス當月末伊澤美作守浦賀奉行御役御免ニなり下田奉行ニ被仰付彼地へ引越し申候四月初林大學頭ヲ始井戸對馬守鵜殿民部少輔松崎滿太郎横濱ニ出役の御方々豆州下田へ重キ御出役四月初一度應接有之直ニ異船三艘本國へ歸帆いたし四艘ハ松前の箱館へ出帆一艘下田湊柿崎浦ニ殘有之此ゟ五月十四日迄應接無之其間ニ異人一人或日帆柱の上へ上り有之候處急ニ雷鳴いたし其

聲ニ驚き轉落して即死ス右の異人柿崎玉泉寺と申寺へ葬申候下田ニ殘り有之候異人共横濱迄參り申度願度々ニ及候右ハ二月十一日埋葬の異人え墓參の望の由申立候間一旦御聞濟ニ相成五月十四日ニは下田表を出帆横濱浦へ松前箱館行の類船歸帆迄滯留御免ニ相成候處五月十三日箱館ゟ異船三艘歸帆仕候十四日十五日十六日右三日間引續應接有之申候間右横濱墓參一件も相休申候十七日ニ異船一艘箱館ゟ後れて歸帆ス都合五艘ニなり申候

横濱浦埋葬異人の死骸を改葬一件

下田滯留之異人兎角横濱へ改泊之程有之様子ニ而御上ニも御出役御苦勞ニ有之義ニ候得は御評議有之横濱の異人を柿崎玉泉寺へ改葬之義十六日應接之節異人え申渡有之異人も承服仕右横濱之死骸爲持越御徒目附安藤傳藏御小人目附小林猪太郎中川鐵助下田奉行與力合原操藏同同心込山喜太郎齋藤壯之進阿蘭陀通辭志筑辰一郎外ニ異人二人ベエマ、カワクベヒライ右十七日朝下田湊を押送船貳艘ニ而出船いたし其日七★ツ半時相州三崎湊え着此處ニ而一休夜中ニ浦賀湊え入直ニ曉方浦賀を出帆いたし其船十八日晝

★午後五時

★1正午
★2午後二時

★1九ツ時横濱へ着岸仕候村役人案内いたし增德院へ下宿仕候村方人足ヲ以右異人の死骸堀出し申候然處八★2ツ時分九耀の紋印附候早船一艘横濱の岸へ馳附右の船ゟ二人增德院へ參り案内を請イ吾々ハ相州大津の陣場へ出張り異船防禦の爲ニ備へ有之候細川越中守家來固人數之者ニ有之候豆州下田ゟ今朝御越し有之候御役人中え御面會いたし御尋申上度義有之觀音崎の臺場ゟ參り候此段御取次賴入候と申ス右之様子村役人取次候處合原操藏返對ニ出役の面々大切の御用者ニ有之候間面會之義斷申候右承知有之様と取次の者申候得は細川の家來中々其分ニ而歸不申幾度も押返々々取次ヲ以申入是非面會仕一應尋度義有之間可然取次賴入と申候間御目附衆ゟ合原操藏人へ申入面會有之可然と被申候故合原氏無餘義座敷へ通し面會有之一應の會釋相濟二人之內一人若手の侍申候ハ先刻ゟ取次ヲ以申通シ候通我々義ハ細川越中守家來ニ有之候主人越中守大切の御用ヲ蒙り異人防禦の爲ニ相州大津ニ固人數差出し有之處昨十七日異國船一艘浦賀沖へ相見候ニ付固場嚴重ニ待有之候處今朝未明ニ觀音崎固場所先を小船ニ取乘り異人体の者無案内ニ而入海いたし候間大筒ヲ以打放し可申候之處和人も多乘組殊更下田役所の船印等も見受候間引留一應吟味の上と早船ヲ以追付候處當所へ着船候様子ニ見請候間推參いたし面會を請候處大切の御用先と有之面會御斷ニ候其方々御用大切ニ候得は拙者

も御用大切ニ有之候主人越中守蒙り候御用ハ異人入海防の義ニ御座候其許様方ハ異人入海の御案内者と見受候御用大切何れか輕重有之候や此段承度御返對ニ寄今夕立歸重役の者へ申談そんしゝの筋も有之候と夫ゝ三崎下田の關所引替り享保年中ハ浦賀へ關所を移シ諸國の大名の武器改の講釋を仕中々六ヶ敷申流石の合原も返對無之迷惑いたし候其内ニ日も暮れ候得は今壹人の老人申候ハ即對の御返事ニ不參義ハ御同役も可有之候間明朝迄ニ御返事可承る今夕ハ下宿へ引取可申候と夫ゝ金川へ船ニ而參る其翌朝七ッ半時下田役人并異人同船帆出いたし拾町餘りも參り候得は細川の船金川ゝ來り增德院へ參り最早出立の由聞急き追掛け參り候得共其後如何相成しやらん不知横濱役人惣代之者十九日出府異人埋葬の一件始末御支配并ニ領主へ達し申候

下田の異船五艘不殘五月廿八日歸帆仕候

六月十八日入海異船一件

寅の六月十八日亞美理駕船一艘小芝沖ニ碇泊ス浦賀奉行組與力乘入相改候處此船は亞美理駕大合衆國之内伽俚料嚕啞の船ニ而船の名ハルヱイビイと申ス船主の名ハプルス其子の名ハジンヤプルス右親子乘リ外乘組十七人都合拾九人なり此船渡來之一件ハ上杉彈正大弼領分越後岩船郡根谷村善助船十三人乘り丑の九月十三日松前江差の沖ニ而難風ニ逢舵を損し五十五日漂流ス初の日ハ南風（南風ハ彼地ハ急度大嵐ニなる）夫ゝ西風ニなり候其後ハ篤と覺も無之尤海上ニ而十二人追々ニ相果候程の難澁ニ而廿四歳勇之助一人殘有之候處三本柱の帆懸け船一艘ニ逢一生懸命の場所ニ候得は右之船を呼かけ候處彼船ゝ旗印を出ス相圖いたし候得は勇之助大ニ喜居候處此船過行申候間大ニ力を落し居候處半日程過候時分右之船立歸り右勇之助を助乘セ伽俚料嚕啞へ連行十月ゝ當年四月迄介抱いたし四月彼地を出帆し送り來六月十八日此地へ着ス右之趣申上間此節異船掛之義ハ下田奉行伊澤美作守掛ニ候得共（は）下田へ參り懸合可仕旨申渡し此船廿一日ニ小芝沖を出帆し下田へ參り右勇之介當年廿五歳伊澤美作守へ引渡同月卅日ニ出帆仕候右勇之介義漂流の義丑の九月ニ候得はアメリカ船昨六月渡來來寅の春か秋迄之内ニ又々來リ候由の日本一同右の風聞有之の後ニ候得は日々處々を見物し樣子等見屆手帳ニ付來り候由此節下田ニ而御調中ニ御座候カリホルニヤハ此方ニ而申通り繁花の湊花盛敦京も實ニ結構の處の由其所之人物の風俗心底等迄態委しく知り候由　土佐の中漠万治郎ハ七ヶ年間アメリカニ有之候得共ワフの地ニ有之尚又アメリカ船日本へ渡來之義ニ無心之間

海外書牘トハ米使ノ齎シタル國書ニ名付ケタルモノニシテ原本ハ前者トハ別冊ヲナスモノナルモ共ニ石川家ノ所藏ナリ

使節派遣ノ趣旨書ミラード・フィルモーア

★マッシウ・シーベルリ

此勇之助か其事而已ニ心附候とハ大ニ違申候様子勇之助近日御召出之由

海外書牘

北亞墨利加合衆國伯理璽天德

シルラト人名ヒルモオレ人名書ヲ皇帝陛下ニ呈ス

日本國帝殿下ニ呈ス

予今水師提督マッテウセ・ペルリ人名ヲ以テ書ヲ殿陛下ニ呈ス此★者ハ即合衆國ノ海軍第一等ノ將ニシテ今次テ殿陛下ノ領土ニ航到セル一隊軍監ノ總督ナリ予既ニ水師提督ペルリニ命シテ予カ殿陛下ニ對シ貴國ノ政延ニ對シ極メテ言絶ノ情ヲ含コトヲ告言明セシメ且今次テペルリヲ日本ニ遣スハ他ノ旨趣有ニアラス只我合衆國ト日本トハヨロシク互ニ親ミ睦シク且交易スヘキ所ナルヲ告知ラシメント欲スルニアルノミ

合衆國ノ基律憲法及ヒ諸律法律ハ固ヨリ其各個民人禁戒ヲ下シ他國ノ民ノ教宗法政治ヲ妨クルコトヲ得サラシム予特ニ水師提督ペルリニ命シテ是等ノ事ヲ嚴禁セシム是貴國ノ安穩ヲ妨ケサラン事ヲ欲シテナリ

此北亞墨利加合衆國ハ大西洋ヨリ達スルノ國ニシテ就中其オレゴン州及ヒカリホルニアノ地ハ正ニ貴國ト相對ス我乘氣船カリホルニアヲ發スル時ハ十八日ヲ經テ貴國ニ達スル事ヲ得ルナリ

我カリホルニアノ大州ハ毎年凡金六千万トルラル按ニトルラルハ和蘭ノ二キュルデン五六一ニ當ルヲ云今キュルデンヲ銀四匁五分ニ當ルトシテ銀六十目ヲ金一兩ニ目算スレハ六千万トルラルハ日本ノ千百五十二万四千五百兩ニ當ル

銀若干水銀若干寶石若干種及ヒ其他諸種貴重ノ物ヲハ件カリ產ス日本モ又豐富肥澤ノ國ニシテアマタ其替ノ物品ヲ出ス其國ノ民諸種船ノ技藝ニ長セリ予カ志二國ノ民ヲシテ交易ヲ行ハシメント欲ス是ヲ以テ日本ノ利益トナシ又兼テ合衆國ノ利益トナサンコトヲ欲シメ也

貴國從來ノ制度支那人及ヒ和蘭ヲ除クノ外ハ外國ト交易ヲ禁スルハ固ヨリ予カ知ル所ナリ然レトモ世界ノ中財材勢ノ變摸ニシタカヒテ新律ヲ定ルヲ智ト可評蓋シ貴國舊制ノ諸律初テ世上ニ聞ヘシ時ハ今ヨリコレヲ見レハ既ニ甚タカハリタリ

此時ニ當テ亞墨利加州始テ見イタサレ或ハ是ヲ新世界ト名ケ歐邏巴人コレニ住樓セリ

コノコロニ在テハ亞墨利加ハ人民稀ニ少ウシテ其民皆貧陋ナリシカ當今ハ民口大ニ蕃息シテ交易甚弘博トナレリ故殿陛下若舊律ヲ改革シ兩國ノ交易允准アルニ於テハ兩國ノ允準ス

利益極テ大ナルコト疑ナシ

然レトモ殿下若外國ノ交易ヲ禁停セル古來ノ定律ヲ全ク廢棄スルヲ欲セサル時ハ五年或ハ十年ヲ限リテ允准シ其利害ヲ以テ察シ若果シテ其國ニ利ナキニ於テハ再ヒ舊律ヲ回復シテ可ナリ合衆國他國ト盟約ヲ行テハ常ニ年數ヲ限リ約定ヲナス而シテ其事ノ便宜ナルヲ替ルトキハ再ヒ盟約ヲ尋コトヲ殿下ニ告明セシム合衆國ノ船每年カリホルニアヨリ支那ニ航スルモノ甚タ多シ又鯨獵ノタメニ合衆國ノ人日本ノ海岸ニ近ツクモノ少カラス而シテ若颶風アル時ハ貴國ノ近海ニテ往々破船ニ逢コトアリ若此等ノ難ニ逢ニヲヒテハ貴國ニ於テ其難ヲ撫鄙シ救ヒ取ル事ヲ待ン事是予切ニ請フ處ナリ

予又水師提督ペルリニ命シテ次件ヲ殿下ニ告シム蓋シ日本ニ石炭甚多シ又食料多キコトハ予カ曾テ聞シレル處ナリ我國ニ用ル處ノ乘氣船ハ其大洋ヲ航スルニアツテ石炭ヲ費ス事甚多シ而シテ其石炭ハ亞墨利加ヨリ搬運セントスレハ其不便ヲシルヘシ是ヲ以テ願クハ我國ノ乘氣船及ビ其他ノ諸船石炭食料水ヲ得ンカタメニ日本ニ入ル事ヲ許サレンコトヲ請フ若其償ハ償銀ヲ以テスルモ或貴國ノ人民好ム處ノ物件ヲ以テスルモ可也請フ殿下貴國ノ南地ニ於テ一地ヲエラビ我舟ノ入港ヲ許サレンコトヲ是予カフカク願フ處ナリ

★「其ノ財物ヲ保護シ以テ本國ヨリ一船ヲ送リ難民ヲ」ヲ加フ

右ノ故ヲ以テ予今水師提督ペルリニ命シ一隊軍船ヲ以テ貴國有名ノ大府江戸ニ到ラシム和親ノ交易石炭食料及ヒ合衆國難民ノ撫鄙ハ即其許ニアリ

予更ニ水師提督ペルリニ命シテ殿下ニ悲微ノ工物ヲ献セシム願クハ是ヲ容ンコトヲ其物モトヨリ甚タ貴カラストイヘトモ又以テ合衆國ノ諸物制造局ノ概ヲ見ニ足ルヘシ且予ハ正シク敬愛ノ微意ヲ表スルニ足ンカ伏シイノル

皇天殿下ノ爲ニ祥ヲ垂ンコトヲ爾書シ終テコヽニ合衆國ノ大印章ヲ印シ且自名姓ヲ著ス

時千八百五十二年第十一月十三日（日本嘉永五年壬子十月二日ニ當ル）

予カ政務本所亞墨利加ワシントン府ニオヒテス

伯理璽天德ノ命ヲ受ケ　ミルラト　ヒルモヲレ　親筆

外國事務宰相　エトワルト　エヘレット　親筆

合衆國伯理璽天德副翰　和解

合衆國水師提督マツテウセベルリ其人トナリ誠實周密才能アルヲ鑑識シ拔擢シテ全權ノ任膺ヲ合衆國ノ使節トシテ貴國ノ同等權要ノ位ニ在ル官人一員若クハ數員ニアヒ語言ヲマシヘ且一次若クハ數次ノ會固ヲナシテ兩國ノ親睦交易航海及ヒ其地兩國ノ民人ニ切要ナル諸件ノ和約ヲ親書セシム是ミナ合衆國參政合議シテ更ニ伯理璽天德ノ允准

★1 製造品ノ標本

★2 原本ニ「祥カニスルヲ」トアレトモ誤リナルコト明カナリ

★3 大統領ノ命ヲ受ケテ國務卿エドワード、エベレット使節全權委任書

★4 マツシウ・シ！・ペルリ

ヲ經シ處ナリ爰ニイヘル處ノ寺件ヲ證スル爲合衆國ノ印信ヲ印メ附ス

千八百五十二年即亞墨利加合衆國獨一(立建國)連以來七十七年第十一月十三日(嘉永五年十月二日)

ワシントン府ニ於テ

伯理璽天德ノ命ヲ奉テ

★1外國事務宰相　エトワルト　エヘレッド　親筆

外臣ベルリハ東印度支那日本海ニ備ヘタル北亞墨利加合衆國ノ兵勢ヲ統帥セル者ナルカ此度本國ヨリ命セラレ好意ヲ以テ此國ニ差撥(遣便)シ使宜ニ應シテ事ヲ行フヘキ大權ヲ假シテ日本ノ政廷トノ事ヲハカラシム其事体ハ我國合衆國伯理璽天德ノ書牘ノ中ニ記載ス右書牘及ヒ外臣ベルリニ欽差全權ノ奇(寄)託セル書共ニ英吉利○和蘭○支那(陸)ノ文ニ飜譯シ合テ是ヲ呈ス伯理璽天德ヨリ上ル本書及ヒ欽差ノ本書共ニ日本國帝殿下(陸)ノ高貴ナル爵位ニ應シテ調度セリ外臣マサニ自ラ激納(受)スヘシ願クハ殿下(陸)預メ交校(換)ノ日(蟲喰)ヲトシテ告示センコトヲ

某更ニ殿下(陸)ニ上告(蟲喰ト)スヘキ命ヲ受テ伯理璽天德ハ日本ニ對シ友愛ノ意思ヲ抱ケル合衆國ノ土人彼是ノ緣故ニテ貴國ノ地方ニ來リ或ハ船難ニアヒテ此地方ニ漂到セル時ハ貴國

★1國務卿ベルリノ書翰

★2大統領

(本書署者)

是ニ待遇スルコト讐敵ノコトクナレハ實ニ驚駭痛心スル處也是蓋シ往年貴國ニテ亞墨利加船ニ★ラコタ(船)ラウレンセ名○遇スル事ノ霖置ニツイテ言ナリ

亞墨利加人ハ猶基利斯督○宗弦(教)國(西洋諸國)ノ習俗ノ如ク其國ノ海岸ニ漂到セルモノハ何レノ地ノ人タルヲ詢(論)ス愛シ容レ且極(恤)救撫鄙(恤)ヲ以テ仁慈ノ所爲トセルナリ是ヲ以テ貴國ノ民人合衆國ノ領地ニ漂到スル者皆是ヲ撫鄙(恤)セリ

凡貴國ノ海岸ニテ難船スル者ハ逆風犯(狂)浪ニ遇ツテ貴國ノ港内ニ入ル者ハ貴國政廷(仁)慈ヲ以テ是ヲ處措セントノ明證政府ニ望ム處ナリ

(本書署名者)又某ニ命シテ貴國ニ告シム合衆國ハ歐邏(羅)巴諸國ノ中何レノ國トモ合縱(同盟)スルコトナシ又政律ニテハ國内各人隨意ノ教(宗教)法ニ至リテハ固ヨリ是ヲ是非スルコトナシ亞墨利加人ハ日本ト歐邏巴トノ間ニ有ル大國ニ住ス此大國ハ歐邏巴人初テ日本ヲ見出セシ頃發明セル國ニシテ其初ハ大國ノ内尤歐邏巴ニ近キ地方歐邏巴ヨリ家ヲ徒(徒)シテ來レル者ノミ居住セシニ民人スミヤカニ繁茂シテ全國ニ及ヒ竟ニ南太平海ノ海岸ニタツシテ今ハ國内ニ幾多ノ大都府アリテ其府ヨリ乘(蒸)氣船ニ乘シテ發程スル時ハ十八日若クハ二十日ニテ日本ニ到ルヘシ然レトモ我國ノ交易スミヤカニ貴國ニ繁盛シ我國ノ舟舶日本海中ニ粟散スルニ至ルコト遠キニ非ルヘシ合衆國ト日本トハ追日次第ニ相近ク相交ルニ至ル免

★モリソン號ラゴタ號ローレンス號

サレサルカ故ニ伯理璽殊ニ日本國殿下ト好ヲ結テ修センコトヲ欲ス然レトモ貴國亞墨利加人ニ對遇スルコト寇讎ヲ見ルカ如クスルノ風習ヲ禁止スルニ非サレハ其交信豈久シカランヤ

（大統領）（皇帝陛下）（交ヲ）

外國ト交ヲ絶チ是ヲ仇ト視ル貴國ノ法制ハ其初テ法度ヲ立ル時ニ在テハ智慮有ル處置ト言ヘシトイヘトモ今ハ兩國ノ相交ル事昔ニ比スレハイタツテヤスク且速カニイタリタレハ此舊制ヲ固守セント欲スルモ是無智ノ謀ニシテ自今決シテ行フヘカラサル處ナリ

外臣某以上ノ說ヲ陳シ專ラ願クハ日本ノ朝廷ニテ兩國ノ民爭鬪ヲ致スヲ防クノ策ヲ以テ必要トシ正實友愛ノ誠情ニ答ルニ好意ヲ以テセンコトヲ日本ヘ存問センカ爲ニ大軍船數艘イマタ此海ニ到着セス某等徒ニ是ヲ待ノミ某今イサヽカ其友愛ノ情ヲ表センカ爲ニ四★小船ヲ以テ貴國ニ到レリ明春マサニ事体ニ應シテ尙數艘ヲ增シ再ヒ航來スヘシ然トイヘトモ日本國帝殿下ノ政廷願クハ某カ再ヒ來ルヲ待ス伯理璽天德カ書中ニ公平好和ノ策ヲ採用有ンコトヲ　但シ其ノ書中ノ本旨ハ近日使宜ヲ得ヲ待テ某マサニ自ラ詳悉スヘシ　日本國帝殿下ニ對シ深ク崇敬シ奉ル誠心ニ殿下ノ康寧福全萬壽無疆ヲ祈ル

（本書署名者）（本書署名者）（本書署名者）（本書署名者）（便）（陛）

★小艦四隻サスクハナ號ミシシツピー號サツプライ號カブリス號

東印度支那日本海ニ在ル合衆國海軍ノ統帥

★マツテウセ。ペルリ親筆

千八百五十三年七月七日　日本六月二日ニ當ル

日本ノ近海ニテ合衆國ノ蒸乘氣　船中ニ於テス

（フレアツト船）（ミコスケ船）

合衆國提督口上書　和解

合衆國ノ海軍總督某盟約ヲ結ン爲ニ全權行事ノ特命ヲ承テ此海ニ來ル今帝國日本ノ貴官中ノ一員ト會合シテ受囑ノ欽差書牘及ヒ通信書牘ヲ捧ント欲ス此ニ牘即チ合衆國ノ伯理璽天德ヨリ日本國帝殿下ニ呈スル處ナリ

（陛）

右ノ會合ハ近一日ヲ擇ヒ是ヲ約定センコトヲ願フ

千八百五十三年第七月十二日　日本六月七日

浦賀湊ニ於テ書ス

★マシユウ。カルフレース。ペリー

予日本ノ政堂ニ差出セル一書ハ甚重ク且大切ナル問對ヲ載タルモノニテ是ヲ詳決センヲ爲ニ多少ノ時日ヲ要スヘキモノナル由領承セリ

（解）

予此事ヲ熟考シ明年早春予マタ江戸海口ニ來リテ右呈書ノ報答ヲ乞ントス其時ハ諸事親シキ所法ニテ且雙方ノ人民互ニ安全ヲ保ツヘキノ規待ヲ受ン事ヲ冀フ處ナリ

東印度支那及ヒ日本海ニ現在セル合衆國ノ全部海軍ノ總督マッテウセ・ペルリ

合衆國蒸乘氣フレアット ミコスケハンナ船上ニアリテ

千八百五十三年七月十三日　日本六月八日ニ當ル

江戸海口浦賀ノ湊ニ於テ謹白

亞墨理駕船渡來日記及海外書牘終

亞米利加船渡來日誌

亞米利加船渡來日誌

嘉永七甲寅年正月北亞米利加合衆国ノ軍艦内海
渡来ニ付久良岐郡横濱ノ海岸ニ於テ政府ヨリ御役人出
張ノ応接アリシ概略ハ見聞ノ儘ヲ日誌セリ

正月十日豆州大島沖ニ異国船数艘帆影見ヘ候由
韮山陣屋江川太郎左衛門殿ヨリ公儀ヘ御届アリ依テ当所
癸丑年六月公儀ヨリ近海警衛ノ諸侯ヘ御達ノ次第モ
有之ニ付警衛御備人数并御浦固ノ手当ニ及ビシ

一仝十二日昨十一日大島沖ニ見ヘシ異国船何レ方ヘ航海セシ乎
帆影相見ヘ不申ヨシ浦賀奉行ヨリ注進アリシトゾ

一仝十三日警衛ノ諸家人数繰出シテ異国船帰帆ノ由ニ付
途中ヨリ引返シニ向ヒテ既ニ本牧迄警衛ノ同州家中
粮米等江戸ヨリ廻漕セシテ積来ルトノ事既ナリ

添田本亞米利加船渡來日誌

ペルリ日本遠征記所載前出

亞米利加船渡來日誌

嘉永七甲寅年正月北亞米利迦合衆國ノ軍艦内海エ渡來シ久良岐郡横濱ノ海岸ニ於テ政府當時ノ官吏ト應接アリシ概畧見聞ノ儘ヲ日誌セリ

一　正月十一日豆州大島沖ニ異國船數艘帆形相見ヘ候由韮山陣屋江川太郎左衛門殿ヨリ公儀ヘ御屆アリ右は嘗テ昨癸丑年十一月公儀ヨリ近海警衛ノ諸侯ヘ御達ノ次第モ有之ニ付警衛役所人數出張繰出しノ手筈ニ及ハレケル

一　仝十二日昨十一日大島沖ニ見ヘタル異國船何方ヘ航海セシカ帆形相見ヘザルヨシ浦賀奉行ヨリ注進アリショシ

一　仝十三日警衛ノ諸家人數繰出セシモ異國船歸帆ノ由ニ付途中ヨリ引戻セシ向モ有之既ニ本牧邊警固ノ因州家抔ハ粮米等江戸ヨリ廻漕セシヲ積戻ストノ景況ナリ

一　正月十四日異國船一艘海上朝霧ノ中ニ現出シ浦賀番所乗入小柴ノ沖ヘ碇泊ス該船ハ昨夜松輪三崎ノ海岸水中ノ岩ニ乗掛小破有之シガ今日船ヲ横ニ傾ケ破損所ノ修復ヲ爲セシ容子ナリ

一　仝十五日異國船渡來ヲ聞傳ヘ追々見物人海岸ヘ立入候ニ付浦賀奉行ヨリ浦觸ヲ以達セラレタリ

異國船碇泊ノ場所ヘ小船ニテ猥ニ近附候者モ有之哉ニ候右ハ御國法ヲ辨ヘス如何ノ事ニ候以來右體ノ輩見受次第捕押ヘ嚴重ニ可申付候右ノ趣浦賀ヨリ神奈川迄不洩樣可相觸もの也

浦賀　御奉行

浦賀ヨリ神奈川迄　浦村名主　年寄

一　仝十六日今日四ツ半時頃異國船追々乘入夕方迄ニ七艘トナリ孰レモ★小芝ノ沖ニ碇泊ス今夕細川家警衛人數三浦郡御備場ヘ出張ニナル

★亞米利加碇泊地

一　仝十七日小柴沖碇泊船ヨリ小船ハッテエラト唱ル四艘ニ乘本牧沖ヘ乘參リ壹艘ハ八王子ノ磯ヘ漕着岩ニ落書ス夫等ノ景狀同所御固メ松平相模守出張ノ人數ヨリ早船ヲ以テ江戸ヘ注進ス將又浦賀奉行ヨリハ十四日番所内海ヘ乘入候以來彼船ヘ檢使被差遣一ト先久里濱海岸ヘ乘戻シ其上應接可致ス旨掛合有之シモ彼船將肯セス此所ニ碇泊シテ乞願ノ旨趣政府ヘ執奏アランコトヲ主張セシ由

★前記石川本ニハ九里濱トアリ

一　十八日浦賀奉行組與力衆異國船ヘ尙碇泊所及應接所掛合トシテ彼船ヘ被罷越鎌倉由井ケ濱ヘ廻船ノ儀申入シモ前同樣江戸近海ニ碇泊ヲ主張シテ止マス★

一　十九日浦賀奉行附役人外國人同船ニテ金澤ヘ上陸彌々應接スルノ場所見分セシニ同地ハ不都合便利宜シカラズトテ外國人ヨリ斷言セリ

一　正月十九日浦賀組御役ニ異人同行ニテ金澤上陸ノ次第同地陣屋米倉侯ヨリ御上申ニナル

一　仝廿日異人小船ニテ小柴ノ鼻ヘ乘廻リ岩ヘ樂書致シ候

一　仝廿一日異人小船及本船壹艘本牧十二天鼻ヘ乘參リ直ニ又小柴沖ヘ歸船ス今日神奈川浦警衛明石侯人數同所ヘ着

一　仝廿二日上總富津御備場會津侯御人數御出張相成居候所此地方ニテハ外國船ノ擧動相分ラス候迚當本牧邊ヘ見置トシテ押送リ船ニテ其掛リ役人被參先日來所々ノ岩ヘ異人樂書セシ横文字解譯被成候ニ當廿五日ハ亞美理駕國王誕生日ニ當リ祝砲ヲ打候事ヲ記し置シト言★

ペルリ日本遠征記所載前出

★大統領

一　仝廿三日觸書浦々ヘ御達しニ曰ク

來ル廿五日小柴沖滯留ノ異船ニテ亞美理駕國王ノ誕生日ニ付右七艘ノ異船ニテ祝イトシテ空砲十六七發宛打候間聊心配之儀ニは無之候條動搖致間敷もの也

寅正月廿三日

美　作

相州浦賀ヨリ武州神奈川迄　右浦村名主

ペルリ日本遠征記所載前出

一　仝廿四日異狀ナシ

一　仝廿五日異人本日國王誕生日ナルヲ以テ祝砲トシテ大筒ヲ打放ス事夥多シ砲聲二三十里ニ響亘リ戸障子ニ鳴渡リ觸書ヲ心得サルモノハ最早合戰ノ始マリシト疑ヒタルヨシ

★大統領ジョージ・ワシントン誕生日前出

ペルリ日本遠征記所載前出

一　仝二十六日別條ナシ

一　仝廿七日小柴沖滯泊ノ本船ヨリ小船（バッテエラ）ニ打乘四五人宛左右櫂ニテ漕海中ノ淺深ヲ測リ其跡ヨリ追々本船ヲ走リ羽田沖迄乘入同所碇泊ス

同前

一　正月廿八日羽田沖ノ異船ヨリ小船ハアテエラ二艘神奈川浦ヘ乘參リ二艘ハ横濱ヘ到ル浦賀ヨリ役船一艘ヘ組與力香山榮左衛門外役々乘組上陸相成同人案内ニテ應接場御定メトシテ見分有之當村寺院御尋ニ付增德院ノ容子申立候處海岸ヨリ道法等不便ノ由ニテ海岸通リ御見分字駒形ト申所相應ノ場所ニ候迚豫メ其邊ヘ印シヲ立置相成夫ヨリ異人ハ（貳十人斗）村内歩行★（ギヤマン）ノ德利ニ酒入有之ヲ携ヘ參リ夫ヲ呑盡シ明キ德利ヲ見物人ニ遣スヘキ手間似スト雖モ誰アッテ請候者無之右ハ豫テ御役人方ヨリ御達示ノ次第モ有之ニ付取敢申モノ無之因テ右明キ德利ハ海中ヘ打捨候扨又横濱村ノ者共ハ今日應接場當村ト定マリ此上其模樣ニ寄テハ戰騷ニモ可相成歟ト老人妻子家財諸雜具迄或ハ近在親類家ヘ相運ヒ可申乎ト人々安キ心ハ無之晝夜動搖罷在候

★此ノ事石川本ニハ無シ

ペルリ日本遠征記所載前出

一　仝廿九日異船ハッテエラニテ小船ニテ八王子鼻ヘ着樂書ス右は明日横濱ヘ上陸スルト言文字ノ由

一　二月朔日羽田沖ノ異船横濱沖ヘ改碇ス夕六ッ時ニ笛大鼓ニテ音樂ヲ催シ又大筒一發ス已後朝暮仝

一　仝二日今日ヨリ字駒形ヘ應接所建築ニ着手小屋ノ切組等ハ浦賀ヨリ廻漕ニナル

一　仝三日小屋場地平均等晝夜通し切組陸揚ス

一　仝四日今朝松輪ケ崎沖ヘ異國船相見ヘ候由浦賀ヨリ神奈川宿出張ノ御奉行方ヘ注進有之

一　仝五日前日ノ注進ニ付テ應接掛伊澤美作守殿ヨリ左ノ御達し有之

昨朝相州松輪ケ崎沖ヘ異國船一艘碇泊致し候尤亞墨利駕類船ノ趣ニテ大筒二十挺据有之風模樣次第早速江戸表ヘ罷越候趣手眞似致し候由今朝浦賀ヨリ申越し候間心得ノ爲此段申達し候

二月　五日

傍點ノ所ハ石川本ノ方正シカラン

石川本ニハ異船一艘新ニ入海等ノコトヲ記ス

ペルリ日本遠征記所載前出

石川本ニハ二拾六七艘トアリ

石川本ニハ三百六十人トアリ

猶應接組ノ者相成丈ケ乘込マセス引留置申諭中ニ候得共類船ニ候故行屆申間敷旨申來り候

一 二月五日今日應接可有之ノ處差合出來延日ト申事

一 仝六日別條ナシ

一 仝七日同斷

一 仝八日應接場建物見分トシテ伊澤美作守殿井戸對馬守殿林大學頭殿鵜殿民部少輔殿其外役々普請出來形見分右は神奈川旅宿ヨリ船ニテ被相越候異人モ十六人程場所見置トシテ上陸ス御觸達左ニ

明後十日神奈川沖滯留ノ異船ニ於テ應接ノ爲祝砲右八艘ノ内ニテ空砲五十發程打放シ候間砲聲等響キ可申候へ共空砲ノ事故心配ノ義は無之候間動搖致ス間敷候尤雨天日送ノ積ニ候條右之趣不洩樣相觸可申もの也

一 仝九日應接場異人へ懸リ場所御渡しニ相成夕方幕ヲ打廻し候

一 仝十日今日ハ初メテノ應接ニテ異人凡七百人程ハッテヱラ船二十八艘ニテ上陸ス其行列鐵砲ヲ携候者三百五拾人程内百二十人ハ淺黃色ノ裝束其他ハ黑色何レモ羅紗ノ筒ホヲ玄關前ヨリ海岸迄左黑ノ方前後ニ並ヒ淺黃ノ方壹人並ヒ立其間ノ所へ別ニ肩へポタン金物サシタル者二十人斗又其ポタンニ房ノ下リタル者十人斗立鐵炮方ハ間々ニ二人四人宛立其兩中ニ軍令役ト相見へ候者黑裝束肩ニポタン金ノフササガリタル異人股引ニハ赤キ割ノ入タルヲハキ劍ヲ拔持其行列ノ差圖ヲ爲シ大將分ト相見ヘル又一番跡ヨリ上陸セシハ惣太將ト見へ上陸ノ時ニ音樂イタス直クニ應接所へ入供ノ者十人斗玄關前迄附副扨一同相揃候へハ大船ノ方ニテ大筒一發宛三面ニテ打放ス今日出張ノ御役々浦賀奉行伊澤美作守殿大目附兼町奉行井戸對馬守殿御儒者林大學頭殿通詞森山榮之助堀辰之助名村五八郎浦賀組與力組頭黑川嘉兵衛其外與力同心衆凡貳百人程御代官齋藤嘉兵衛殿手附山口茂左衛門等其他應接場警衛トシテ小笠原大膳太夫眞田信濃守兩家出陣ノ人數等也夕七ツ時頃ニ應接相濟異人へ御饗應有之獻立料理左ノ通

石川本ニハ百川茂左衛門扣トアリ

江戸料理店　百川茂左衛門仕出シ

一 長熨斗敷紙三方

一 銚子

一 干肴　松前スルメ

一 猪口　唐草カレイ　同防風山葵セン

一 盃内曇り土器　三ッ組

一 吸物　鯛ひしほ

一 中皿　ハマチカレイ　青ノ山椒

右七色ハ前

其次

一 吸物 花ノ千巻鯛 ミノ大根粉山椒
一 吸物 クラカケ ヒラメ/フキノトウセン
一 大平 玉子ノクヅ引 肉ヨセ 串子火トリ大根 白魚 小ギク 生椎タケ ホソ引人參 寄山椒
一 差身 平目生作 若葉竹 メジ大根 生ノリ 鯛 小川巻 花山葵

二汁五菜本膳

一 鱠 鮑サラサ 白髪大根 イト赤貝
一 香ノ物 ナラ漬瓜 ミソ漬 茄子 サヽマキ菜

二ノ膳

一 味噌 小金洗鯛 寄セ海老 白髪長芋 揃三ツバ
一 臺引 大蒲鉾
一 猪口 花イカ 鴨麩
一 焼物 鹽鯛

石川本ニハ下部トアリ

下官ノ部

一 吸物 吉野葛 玉の露
一 銚子
一 通湯水 本ノマヽ
一 盃
一 小皿肴 ヒラメ作身 花生姜
一 蔓子落雁

一 硯蓋 紅チクハ 伊達巻 酢シ花形長芋セン 昆布 九年母 鶴ノ羽モリ 川茸セン 車エビ 精松露 押シギンナン
一 丼 碗 鴨大身 竹ノ子 ミョウガセン
一 茶 碗 ロトサ醤油 イリ酒 辛子
一 猪 口 菜ノツミ入 二葉ノ菜 布袋シメジ 千鳥午蒡 花ウト
一 汁 坪 クヅ花子 煮ヌキ豆腐 花菜

一 亞留餅 幅四寸 長六寸

右ハ下士一同ヘ被下

今日應接ノ概意ニ曰ク昨丑六月中欽差役彼理ヨリ差上タル書翰ノ如ク交易一條豆州沖八丈島南小笠原島ノ沖ニ赤體(ハダカ)島新開ト下田表ニテ薪水ヲ乞フノ情願(請)ナリト云々猶亦異人ノ内海軍指麾役壹人船中ニテ病死セシニ付當地ヘ埋葬地拜借仕度旨申出タリ此義ハ免許ニナル

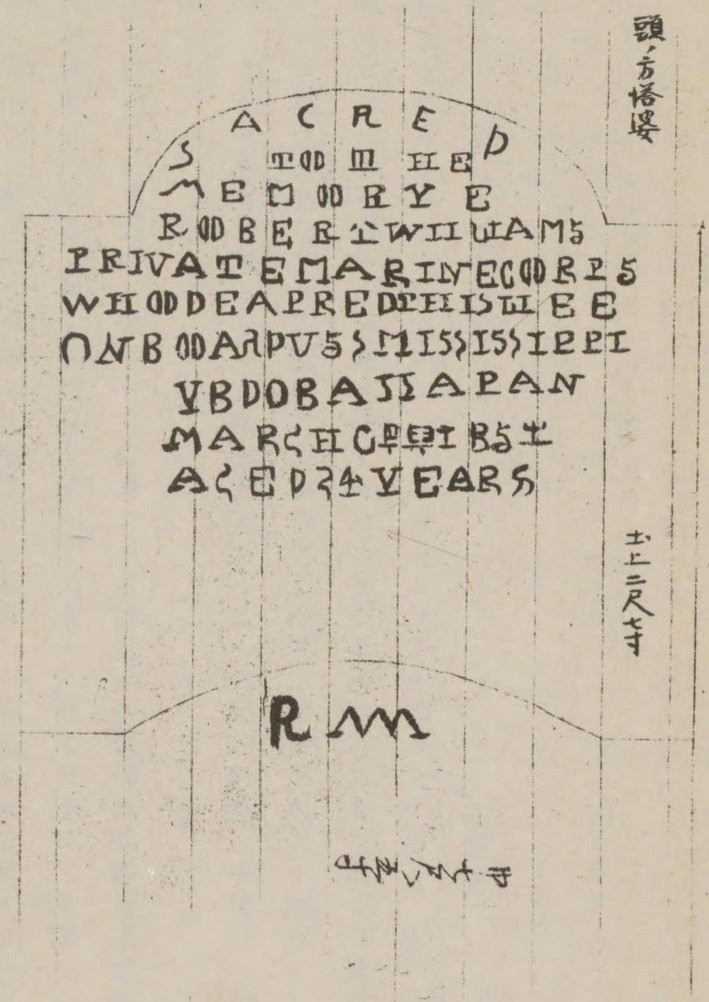
一 十一日今日病死セシ異人遺骸葬式ス上陸ノ行列一番先ニ船將アハタムス鐵炮方二人次ニ三人其次ニ二人塔婆持二人棺持四人手代リ十人塔婆持ト鐵砲トノ間ニ大鼓アリ

碑名 ブルイフエテエウエルリアムス ロヘルトソルフヌエホン 元軍艦ニテ此地ノ海軍ヲ出帆シ日本ノ湊江戸ニ ミスシイプビト云船ニ乘 二十四歳卒ス 紀元千八百五十四年三月六日

棺 長七尺五寸
圖 巾二尺五寸

ペルリ日本遠征記所載前出

頭ノ方悟婆



土上二尺ナリ

足ノ方別碑二字人ノ名ロロヘRノ音ニ合ロロヘRトノ頭字ロ江M官名ノ頭字

ウエルリノウエルリノウエトノ申由承リ候ハ共疑トハ不分明

唐艸ノ打シキニ包ム頭ノ方丑寅ニ向ケ少ク高シ足ノ方低ク埋ム首ノ方此國ノ由日本葬式ノ如ク船將アハタムスハ十得衣ニ似タル衣ヲ着シ導師ノ體ニテ懷中ヨリ經ヲ出シテ讀誦ス傍ニ壹人横笛音樂ヲ奏シ埋ムル時ニ鐵炮方ノモノハ穴ヘ炮發ス穴堀ヨリ埋了ル迄異人取始末セリ今日上陸ノ案内トシテ浦賀與力合原操藏齋藤某二人ナリ

一　仝十二日亞米利駕船渡來ニ付テハ遠近ノ風説傳聞種々有之ヨリ直ち江戸表ヨリ船路見物ニ參ルモノ等夥多ニシテ右制シ方取締等嚴重被仰出御觸達アリ

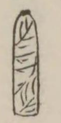
異國船渡來願ノ筋有之神奈川沖ニ碇泊致し有之ニ付見物體ノ者モ有之由相聞ヘ候己來見物ハ勿論彼方角ニ用事有之候者モ遠慮可致者也

知通曰ク　此事件ニ付テ横濱村は當時荒川欽次郎ト申旗下知行所ニシテ外國船渡來應接所ト相成候ヨリ諸御用筋可差支旨ヲ以テ御代官齋藤嘉兵衛御預リ所ニ被仰出依之手附山口茂左衛門不取敢横濱村へ出役又神奈川宿へ奉行衆役々出張ニ付手附元〆杉浦武助田中第五郎其外代々ニ出役ニ相成當時川崎領海岸村々爲取締秋葉金次郎渡田村太平宅へ出張相成海岸村々名主ノ内重立候者其外街道筋ニテ

石川本ニ觸達ノ全文ヲ記載セリ

ハ拙者事取締向心得トシテ被命御用中割羽織着用日々海岸村々見廻リ見物人制方相勤晝夜奔走ス且川崎宿問屋場ハ臨時右御用注進ノ早追警衛方人數出張等ニテ不時人馬繼立方モ有之ニ付テ夫々豫備人馬等圍置候程ノ事ニテ不容事非常ノ賄方ニ有之扨又江戸表は富商ノ町人等在々緣邊ヘ荷物等ヲ送リ市民ノ動搖一時は如何可成行哉ト寢食安カラサル狀況ニアリシナリ

石川本ニハ廣東人羅森ノコトヲ記セリ

一　二月十三日今日ハ異人上陸ナシ當月二日以來日々五七人又は十人貳拾人位宛上陸シ村内遊歩シ若キ婦人小兒杯ヘ戯レ菓子杯與ヘ候菓子ト見タルハ小麥ノ粉ニテ製シ之ヲパント稱シ食料ト言又煙草ハ葉ヲ卷付長サ四寸位ニ丸ク  圖ノ如シ小サキ小箱ヨリ摺附木ニ候哉長サ二寸 ノ如此モノヨリ火ヲ附煙草ヲ吸歩行候名ヲシガルト申候

石川本ニハ備向ニ就キテノ觸達ヲ記セリ

一　仝十四日異人四五人上陸ス中ニマロント申名ノ異人寫眞鏡ヲ携參リ先日葬式セシ墓所最寄ノ景ヨリ增德院境内堂宮并日本人ノ姿ヲモ寫シ取此器械ハ壹尺四五寸四方ノ玉板ヲ入其板ヘ雲母ノ樣ナル白キモノヲ塗付箱ヲ据付ノ臺ニ載セ置寫サントスル人ヲ前ニ立セ後ノ方ノ目鏡ヨリ覗キ見ルナリ箱中ノ玉板ヘ移ルヲ度トシ此板ヲ拔出シ油火ニテ能クアブリ玉板ニ塗附アル藥ヲヌグイ取ルトキハ鮮ニ其形樣移リ何年經ルトモ消

落ルコトナシト云

一　二月十五日今日再應接トシテ異人四百人程上陸行列等先日ノ如シ此日ハ公儀ヘ獻上物品々陸揚ス中ニ保命鑑一隻（銅作リノバ艇ッテエラ）火輪車（陸路人ヲ乘セテ疾ク走ルナリ）電信機（針命ヲ何丁ニテモ引張言語ヲ通ス）其他農具一式鋤鍬唐箕カラ臼萬石篩車仕掛ケノ礱石等ナリ應接場物置ヘ御入レニ相成

ペルリ日本遠征記所載前出

★原本ニハ製石トアレドモ礪石ナラン

知通曰ク　十四日夜川崎領海岸出役秋葉金次郎殿ヨリ明日應接ニ付其模樣見置トシテ同伴可致旨被申聞其夜八ツ時頃宅出立兩人ト小者壹人保土谷宿神明大門ヨリ戸部村通野毛山頂上ニ至リシ頃稍明★1六時ニテ碇泊船ニテ大炮一發打放シタル時ハ不意ニテ驚駭セシナリ夫ヨリ野毛渡場ニテ船頭小屋ニ見張ノ番兵ヘ申斷渡船洲干ヨリ畑中道ヲ通リ横濱村出役詰所人家ヘ着朝★2四ツ時頃駒形應接場ヘ罷越程ナク異人ハツテエラニテ上陸ス一番ニ音樂掛先着シ夫ヨリ鐵炮組ノ兵士船將ハ跡船ナリ嘗テ十日應接ノ模樣ハ粗承リシモ音樂ノ拍子鐵炮組ノ行列能ク其指揮合圖ノ屆キタル體實ニ感入ニ不堪候扨船將及都テ頭取トモ言人物衣裝ノ立派ナル事目覺マシキ出立チニ相見ヘ候豫テ應接掛御奉行方通詞方等前十日ノ如ク御出張ノ山支配役所ヨリハ田中第五郎殿杉浦武助殿山口茂左衛門殿モ先着有之其

★1午前六時

★2午前十時

★1 午後二時
★2 午後四時 佐久間修理ト異人乘馬ノコト石川本ニハ十九日ノ條ニ記載セリ
★3 午後十二時 石川本ニハ

他關東御取締出役關口園十郎殿吉田僖平次殿吉岡部助殿臨時見置トシテ出張有之而ルニ四ツ半時頃ヨリ雨降出シ傘神奈川ヨリ取寄雨ハ凌キ候得共晝喰辨當間似合不申故拙者ト大師河原内田左五右衛門（品川御臺場詰合中ニテ田中第五郎殿ト同伴ノ由）兩人空腹堪兼候故横濱村取付ニ飴菓子酒等商店ヘ參リ漸ク凌ヲ得候尤村内人家ハ異人立入ヲ恐レ戸ヲ鎖有之ヲ押テ申入酒喰致ス後ニ聞ク此家ハ（原見セト唱離レ家ニテ中山彌左衛門ト言人家）アリ夫ヨリ再應接場ヘ來雨止ミ東風烈シ應接八ツ時頃相濟異人は警衛場幕張ノ内（小笠原眞田）兩家出張人數ノ案内ニテ所々遊歩行椿ノ花茶ノ花等ヲ採參リ七ツ時頃元船ヘ歸ル此日眞田家陣場奉行佐久間修理ト申人馬乘ニテ駒形嘉平次ト申人家ヘ參リ居繫置申しシ馬ヲ異人借リ受乘馬セシカ天晴騎馬ノ心得アリシト言佐久間氏ハ年齢三十四五歳位色白ク顔長ク眼中尖ク髭ヲハヤシ黑羅紗ノ陣羽織ニ紺純子（繻）ノ踏込袴着用金作ノ大刀ヲ帶ヒ一際目立テ立派ナル人物ナリ能ク蘭語ニ通シ故ニ異人ト通詞ナシニ言語ヲ交ヘ又異人モ自ラ懇意スルノ體ナリ支配出役ノ衆一同七時頃ヨリ船ニテ神奈川旅宿倉本や方ヘ着夫ヨリ秋葉氏同道歸村渡田村太平方迄見送リ直ク歸宅ス夜九ツ時頃ナリ

一　二月十六日火輪車電信機工匠ノ異人十人程上陸ス組立ニ着手ス

取締ノ爲メ見廻リニ就テ記ス

★1 羅森ハ一ニ向喬トイフナリ
★2 遙ノ字脱漏ス

一　仝十七日仄カニ聞去ル十日又十五日ノ應接ノ問答彼國ヨリ請願スル小笠原島沖ノハダカ島并交易上ノ件ハ阿蘭陀漢土朝鮮右三國ノ外ハ祖宗ノ遺禁モ有之容易ニ許容成シ難ク殊更昨年武將新タニ宣命以來百般改令ノ日淺ク此際ニ於テ交易市場等ノ儀は取調出來難ク凡五六ケ年ノ間ハ何分ノ返答致し難シ併小笠原島沖ノ荒島新開ニ付薪水等ノ義は豆州下田港ニ於テ兎角ニ役人共ノ取計ヨリ談合可申假令明年下田表ヘ渡來ストモ交易ケ間敷儀ノ願ハ決テ不相成候且其國ノ船唐土渡海ノ節漂流シ本國ヨリ積來リシ薪水粮米欠乏シ我國ノ海岸ヘ漂着ノ節保護ノ義ハ相互ノ事ニ付承諾致ス只ニ信實ノ通義ハ天ノ公道人情ノ欲スル所ナリ尚其餘ノ義ハ來ル廿六日互相和樂應接ニ讓ルトノ事ニ有之由傳聞ス

一　二月十八日異人上陸ノ中清朝廣東ノ人羅森★1向喬ト申貳人詩文モ能ク書風美事ナリ横濱邊ニテ賦スル詩ニ

群峭碧磨天逈不★2計年撥雲尋左道倚樹聽流泉

春日題横濱公館　　廣東　羅森

有客滄浪咏平臨萬里流披胸羅宿海條足見神州

又清國乍甫ノ湊ヨリ出帆ノ途琉球八重山沖大洋中ノ作

火船駛向粤西東　此日昏登程霽色融　歷覽層山情不盡
遙看濶海目無窮　雙輪飛出蒼溟外　一舵輕浮浩蕩中
勢若騎鯨冲巨浪　快如奮翼振高風　月明遠卬琉球島
雪白横堆日本峰　身類渺然於天地　願與知音訴彼衷

甲寅春三月於火船即事一首

書於横濱之館　廣東　羅　森

此詩實ニ清朝ノ風韻有之其人の心中實情ヲ露出シ匂法格調整感ス可シ扨即時ノ詩ニシテ日本國ノ今二月ナレハ月日ノ異ナル譯ヲ聞クニ羅森ノ曰ク亞美理駕國ハ殷制建丑ノ曆ヲ用ヒ申候故日本ノ正月ハ二月ニ當リ今日本ノ夏制建寅の曆トハ一月ノ違ヒアリ羅森清國廣東の產ニシテ亞美理駕國へ暫時雇役セラレル ト言

一　十九日今日異人上陸の內★ウリヤコムト申異人アリ言語我日本ノ如シ此者生國ハ亞美理駕ニテ子細有之本國ヲ脫シ清國乍甫ノ港ニ居住ス而ルニ亞美理駕國王ヨリ度々歸國ノ命達アリシヲ其身ハ歸國セス弟ナルモノヲ返シ依然ト乍甫ニ居住致し居候當時日本天保年間ノ頃交易船ニ乘込長崎へ兩度參リ此者ノ乍甫住居スル宅へ日本肥前ノ國人

★「ウリヤコム」トアルハ「ウイリヤム」ノコトナリ通詞ウイリヤムノコト

ハ石川本ノ十七日ノ條ニ記セリ
ペルリ日本遠征記所載前出

三人尾張の國人三人漂流して彼ノ方へ食客トナリ久シク同居セシ故ニ日本の人情能ク承知致し居此ウリヤコムの咄シヲ聞クニ今度渡來セシ亞美理駕船日本へノ海上順路ヲ申サハ亞美理駕大合衆國ハ東西海ニ達し其內西界ハ日本へ相對シ江都ヨリハ辰ノ方角ニ當リ二十九度八度ノ內合衆國の西界加理科嚩哑(カリホルニヤ)省ト申所ヨリ有何理亡(アカリドンタン)ト申處へ渡リ此地方ヲ離レ太平海ト申大洋へ出是ヨリ日本へ渡リ候得ば江戶內海迄日數廿日路斗の海上ナレ共子細アッテ此度ハ太平海ノ洋中ヨリ北ニ向イ魯西亞國ノ近キ海路ヲ過テ滿州ヨリ清國の蜀州遼東ノ地ニ到リ夫ヨリ朝鮮國ノ南ヲ西ニ行過釜山ノ沖ヲ南へ通リ又清國ノ寧波ニ碇泊シ夫ヨリ乍甫ニ入港ス此乍甫ト申地ハ日本ノ長崎ヨリ海路貳百六十里日本道ニシテ有之由乍甫ヲ出帆シ琉球ノ地ヲ通リ其時ハ日本ト琉球トヲ左右ニ見シナリ夫ヨリ鬼界トモ云八重島トモ云薩摩ノ出鼻山川ノ間ヲ乘拔ケテ日向の國東南ノ出鼻ノ所ニテ北極ヲ觀ルニ三十度七分餘ニ見へ夫ヨリ丑寅ヲ指シテ當地へ參リ北極ヲ見レハ三十五度八分强ナリ是ニテ考レハ九州日向ニテ亞美理駕合衆國ハ辰ニ當リ當地ニテハ辰巳ニ當ルナラント言

石川本ニハ此觸達ハ十四ノ條ニ記

一　廿日異人少人數上陸別ニ變ル風聞モナシ本日御觸達し諸侯へ有之候書付寫

亞美理駕船渡來ニ付心得方ノ儀去ル丑十一月中重テ御達上意ノ趣被仰出有之候儀ニ付

載シ異船ニ般明後日下田ニ向ヒ出帆ノ觸達ヲ記セリ

諸向共油斷ハ有之間敷候處此節數艘近海へ碇泊致し候ニ付テハ此上應接之模様ニ寄萬一彼ヨリ兵端ヲ發し候儀無之トモ難申其節一同奮發致し候義ハ申迄モ無之事ニ候へ共異船滯留中御備向外見而已ニ拘リ夜中海岸へ提灯等數多附ケ置ク向モ有之趣ニ相聞へ疲弊モ不少義ニ付固メ人數差出シ面々番小屋等ニ要ス所ハ格別其外要害ノ土地見斗山蔭木蔭等へ屯シ可成丈ケ不見様ニ相心得行列ヲ正シ晝夜時々海岸ヲ見廻リ可申且又宿驛人馬遣イ方之儀モ可成丈ケ勘辨致し相減ノ様可致候尤既ニ屋敷々々ニ手勢用意致し置候分モ右ニ準シ外見ノ虚飾ハ一切相止メ士卒ノ鋭氣ヲ養イ候而取詰メ居大小筒配リ方之儀者勿論劍鎗手詰ノ勝負等實地ノ接戰專一ニ心懸候様精々行屆方可申付候

但大艦ヲ始メ諸般ノ御備向相替候上ハ猶改テ被仰出候品モ有之儀ニ候へ共方今指向場合ヲ以テ右之通リ被仰付候事ニ付面々必死ノ覺悟ヲ盡し實用ノ工夫可致候尤彌々彼レヨリ兵端ヲ開キ候節ハ小船ヲ以テ神速ノ勝負及候儀ニ可申之候

一　廿一日上陸ノ内異人壹人神奈川邊へ遊歩し附添ノ役人引戻サントスルヲ不聞入寺尾山へ登リ鶴見へ出夫ヨリ街道筋ヲ川崎へ罷越候ニ付豫テ六郷渡船場ハ船々六郷ノ方岸へ繫キ置河船渡舟ヲ促スモ不差出サ様注意ナシケレハ無據夫ヨリ大師河原平間寺へ參リ此處ハ立花飛彈守海岸警衛場本陣ニテ其掛役々モ詰合居尚附添横濱ノ方角ヲ指シ

石川本ニハ江戸南傳馬町竹河岸ヨリ出火ノコトヲ附記セリ

★1 サツプライ
★2 バアンダリヤ號及ビサウサンプトン號

テ引戻サントスルモ不聞入夫ヨリ羽田道作駒渡舟ノ方へ罷越ニ付色々道ヲ換竟ニ池上義田鹽濱ノ方堤通リ茲彼所ト歩行最早夕刻ニ至候其内通詞方追驅參ラレ應接之上漸ク立戻リ川崎へ出街道通リ生麥村ヨリ端舟雇揚本船へ送リ返ス

知通曰ク本日自分ハ川崎助郷會所ニ詰合居候處異人街道筋罷越候由村方ヨリ急飛脚ニテ知ラセ越し候折柄神奈川ヨリ川崎問屋場へ同様通達有之直チニ歸村セントスル通中小土呂丁ニテ異人へ役々兩三人附添且御支配山口茂左衛門殿モ御一同ニ而是非とも六郷渡船場へ乘船サセヌ様可取斗トノ御内談ニ付宿役人共ト急キ渡舟走付夫々手配致し夫ヨリ大師河原海岸ニ至迄彼ノ往クカ隨意同伴セシニ追々附添ノ役々疲レ果同行不叶七稲荷新田年寄藤兵衛ト拙者ト終ニハ貳人ニ相成甚タ困却致し候

一　廿二日亞★1美理駕船一艘追着ス是ハ兵糧船之由今日豫テ碇★2泊ノ中一艘出帆伊豆國下田港へ參ル是は應接ニ寄明年薪水ヲ授ル候爲メ同所碇泊場所等見置トシテ參ルヨシ本日江戸ヨリ天神丸御座船一艘應接場ノ東へ着船ス是ハ已後應接之度ニ御用相成積ニテ御廻し有之由

一　廿三日蒸汽車幷傳信機取附仕上ケ出來セシニヨリ應接小屋前ニ於テ運轉シテ之レ

ヲ日本役々へ一覽ニ供フ其形チ一ノ車銅鐵ノ箱ノ如シ烟出シ眞鍮ト銅ト二ツアリ左右ニ車輪二ツ宛具シ箱ノ如キ中ヘ湯ヲ湧シ湯氣ノ勢ヲ以テ運轉ス疾キ事矢ノ如シ之レニ連列セル車ハ雨覆アリ左右窓ハギヤマンヲ張孰レモ同樣ノ造リニシテ其數凡十輛程ヲ列車シテ走ル湯ヲ湧スニハ石炭ヲ焚用ユト云之レニ乘車シテ往來セハ一日ニ日本道百里餘ヲ通ルト言實ニ不思議ノ器械ニテ其工夫驚クニ堪タリ號テ連碟炭架連路ト言由

一　廿四日今日傳信機ヲ試驗セントテ異人上陸ス應接場椽側ヘ器械臺据付夫ヨリ三十間目毎ニ松丸太柱長サ壹丈餘ヲ建辨天前中山吉左衛門宅前迄凡道長九丁餘之所張銅ノ太キ糸ヲ柱ノ上ヘギヤマンノ臺ヲ乘セ一ツ々々卷付ケ其針金ノ糸ハ吉左衛門宅前ニ器械据付所ヲ補理扨其針金ノ末ヲ柱四本程ニ卷付中央ニ分銅ノ如キ重リアリ甲一方ニテ言語ノ文字ヲ半鐘ノイボノ如キ物ヲ指脂ノ先ニテ押ストキハ乙一方ヘ唱通し言フ所ノ文字ヲ指シテ當ルト云假令ハ千萬里ヲ隔ル地ニテモ針金サヘ及フ所ナレハ音信迅速ニ應答スト云實ニ工夫ノ極ト言ベシ

一　廿五日

神奈川沖滯留ノ異船ノ内蒸汽船壹舟明廿六日曉六ツ時頃出帆亞美理駕本國ヘ歸舟致し候間右之趣不洩樣相觸可申もの也

ペルリ遠征記所載前出

二月廿五日　美　作　　武相豆州海岸村々　名主年寄

一　廿六日今朝應接異人四百人程上陸行列先前ノ如シ但今日ハ奏樂二ツ組ニテ甞テ掛リ御役々ノ外御代官江川太郎左衛門樣幷御手附手代中方凡十人程御附添有之いづれモ羽織裁附袴等一樣之衣服ニテ立派ニ相見ヘ候異人ヨリハ過日來陸陽致し置タル諸器械荷物共御公儀樣ヘ獻上ノ品々取揃ヘ差上候又我國ヨリ被差遣候品々モ異人ヘ御渡し双方目錄書取替セ相成御公儀樣ヨリ彼國王ヘ被差遣候品は蒔繪ニシテ長持九棹有之候其他米貳百俵四斗八升入之レヲ被差遣ニ付相撲力士ヘ被仰付今日ヲ晴レト東西ノ大關ヨリ幕下關取迄人數八拾四人外ニ年寄九人罷越右之力士壹人ニテ或は壹俵ヲサシ上テ渡スモアリ又壹人ニテ二俵ヲ小脇ニ拘込持行モアリテ異人共力量ニ驚キ候容子ニテ夕刻迄ニ夫々渡し濟跡ニテ關取共相撲稽古等致し見物ヲナサシメタリ其人名末ニアリ

亞美理駕國大合衆國王　本朝公庭及諸官ヘ獻上品物目錄

君　王　江

一　小火輪車格式　連碟炭架連路

一　雷電傳信機　連　銅　線

一 銅保命小艇 一隻 頭尾有氣箱不能沈水
一 銅小艇 一隻 能過大浪不妨沈水以保命
一 極功花紅絨 一疋 十九尺長
一 花紅剪絨 一疋
一 玻璃銀蓋首飾箱 一個
一 亞墨理駕各處林禽圖傳
一 仝 嫋約省土產圖傳 凡十六卷
一 仝 大合衆國大會館史記 凡四卷
一 仝 嫋約省大小會館日記
一 仝 嫋約省律例
一 仝 海濱埠頭各地所理圖
一 農政二卷內敎耕田植樹養畜法則圖
一 亞墨理駕開國史記 四卷
一 建造光樓譜 二本 此樓建在海邊夜舟望見能入埠
一 亞墨理駕各信館名 一本

一 做火輪機法則 一本
一 嫋約省書院之書名
一 鐵火爐 一個 連筒能燒碟炭或式柴
一 千里鏡連架 一箱
一 數省地理圖
一 天秤量斗司碼 各器
一 烏鎗 五管
一 兵丁鎗 三管
一 馬甲劍 十二口
一 炮牛鎗 二十管
一 過山鎗 一管
一 信袋二個連鎖合 此袋國驛寄信用
一 香鹼香水 胴脂等ノ料ナリ
一 亞墨理駕白酒 一桶
一 三鞭酒 一箱

一　金櫻香酒　一箱
一　香白酒　一箱
一　頂上香茶　三箱
一　農夫各器具　數目別開
御臺御方ヱ
一　猫金玻璃粧飾箱　一個
一　香鹼香水胴脂香粉等料
一　繡花閃緞　一疋
以上
阿部伊勢守
一　墨亞國戰場圖傳　此圖盡每戰場之所
一　六響手鎗　六管　別兼火藥一桶
一　大烏鎗　一管　一馬甲劍一隻　連槳
一　鐵火壺　一個　能燒石炭及柴
一　大時辰鐘　一個　一亞墨理駕白酒　一小桶

一　香鹼香水等物　二十四件
一　頂上花紅絨　一疋
一　保命銅小艇　一隻　連槳
牧野備前守
一　亞墨理駕開國每戰場圖傳　二本
一　仝嬶約省博物院各物名土人衣服圖
一　仝嬶約省客樓一間畫圖　一幅
一　時辰鐘　一個
一　馬甲劍　一口
一　香鹼香水等物　十二件
松平和泉守
一　學建宮廟法則圖　一本
一　花盛敦京ノ圖　一幅　別有街道圖一幅
一　時辰鐘　一個
一　烏鎗　一管
一　三鞭酒　一桶
一　頂上香茶　三箱
一　六響手鎗　一管
一　大烏鎗　一管
一　亞墨理駕白酒一桶
一　馬甲劍　一口
一　六響手鎗　一管

一 香鹼香水物等　十二件

松平伊賀守

一 亞墨理駕娜約省史記
一 香鹼香水等物　十二件
一 馬甲劍　一口
一 六響手鎗　一管

久世大和守

一 建造鄉閭新屋法圖
一 金山大埠畫圖　一幅
一 大烏鎗　一管
一 時辰鐘　一個

內藤紀伊守

一 美呢蘇打省土產圖傳　二本
一 苟知敦村畫圖山水　一幅
一 六響手鎗　一管
一 亞墨理駕白酒　一桶
一 大火輪船圖　一幅
一 大烏鎗　一管
一 時辰鐘　一個
一 亞墨理駕白酒　一小桶
一 六響手鎗　一管
一 馬甲劍　一口
一 亞墨理駕白酒　一小桶
一 時辰鐘　一個
一 烏鎗　一管

一 亞墨理駕白酒　一小桶

林大學頭

一 亞墨理駕各所獸類圖傳　五卷
一 瓷器茶具　一大幅
一 頂上花紅絨　一疋
一 大時辰鐘　一個
一 大烏鎗　一枝
一 三鞭酒　一箱

井戶對馬守

一 學工藝各政　此書內能知各機法
一 香鹼香水等物　九件
一 櫻桃香酒　一箱
一 六響手鎗　一管

伊澤美作守

一 大火輪船ノ圖　一幅
一 香鹼香水等物　九件
一 頂上香茶　三箱
一 六響手鎗　六管　別兼火藥一箱
一 烏甲劍　一口
一 香鹼香水等物　二十四件
一 鐵火爐　一個　能石炭及燒柴
一 嫋阿連大埠畫　一幅
一 亞墨理駕白酒　一小桶
一 馬甲劍　一口
一 時辰鐘　一個
一 保命小艇格式　一幅

一　亞墨理駕白酒　一小桶
一　烏　鎗　一管
一　馬甲劍　一口

鵜殿民部少輔

一　象　圖　一幅
一　香鹼香水等物　九件
一　烏　鎗　一管
一　櫻桃香酒　一箱
一　六響手鎗　一管

松崎滿太郎

一　火輪舟圖　一幅
一　櫻桃香酒　一箱
一　馬甲劍　一口
一　六響手鎗　一管

以上

一　櫻桃香酒　一箱
一　六響手鎗　一管
一　香鹼香水等物　九件

一　亞墨理駕各信館住名
一　時辰鐘　一個
一　亞墨理駕白酒　一小桶
一　馬甲劍　一口

一　時辰鐘　一個
一　亞墨理駕白酒　一小桶
一　香鹼香水等物　六件

從我國公庭及諸吏　亞墨理駕人ヱ酬投品物頂箋

大統領ヱ

一　硯　筐　一幅
一　書　棚　一架
一　銀花銅牛香爐　卓附一座
一　挿花筒　卓附一具
一　紅光絹　十疋
一　花縐紗　十疋

整　使節ヱ

一　硯　筐　一幅
一　紙　筐　一幅
一　花縐紗　二疋

整　アヽタムスヱ

一　紅素光絹　三疋
一　髹　椀　二十幅

一　紙　筐　一幅
一　書　案　一張
一　香合筐　一具
一　暖　爐　二個
一　素光絹　十疋
一　紅纈縐紗　五疋

一　紅光絹　三疋
一　素光絹　二疋
一　紅纈縐紗　三疋

一　紅纈縐紗　二疋

整　ボツトメン　ヱ
三名　ウリユムス　ヱ
ネヘルリ　ヱ

一　紅素光絹　二疋ツヽ
一　紅纈綸紗　二疋ツヽ
一　紅纈綸紗　二疋ツヽ
一　糅　椀　二十副ツヽ
一　糅　椀　二十副ツヽ
蒸瀘車傳信機其外諸工匠五人ヱ
一　糅　椀　二十副ツヽ
乘組惣人數　ヱ
一　米　二百苞
一　鷄　鶩　三百隻
以　上
被進物　阿部伊勢守　松平伊賀守
牧野備前守　久世大和守
松平和泉守　内藤紀伊守
一　柳條峽絹　十五疋ツヽ
整　林大學頭

一　硯　筐　一副
一　紙　筐　一副
一　粉畫折筒紙　五箱
一　携　盆　一箱
一　呑水螺螺盃　七箱
整　井戸對馬守
一　餚　板　二枚
一　櫻　箒　三十本一箱
整　伊澤美作守
一　紅　綾　一段
一　素　綾　一段
一　竹　机二脚　二箱
整　鵜殿民部少輔
一　柳條縐紗　三段
一　醬　油　十陶一箱

一　美濃紙　一箱
一　五粉箋　一箱
一　珊瑚藻白毛　一箱
一　三套酒盃　一箱
一　雨　傘　二十柄二箱
一　人　勝　十三筒一箱
一　織竹各器　一箱
一　瓷　盌　二十筒

整　松崎滿太郎

一　瓷盞　三箱　一　花紋席　一箱

一　櫟炭　三十五苞

以上

一廿六日應接ノ砌異人ヨリ言上ノ旨意聞書

亞墨理駕合衆國使節補任アヽタムス謹テ申述ル今般統領始諸官欽差ノ面々對合ノ上貴國王都下近海へ渡來セシハ全ク交易ノ義斗ニ無之元來弊國ハ合衆ノ義ナレハ貴賤人民モ不同ノ所追々改革規定相立テ實情專一ニ政ヲ行ヒ理不盡ナル義無之就中先年英吉利洲國ヨリ襲ヒ來リ國城侵取レタル大領諸臣ヲ始人民一同ニ薄氷ヲ踏カ如キ日夜戰兢不少之處王ノ親族ニペヱルリイヽト申者有之此者子細アッテ少年ノ頃ヨリ海島ノ中ニ流罪セラル而ルニ彼ノ者配所ニ居テ日夜軍慮ニ心ヲ委ネ亞墨理駕東西歐羅巴三國無双ノ勇驍ト被稱赦免トナリシヨリ竟ニ國人ヲ師ヒ奇策ヲ以テ英人ノ侵地城都不殘取返し其節軍艦軍器等數多用意セシモ右英賊報伐ノ外ハ開國以來千八百五十餘年他國ト合戰セシ事無之尤弊國ハ歐羅巴ヲ始メ接境犬牙ノ地ナレバ時々隣國ヨリ襲ヒ來リ候節防禦接戰ハ毎度有之シハ止ムヲ得サル事ナレハナリ則チ亞墨理駕開國以來毎々戰場ノ地圖并英國ノ侵地墨西國戰ノ地圖傳記不殘入尊覽ニシ如ク將タ英國ト戰陣ノ砌相用ヒシ軍艦格式器械炮車刀鎗ニ至迄獻上仕リシ上ハ轉辨詐謀ヲ以テ貴國ヲ欺カザル弊國君臣ノ赤心明察伏テ希フ所ナリ扨今度願ノ筋ト申ハ日本國八丈島ヨリ遙沖ニ無人島ト申有之是ハ先年小笠原某切開キテ只今ハ小笠原島ト稱ヘシ由夫ヨリ日本道凡二百里ヲ南ヘハタカ島ト申アリ人民モ聊住居ノ容子ナリ之ヲ切開彼ノ人民ニ農業ヲ教ヘ且ハ弊國ヨリ清國交易渡海ノ碇泊場ニも致し度其島切開キニ付テハ水薪等暫時ノ間交易願上度之レモ新開出來迄ノ義ニ御聞濟可有之哉ニ略ホ承知罷在シモ國王何等ノ思召ニ候哉海岸御固メ嚴重ニ被相成殿陛下ノ御威光又御國法ノ義ハ無是非事トハ乍申私共渡來ニ付度々御應接有之碇泊日數モ永ク延隨テ無益ノ費用相增御氣之毒ノ事と存候斯盟約ノ上明心ヲ以テ誓言ヲ替セシ以上双方軍戰ノ生スル義ハ無之トハ存スルト雖モ前言ニ申暢ル通リ英賊ノ侵地トナリシヲ奇策ヲ以テ取返ス程ノヘヱルリイヽナレハ同氣相求ルノ譬ヘニテ其船ニ乘組居モノ共ハ兎角軍戰ヲ好ミ動モスレハ强氣發動有之シ故愚臣等誠ニ心配シ漸々申諭シ右ノ族は今朝歸帆致しタリ左スレハ手違イノ義ハ決テ無之甚タ憚ノ申分ナレ共万里ノ鯨波ヲ國都ト存双輪ノ鷲船ヲ居城トスル我々合戰致ス程ニ候ヘハ御國ニハ恐レ不申金城湯池モ炮煙中ノ蜃城樓ト消し直ニ國王ノ御側へ參リ合戰可仕候然ラハ明

年下田へ參ル節ハ御固メ等ノ義ハ御無用ニ被成度謀斗ヲ以テ海岸ノ防禦ヲ止メ置道具ヲ以テ其虚ヲ襲フ抔ハ詐僞ノ下策ニシテ韜略ノ士モ尙慙ル處ナリ況信義ヲ結ハントシテ來タリシ貴國君子ノ道誼ヲ求ムルモノニ於テオヤ國王茲ノ處ヲ賢察アッテ來年下田ヘ參ルトモ應接場所御定サヘアラハ小屋幷小切組其外一切此方ヨリ持來リ可申餘ハ廿九日應接ニ讓ルト云フ　今朝蒸氣一艘歸帆ス

一　廿七日異人ヨリ願ニ付昨日被下物ノ外ニ日置流ノ鐵砲三挺二十匁玉ノ內外ヲ賣渡シニ相成候代金ハ五兩以下ニテ御請取ニ相成候

一　廿八日風雨異人上陸ナシ

一　廿九日今日異人ヨリ日本ノ御役々ヲ船中ヘ招待饗應ス和人料理ノ由豫テ廿七日被進候金子ヲ以テ菜肴等取調ヒ用意ヲ設ケ且船中ノ大砲ヲ放し打樣ヲ御目ニ懸シト云御役々夕刻御歸陸ニナル

一　晦日早天異人百人餘上陸昨日船中ヘ御役々招待ニ付テノ御禮ナリト云今日上陸セシ異人ノ內マロント申モノ寫眞鏡ヲ持來リ增德院庭ニテ日本人ノ姿ヲ寫ス

一　三月朔日先月二十二日豆州下田湊ヘ明年渡來ノ節碇泊ノ場所見置トメ出帆セシ船二艘彼地用濟ニテ今朝横濱浦ヘ歸帆ス船中飼獸ノ食料ニ草ヲ苅採遣ス

五兩ハ鐵砲ノ代命ニアラズ明後日日本役人饗應ノ菜肴調料トシテ貰ヒ受ケシナリ

ペルリ日本遠征記所載前出

ペルリ日本遠征記所載前出

一　二日先達而異人ヨリ獻納シタル物品今日江戸表ヘ御差送ニ相成異人大勢上陸昨日ノ如ク飼獸ノ食料ニ爲ス迚草ヲ苅リ持歸ル明日ハ御暇乞ノ應接ナリト云々

一　三日今日ハ御暇乞ノ應接有之別段異人ヨリ御願筋は日本有名ノ三都拜見ト獻納ノ器械國王ノ御庭ニ於テ火輪船其他組立御目ニ懸度トノ申立ニ候處日★本國王即今政度維新ノ際ニテ諸役人モ多忙且國王ニハ齋中ニ被爲在殊更暇乞應接濟ノ上ニ候ヘハ其義取扱難被及旨ヲ以テ御斷ニ相成異人モ承知セシ由

一　四日異人多ク上陸ス其中ニ日本酒ヲ呑度由ヲ申村內所々歩行且ツ飴菓子店ニテ價四錢ノ菓子二ツ買代錢無之迚牡丹一ツ取外シ吳候得共跡ニテ御役人ヘ其旨申上ボタンハ御返しニ相成候

一　五日今日ハ亞墨理駕合衆國祭典ノ禮日ナリトテ船中終日酒宴ヲ催シ樂ヲ奏シ賑ハシク相聞ヘ候

一　六日上陸ナシ晝前大雨ナレハナリ

一　七日今朝四ツ時頃★異船一艘歸帆ス其風聞ニ日當年正月八日長崎港ヨリ出帆セシオロシヤ船本國ヘ歸帆セス九州四國邊日本海ニ漂泊シ此節ハ伊勢志摩三河ノ國沖ニ相見ヘ候由ノ風說ニテ自然此內海ヘ可乘入モ難斗右ヲ遠見トメ一艘出帆セシナリト言

日米和親條約調印ノ日ナリ

★將軍代カハリノコトナリ

四月二日ニ當ル復活祭ナラン

★ペルリ日本遠征記ニサラトガ號ニテアダムス報告ノ爲メ歸國ノ途ニ着キシコトヲ記ス

一　八日今日異人ヨリ大筒一挺獻上近日歸帆ノ由御警衛眞田侯人數五十人程歸府小笠原侯モ同斷

一　九日異人上陸ナシ此節異船見物人多ク立入候ニ付村方口留番人ヲ被申付候

一　十日異人上官ノ由久々船中ニ居テ土ヲ不踏氣分惡ク山野ヲ遊歩保養致し度且ハ當地ノ名殘モ惜ク自由ニ村内人家等ヘモ立寄氣晴シ仕度トノ願濟ニテ今日ハ上官ノ面々美服ヲ着シ大勢上陸洲干島ヨリ太田屋新田川添ノ堤土手上ヲ南ヘ行山手ノ方ヨリ所々見物致し畫★九ツ時頃增德院ヘ參リ夫ヨリ名主德右衛門方庭上ヨリ坐敷ヘ上リ上席ニペルリ次ニアヽタムス次ニポルトメン右三人ハ床ノ脇ヨリ南ニ坐シ床ノ東ヨリ北ヘウリカン次ニウリヤムス次ニタアムスン右三人夫ヨリ中官ハ次ノ間都合十三人坐席ヘ上リ其他ハ外ニ居ル茶菓子ヲ喰シ燒餅ノ如キパント云ヲ食ス酒モ少々宛呑シナリ附添御役人ハ浦賀與力合原操藏殿ナリ

日本遠征記ニ面白キ日本觀ヲ記セリ

★正午

石川本ニハ異人ノ一人中山太郎左衛門宅ヲ寫生セシコトヲ記セリ

一　十一日合原操藏殿異船ヘ被參大筒ノ打方火藥等ノ秘術傳習アリシト云異人上陸ナシ

石川本ニハ亞墨理駕船

一　十二日今日ハ應接御掛リ林大學頭樣井戸對馬守樣其外共神奈川御旅宿御引拂御歸府ニ相成明十三日ハ異船モ歸帆スルト云

歸帆ニ關スル觸達ヲ記セリ

★午前八時

一　十三日快晴朝五ツ時異船七艘ノ内六艘出帆ス其次第ハ始メ蒸瀣船二艘帆ヲ懸ス火輪車斗ニテ東ノ方ヘ向發走ス次ニ壹艘ハ帆ヲ懸テ東南ノ間ヘ向テ出ル次ノ壹艘本牧鼻沖ヲ指シテ出又東ヘ取直し羽田沖邊ニテ碇ヲ下シ居而ルニ横濱ニ殘リシ船出帆セントスルニ際シ濱磯ノハネ岩ヘ乘懸進退自由ヲ得サル樣子ニ相見ヘ異人共大筒一發打放ス之レカ相圖ト見ヘ先ニ出帆シテ羽田沖ニ待受居リシ船ヨリパツテヱラ二艘矢ノ如ク漕參リ引出シ南ヲ指シテ出帆ス之ヲ見テ羽田沖ノ船々モ同ク南ヲ向走出小柴沖ニ至リ碇泊ス夫ヨリ廿一日迄ニ不殘異船歸帆致し候事

石川本ニハ十五日マデノ記事アリ

異國船渡來ニ付御用掛御役々

御老中　阿部　伊勢守
仝　松平　和泉守
御若年寄　本多　越中守
仝　本庄　安藝守
御目付　柳生　播摩守
仝　牧野　備前守
仝　松平　伊賀守
仝　遠藤　但馬守
浦賀奉行　戸田　伊豆守
仝　堀　織部正
御船手頭　向井　將監

應接御用掛御役々

御儒者　林　大學頭
大目附上席町奉行　井戸對馬守
調役　松崎滿太郎
支配組頭　黑川嘉兵衛
仝　辻茂右衛門

御代官　江川太郎左衛門
仝　齋藤嘉兵衛
仝　竹垣三右衛門
仝　勝田次郎
仝　林部善太左衛門

浦賀奉行　伊澤美作守
御目附　鵜殿民部少輔
通詞　森山榮之助
通詞　名村五八郎
通詞　堀辰之進
浦賀奉行組與力　香山榮左衛門
仝　中島三郎助
仝　松村源八
仝　合原操藏

横濱應接場御警衛

豐前小倉高十五萬石　小笠原大膳太夫

本牧海岸
因州鳥取高三十二萬五千石　松平相模守

浦賀大津海岸
肥後熊本高五十四萬石　細川越中守

三崎邊海岸
長州萩高三十六萬石　松平大膳太夫

小田原邊
在所高十一萬三千石　大久保加賀守

神奈川海岸
播州明石高八萬石　松平兵部大輔

仝　合原猪三郎
仝　豐田多太郎

外組同心等數名略ス

信州松代高十萬石　眞田信濃守

因州新田高三萬石　松平格之進
仝高一萬五千石　松平淡路守

金澤邊
在御陣屋高壹萬石　米倉丹後守

上同
江州彦根高三十五萬石　井伊掃部頭

豆州下田
駿州沼津高五萬石　水野出羽守

大師河原海岸
筑後柳河高十一萬石ヨ　立花飛彈守

羽田大森邊　阿州德島　高二十五萬石ヨ　松平阿波守
濱川邊　土州高智　高貳十四萬石ヨ　松平土佐守
高輪邊　薩州鹿兒島　高七十七萬石ヨ　松平薩摩守
鐵炮州佃島　播州姫路　高十五萬石　酒井雅樂頭
品川一ノ臺場　武州川越　高十七萬石　松平誠丸
仝三ノ臺場　武州忍　高十一萬石　松平下總守
上總富津邊　奥州仙臺　高六十二萬石ヨ　松平陸奥守
上總久留里　在所　高三萬石　黑田豐前守
仝大多喜　在所　高二萬石　松平備中守
仝佐貫邊　在所　高一萬六千石　阿部駿河守
仝飯野青木　在所　高二萬石　保科彈正忠
仝貝淵在所　在所　高一萬石　林播摩守
下總毛見川邊　下總佐倉　高十萬石　堀田備中守
銚子邊海岸　上州高崎　高八萬石　松平右京亮
御城大手　勢州津　高三十二萬石ヨ　藤堂和泉守

鈴ヶ森邊　豫州松山　高十五萬石　松平隱岐守
鮫州邊　越前鯖江　高五萬石　間部下總守
芝浦邊　作州津山　高十萬石　松平越後守
深川州崎　勢州桑名　高十一萬石　松平越中守
仝二ノ臺場　奥州會津　高二十三萬石　松平肥後守
芝增上寺　加州金澤　高百二萬石ヨ　加賀宰相殿
房州州崎　備前岡山　高三十一萬石ヨ　松平內藏頭
房州勝山　在所　高一萬二千石　酒井安藝守
仝舘山　在所　高一萬石　稻葉兵部少輔
仝五井海岸　在所鶴卷　高一萬九千石　水野壹岐守
仝勝浦　武州岩槻　高二萬三千石　大岡兵庫頭
仝一ノ宮在所　在所　高一萬三千石　加納備中守
下總濱村　下總生實　高一萬石　森川出羽守
東海道箱根山　勢州久居　高五萬石ヨ　藤堂佐渡守
御濱御殿　旗下御番組　貳十組交代警固

一　二月廿六日御公儀ヨリ彼國王并使節へ被進候物品ノ内米貳百俵船中へ被遣此持込應接場ヨリ波止場迄ノ間持運ヒヲ相撲力士共御呼寄セ命セラル、依之角力年寄重立候者九人并東西大關以下出張セシ名前左ノ通

筆頭　雷　權太夫
筆脇　追平風喜太郎
組頭　境川浪右衛門
組頭　玉垣　額之助
仝　待乳山循之丞
仝　富士島　甚助
仝　廿山　重五郎
仝　伊勢ノ海五太夫

番附帳元根岸治右衛門

東ノ方

大關　小柳　常吉
關脇　猪王山森右衛門
小結　雲龍　久吉
前頭　荒熊　力之助
君ケ獄　助三郎
雲早山　鐵之助
御用木雲右衛門
響灘　立吉
荒岩　龜之丞
谷嵐　市藏
以上幕ノ内力士也
幕下　和田ケ原甚四郎
龍ケ峰　柳吉
彌高山　鐵之助
鶴ケ峰　五郎治
立田野　吉藏
氷室山　市五郎
鬼ケ崎　勝五郎
大蛇潟　浪五郎
九紋龍　平吉
大濱　喜太郎
男山　軍治
沖ノ濱　勝藏
松ケ枝　喜三郎
登龍山　米造
立神　市五郎
武者ケ崎　利介
三ケ濱　政吉

高根山　力藏
五人張　松五郎
勢イ　伊勢松
浪車　万吉
角田川　與吉
大角　大藏
朝日川　金藏
鬼ケ崎　辰吉
香取潟　卯八
白旗林　助
叶山　福松
竹山　荒吉
八重鱗　吉藏
御用松　福松
立岩　金太
以上

西ノ方

大關　鏡岩　濱之助
關脇　常山　五郎治
小結　階ケ獄龍右衛門
前頭　荒馬　吉五郎
六ケ峰　岩之助
黑岩　重太郎
象ケ鼻　灘五郎
一力　長五郎
寶川　石五郎
黑崎　佐吉
以上幕ノ内力士
幕下　花籠　平五郎
箕島　邦五郎
玉川　浪五郎
荒鹿　幸之助
高越山　谷五郎
三之海　茂八
勢兒山　粂八
假名頭　粂吉
大見崎　大五郎
朝日野　松五郎
所緣山　次郎吉
三吉山　佐吉
明石潟　浪五郎
殿リ峰五郎
御所ノ浦兵太夫
勝時　米藏
岩ケ峯　岩吉
雷ノ音　平五郎
都山　万吉
白眞弓肥太右衛門
西國　竹松
新川　定吉
三浦潟　福松
星甲榮　吉
西嵐　三吉
朝川　平吉
白瀧　三次郎
濱渡　熊吉
大野潟　熊七
鹿島潟　松藏
鏡潟　民藏
大崎　大八
以上

横濱村海岸字洲干又駒形ト申寄州ノ場所ヘ應接場假小屋俄ニ補理異人上陸ノ度々此所ニ於テ役々應接有之其邊皆炮場ニメ警衛は眞田信濃守信州松代陣代家老望月主水陣場奉行佐久間修理ト申方ノ由此佐久間ハ大儒ニメ外國學ニ通曉シ異人トノ應對通詞ヲ辨ス或時ノ咄しニ曰ク

凡南極星ヨリ北極星マデ其間七十二度ナリ此一度ト申ハ六町ヲ一里トメ四十里ナリ乃チ一度ノ丁數二百四十丁ヲ日本道三十六町一里ニ見做ストキハ里數六里廿四丁ナリ却説南極北極ノ其間七十二度ノ丁數ハ一万七千二百八十丁之ヲ日本道里數ニメ四百七十七里廿八丁ト但金尺ノ法ナリ我江戸府ニ考見レハ北極星ハ三十六度上ノ天ニ見ヘ南極星ハ三十六度下地ニ入テ見ヘス江戸ハ北極ヘモ南極ヘも三十六度ニメ南北星ヲ斗計ルトキハ星迄八千六百四十丁日本道二百三十八里廿三町トアリ天ノ高下ヲ知ルニハ北ノ方ヘ眞直ニ九千丁乃チ日本道廿五里十八丁往キ見ルトキハ天ノ高サ最モ高シ次第ニ北ヘ行程天高ク又南ヘ行ク程其理ニ因テ高下ヲ反ス南ノ方ハ天低シ故ニ日本ノ國ハ南ヘ突出シ延岡ノ城下ニ至リ北極星ヲ見レハ三十一度位ナリ又奥州津輕三馬屋ノ岬ニテ北極星ヲ見ルトキハ四十二度位ナリ夫ヨリ蝦夷アツケシノ地ニ至見レハ五十度餘又韃靼タライカキノ地ニテハ五十五六度ナリト云

亞墨理駕ノ内合衆國ト稱スルハ今ヨリ三百年餘前ニ歐羅巴人此洲ニ渡リ開拓セシ國ニテ當時ハ新地球國ト號セシモ追々住民繁昌ノ地トナリ統領ヲ置治民政治ハ歐羅巴ニ於テ統轄セシヲ七十九年前（ヨ本國ノ安永ノ頃）獨立國トナリ大統領ヲ置キ合衆國共和政治トナリ嫋約省ノ地ニ華盛頓ト號ケ都府ヲ立百官有司政治ニ關シ暦ノ制作ヲ改メ殷ノ湯王ノ禮ニ同フシテ北斗星ノ杓丑ノ方ヲ差シテ夜ノ明ル時ヲ考ヘ正月元朝トナス是ハ暦司家ニテ申ス殷制建丑ノ權歩ト稱スヲ月ニテ只今ノ十二月ナリ是迄用ヒ來リシ歐羅巴ノ紀年北斗星ノ柄寅子ノ方ヲ建シテ夜明ル時ヲ正月元日ト致スコトハ止メ只其儘用ヒ候ハ歐羅巴開國ヨリノ紀年千八百五十何年ト之斗ヲ舊號申來リ候由合衆國ノ正月元朝ハ歐羅巴ノ十一月廿五日ナリ日本ノ十一月廿八日頃ナリ日ノ違イハ閏月ノ割方ノ節ニ差アレハナリ日月出入潮ノ滿干ニテ考見レハ合衆國人ノ日割正シキニ似タリ

此度渡來セシ亞墨理駕船名

一　大蒸氣船名　ハシテウナン　長四十五間　胴横十三間半　帆柱三本立中程甲板上ヨリ三十五丈

船將使節ペルリ　通詞ウリュムス　乘組人數三百五十三人　大砲十二門

一　同　船名　メシンペ　長四十二間　前同斷　大砲十八門

仝副使　アヽタムス乘組　二月廿六日歸帆

一　同　船名　サシクヘナア長三十八間　前同斷　大砲同斷
　　船將　ブカナン乘組
一　軍艦　船名　サフベムデン　大砲　四挺
一　同　船名　マシトニアン　仝　二十二挺
一　同　船名　レキシケン　仝　二十六挺
一　同　船名　サラトカ　仝　二十二挺
一　同　船名　ウフカ　二月廿二日來　三月七日歸　仝　二十二挺
右軍艦何レモ長六十間位有之

一　亞墨理駕合衆國當時大統領姓ハ斐瑛名ハ美諫ト申候由
　船將彼理渡海中ニ賦セシ詩ノ由　知通
　海城寒折月昇潮　波際連檣影動搖
　自是二千三百里　北辰星下建銅標
　伊豆の下田浦に於テ富嶽ヲ詠て
おもひきや八しほ路こえて此國の富士の高嶺の雪を見むとハ
詩歌共ニ感スルニ堪タリ
　當時騒かしき我國のむかし弘安の頃北條氏
　時宗の筑紫にて征伐ありし事を思ひ出てよめる
いまもなをたへすまもらハこと國の船吹かへせ伊勢の神風

使節派遣の趣旨書

亞美理駕大合衆國大統領斐瑛美諫謹テ捧於書

日本國殿陛下ニ貴體平安ニ可被成御座ト可尊可敬良友ト可申也今般別段ニ本國ノ兵船大臣海軍惣將彼理ヲ差出シ一組ノ兵船ヲ引統シ國書ヲ携ヘ貴國ノ境迄相越シ改テ殿陛下得尊覽相備候我等心中前ヨリ貴國ト通好致置度實情取次申述候ニ付殿陛下ノ疎異ニ不忠事ヲ願フ今度兩國親友懇交ヲ取結ヒ國ヲ治メ且ハ通商ノケ條相定メ度存候今般欽差役彼理ヘ申付貴國ヘ罷出右二ケ條取扱フ爲ニ君主殿前ヘ御通し申候尤吾合衆國新定ノ規法ニハ諸役人異國ノ政禮杯差越シニ妨候儀ハ嚴重ニ禁制仕候今度明白ニ申付候貴國在留中貴前人民杯勞役擾動致サセ間敷トノ事也扨當時合衆國ノ廣太ナルコトハ其東西ノ邊

境ハ皆大洋迄達シ其内西界ハ日本國ト相對シ若シ火輪船ニ打乗加理料爾啞省ト申地方ヲ離レ亦有呵理部ト申地方ヨリシテ太平海ヲ馳セ越シ候ヘハ晝夜十八日ニシテ貴國湊迄到着致し候合衆國ノ一省ニテ其名ヲ加理料爾啞ト申地ハ產物多ク毎年黃金ヲ出ス事四千万兩程白銀水銀寶物等ノ珍物同樣ニ多ク出產シ日本同樣ニ寶物澤山出產シ人物モ聰明利發ニテ藝能モ多ク候也此隣接ノ地双方互ニ往來セハ大利益ヲ得ルコト疑ナシ我等同シクハ此訣ニ付交易ヲ開カント存候爰ニ兼テ相心得候ニハ日本國古來ノ掟ハ只唐土阿蘭陀國ノ船ハ通商差許サレ候ヘ共彼兩國ノ外別國ノ船一切湊ヘ入ルコトヲ許サレス乍去世間ノ情欲萬國ノ政事モ追々古例ヲ改革致シ候テ新法ニ取換候ヘハ諸替候儀多見當候其上貴國ニテ最初古例御取定被成候時分ハ合衆國未タ新地球ト號ケ候假名ノ事ニ候ヘハ歐羅巴國ノ人物其他懸離レ出入住居致土地ヲ開キ新ニ恒作等致彼地ニ在住良久其時分ハ人民モ少ク且ハ貧シカリシカ只今ハ民生日ニ繁昌シ交易モ年ヲ追テ盛ニ所々ヘ通行致し候此等ノ儀陛殿下ニテ委細御承知ノ義ト存候若シ古來仕來リヲ改メ我等ト兩國通商御免有之は双方共ニ大利益ヲ得ル事ナラン夫共ニ君主ニハ只々古來ノ例ニ隨ワレ異國船漫リニ入津御許シ無之候ヘハ御國法ニ照合先數年驗シニ取用被成五年十年ノ内ニ及候得は差支ノ義有之間敷利益御承知ナルベク或ハ又賣買等一向無益ニ思召候

得は又候古例御引戻シニテモ不苦元來本國他國ト約定取極候テモ數年通商致し兩國ノ志願不叶トキハ又々新約ニ立歸候左候得は數年ノ内各如何ノ模樣ニテ來ル心底モ知レ可申候扨亦此欽差役ヘ申付殿前ヘ申述候ハ本國船加理料爾啞ヲ出帆シ唐土ヘ罷越シ候者極テ多ク貴國ノ邊境ヘ近ツキ候事モ有之此等ノ諸船若哉颶風ニ出合繫碎ケ海邊ニ漂ヒ候節船ハ損シ候共乘組ノ者積荷等別條無之トキハ我等ニ於テ是等ハ賤民ノ生命ニ懸リ候事ニテ依之考ルニ貴國ノ官吏人民杯此等ノ人ト船トヲ見懸ケ能キ程ニ安堵撫恤ヲ加ヘ營テ仁惠ヲ施シ人モ物モ皆能ク保護シ留置被成本國船ノ來ル節ヲ待合セ連歸リ候樣致し度候其上本國ノ民ニテモ同シ人民ニ候ヘハ御愛愍被下候得は忝奉存候扨聞及ニは貴國多ク石炭ヲ出產シ食料モ澤山ノ由夫故ニ此欽差役ニ篤ト申付直ニ言上致サセ候本國火輪船太平海ヲ渡リ唐土ヘ行ク者其石炭ヲ燒キ候事數万斤ニ及候然ル處其船中ニハ多クハ積載セ難ク途中ニテ取用引足リ不申候ヘハ夫レニ次立候手段無之併本國迄戻リ候事殊ニ不都合ニ候ヘハ夫故此諸船貴國ノ湊口ヘ入津致し石炭食料ヲ買求メントシテナリ其諸物貨買候ニは或ハ金錢ニテ償ヒ或ハ諸品ニテ取換候テモ宜ク願筋ハ君主御議定ノ上貴境ノ湊口壹ケ所定置被下本國ノ暫時船繫致此調度買取且ハ食料薪水ヲ取貯候樣致し度此義ハ可相成丈ケ急速ニ御許シヲ受我等ヲシテ遠望ヲ遂ケ決心ヲ得サセシ

使節全權委任狀

メヨ今度欽差役彼理ヘ申付一組ノ兵船ヲ引連貴國ヘ相越し江戸ト申名京ヘ行キ我等ニ替テ拜謁シ兩國朋友ノ情ヲ投シ貿易ノ道ヲ開キ艱難ノ人民ヲ保護シ憐愍ヲ希フ也上件ノ諸事ヲ除候テハ外ニ此欽差役ノ者別ニ替リタル志願ハ無之候又船中ニハ本國藝能ノ大產布帛數件積越し候是ハ君主ヘ晉呈致し候御覽ニ足ラヌ粗品ナレトモ御納收被下我等友ヲ戀フ眞實恭敬ノ驗ヲ御承知被下度偏ニ希フハ善能具備ノ眞神君主ヲ保護シテ萬福ヲ受サセヨ聖感伏希

此國書ハ是本國ノ大玉璽也名印モ照明

亞美理駕大合衆國ノ都ハ華盛頓ト申處ニ有之

西洋年一千八百五十二年十一月十三日ニテ即壬子十月初六日ニ封ス

亞墨理駕大合衆國大統領性ハ斐瑛名美諫申述候

日本國大君殿陛下彌々平安ニ被成御座候儀ト奉存候此度我等心中ノ事ヲ水師提督彼理ヘ申付置ク此者儀は見識端正ニシテ才能有之家來ニ付今般別段欽差役申付諸事取扱致サセ大合衆國惣名代トメシテ貴國差遣ノ大君ノ御用掛御家來ト相談致し兩國和睦ノ商イ固ク取極メ候爲メニ船ヲ馳セテ湊口ヘ着岸サセ候且又右等ノ條約規定并大切用向ノ義ハ皆取扱ノ役人トモ双方宜ク熟談取極メ候而後モ欽差役即刻身罷越し候ヘハ我等大臣ト評議治定致し承知之旨書面ヲ以申進し候也

亞美理駕大合衆國ノ都ハ華盛頓ト申處ニ有之候歐羅巴紀年一千八百五十二年十一月十三日又吾國政ヲ立シヨリ七十七年即チ壬子十月六日ニ御座候此書無相違爲證

據名并花押印章相用候

大學士依斐蒙烈賴書

右ノ二通書翰ハ本國ヨリ持參ニ御座候後ノ數通ハ今般渡來ノ惣將自ラ海上ヨリ認メ差上候書ナリ

亞美理駕大合衆國欽差役大臣兼管本國師船日本水師提督彼理大切ノ事ヲ述候爲メニ本國欽差役者本國大統領ノ申付ヲ受諸事取斗致し一組ノ軍艦ヲ浮テ日本ノ境ヘ渡來致し候　大皇帝殿陛下ヘ書翰ヲ差上兩國和睦條約ヲ申述候依之本國王ノ書翰并本欽差役書翰二通封印ノ儘ニテ大皇帝御目通其節ヲ待テ御覽ニ入可申候此書ハ別ニ可申述候扨★我國王前ニテ被申付候吾★國王ヨリ陛下御安全ニ思召候樣思慮致し候故ニ可申述候吾★國王兼テ久シク承リ候吾國ノ人民自分思ヒ付貴國ヘ罷出候者共或ハ大風ニ逢漂流致し貴國海

★大統領

岸へ着致し候者仇ノ如ク御取扱被致候ニ付吾國王甚タ心配被致候只今ヨリ數年前船三艘名嗎唎嚩嘟咖嚇吐等ト呼候人々ノ船貴國海岸へ漂着ノ節彼是御取扱ノ委細ヲ承知致し欽差役王命ヲ受ケ陛殿下へ申述御許容ヲ願和約御承知ノ上ハ吾國ノ船貴國海邊へ漂着致し或ハ暴風ニ吹流サレ湊口へ着し候テモ仇敵ノ如クニ無之様致し度且又貴國ノ船吾國へ漂流致し候ハヽ船中入用ノ品助力シ貴國へ返し遣し申候況西國歐羅巴ニテハ我國ノ官民ヲ取扱ニハ緒テ人倫爺蘇ノ如ク心得居シ故船壞レ人ノ死亡ハ相救候事ニ御座候是等ヲ御鑑察可被下候且吾國ハ歐羅巴諸國懇意盟約ノ國ニハ無之候得共昔且加之吾國ノ法度ハ他國ノ人民ノ敎ニハ拘リ不申候況他國ノ政ヲ亂し候事ハ無之候本國之儀ハ三百年已前歐羅巴始テ貴國へ渡來セシ頃ヨリ吾國ニ來リ住居シ土地ヲ開キ只今ニ及候而ハ大邦ニ成リ日本歐羅巴ノ間ニ在テ東西海ニ連リ歐羅巴人ハ早ク東方ニ居住シ今ニテハ人民繁昌シ國ノ西界ニ至テハ日本ニ相對シ火輪船ニテ太平海ヲ渡リ候ヘハ晝夜十八日ニシテ貴國ノ境ニ到着致し候當時天下一統ニ交易ハ追年ニ繁昌シ貴國ニテモ湊ハ船多ク相見ヘ貴國ノ役人吾國ノ人民仇敵ノ如ク御取扱被成候様ニ相見ヘ吾國ヨリ大皇帝ト兩國和約ヲ定メ御懇意ヲ得度候昔貴國御法度ヲ設ケ異國ノ船ハ湊口へ入事ヲ御制禁被成候砌ハ善政明戒ニ候ヘ共只今ニテハ吾國近隣ニ相成往來モ容易ニ御座候ヘハ昔ト

今トハ時勢不同御善政ニモ古例ノ掟ニ準ス可ラサル義ニテ本欽差役相考候ニハ陛下儀定當時ノ大概鎭亂ヲ御考察被成候テ此理ニ隨ヒ直し實ニ和約御定候得は兩國共ニ兵端ヲ惹起ス事モ無之ト存候依之四艘ノ小船ヲ艤ヒ御府内近海へ渡來致し和約ノ趣意御通達仕候本國此外數艦大軍艦有之候間早速渡來可致候間右着船無之前陛下御許容被成候様仕度候若シ和約ノ義御承知無之候ヘハ來年大軍艦取揃早々渡來可致右ニ付只今相願候義御承知被下度吾等條約取極候後大切之用事モ無之大軍艦渡來不致候且又我國王和約規定書翰持參仕候是ハ御指圖ヲ受御目通ノ節直ニ入御覽候大皇帝貴重ノ尊體御萬壽無限様祈候是等ハ御府内ニ至リ可申述候

癸丑六月初二日

亞美理駕大合衆國欽差大臣兼管本國師船現留伯日本海水師提督彼理再追白ス今度日本大君ノ仰附ラレヲ捧ケ見斗ヒ模様ニ隨ヒ程能其事ヲ取扱仲違無之様懇意致し向後ノ規定取定必日本大臣同ク熟談ノ以後何月何日頃京師へ至リ大皇帝ニ御目見ヘ致し亞美理駕本國王ノ來書二通持參謹テ日本國王へ御覽ニ呈シ候様ト大臣へ被申付早々日限ヲ取定メ互ニ評儀可致敬テ三日ヨリ能返事ヲ待ナリ

癸丑六月七日

敬而致啓上候此度持來公書一封ノ內種々重キ大切之儀ヲ謹テ申述候其事當御國ノ事變ニモ連及申ニ付能々御用心御手落無之樣御分別可成候希クハ當御國ノ重キ御役人中御諒心ヲ以國家長久之箇條御評議可有之事ト存候爰許用掛出役ノ者充分落附來ル三月頃ヲ待テ夫々ノ船ヲ連ネ江戸ノ海へ乘込右ノ御報簡ヲ受取可ク其後全ク拔目無之約束ヲ立テ當國ト我國ト永長和睦可致ト爰ニ申述候間後日能返事相待申候也

癸丑六月八日

本國火輪船司名ハ蘇士玄牢
船軍惣大將彼理在江戸海

そのときのことごとしけるをおもひいてゝ　知通

つハらかにかきしるしたる日次には世のあらましも知られぬる哉

亞米利加船渡來日誌終

昭和四年六月廿五日　印刷
昭和四年七月　廿日　發行

亞墨理駕船渡來日記

【非賣品】

不許複製
檢印

編著兼發行者　横濱市神奈川區岡野町百二十番地　石野瑛
印刷者　川崎市新川通三十二番地　福原清八
印刷所　東京市京橋區桶町三十番地　單美社

發行所　横濱市神奈川區岡野町百三十一番地　武相考古會

特許印刷　單美プロセス

108-24

「武相叢書」刊行の趣旨

關西と關東とは我が國史上の二大文化圏である。而して近畿の文化は前者を代表し、關東文化圏の中心をなすものは武相の文化である。

此の兩大文化圏は過去に於て相對立した業績を擧げて、共に今日の日本文化を形成したのである。即ち西國が韓や唐の文化を收受して、我が國固有の文化と和合せしめたのに對して、東國は泰西の新文化を輸入し、之れを齟齬消化して全國に及ぼし、東西古今の文化を融合する先驅をなしたのである

武相の地は古代久しく蝦夷との接觸地點であり、平安末期に及んでは武士興起の地であつて、其の住民は古來質朴剛健を以て聞ゆ。蓋し所謂武士道發祥の地として「相武の二州は能く天下に敵す」なる語は既に鎌倉時代以來人口に膾炙せる所以である。又鎌倉、小田原、江戸は政治上或は文化上の中心地となり、幕末黑船渡來に至つては浦賀、横濱は外交折衝の地となる。

如上の意味に於て武相は實に天下の武相であり、隨つて國史研究上考覈檢討すべき資料が極めて多い。それ等貴重なる資料を蠹蝕に委し、湮滅に歸せしむるは頗る憂ふべきことで、又往年の災厄に省みても眞に寒心に禁えぬ。茲に於て本會は數多き資料中、武相文化史研究上價値多きものを撰び「武相叢書」と稱し逐次上梓刊行せんとす。幸に諸賢の援助を冀ふ。

昭和四年一月

武相考古會

刊行豫定書目（刊行順序不同）

亞墨理駕船渡來日記　相模大山寺緣起と文書
横濱近郊古圖文書　文政年間圖繪金川砂子
鎌倉古社寺記錄文書　横濱吉田新田史料
箱根關所關係文書　武相金石文集